

令和4年度厚生労働省補助金事業

看護業務効率化先進事例収集・周知事業

報 告 書

令和5(2023)年3月

公益社団法人 日本看護協会

目次

I. 事業概要.....	1
1. 事業の背景と目的	1
2. 事業内容	1
3. 実施体制	1
II. 看護業務の効率化に資する先進的取り組みの収集・選定・表彰	3
（「看護業務の効率化 先進事例アワード2022」の実施）	3
1. 看護業務の効率化に資する先進的な取り組みの収集	3
2. 看護業務の効率化に資する先進的な取り組みの選定	5
3. 表彰式・事例報告会の開催.....	7
4. 都道府県看護協会と連携した看護業務の効率化推進事業	10
III. 看護業務の効率化に資する先進的取り組みの周知・普及	12
1. 看護業務の効率化試行支援事業の実施.....	12
2. 看護業務の効率化に資する先進的取り組みの紹介動画・事例集の作成	15
3. 本事業の周知	16
4. 「看護業務効率化先進事例収集・周知事業の認知度等に関する調査」の実施	17
IV. 資料	19
資料1 「看護業務の効率化 先進事例アワード2022」応募施設の属性	20
資料2 応募施設取り組み概要	24
資料3 本事業の周知活動一覧	27
資料4 「看護業務効率化先進事例収集・周知事業の認知度等に関する調査」 結果について	29
資料5 「看護業務の効率化 先進事例アワード2022」受賞施設の取り組み	43
資料6 看護業務の効率化試行支援事業 試行実施報告	123

I. 事業概要

1. 事業の背景と目的

医療現場においては、看護職のみならず、医師、コメディカル等、医療従事者全体の働き方改革が喫緊の課題となっている。2024 年 4 月には、医師の働き方改革が本格的にスタートし、時間外労働規制が適用される。国は国民の受ける医療と医師の両方を社会全体で守っていくという方針を掲げている。医師と協働している医療従事者の中でも、医師のタスク・シフト/シェアを期待されているのが看護職であり、看護職が医師の働き方改革に多大な影響を及ぼすと考えられている。そうした背景のなかで、看護職員がより専門性を発揮できる働き方の推進や看護サービスの質の向上を図るためには、看護業務の効率化が必須となっている。

そこで、本事業は看護業務の効率化を目的とし、その目的達成に資する医療機関等の取り組みを募集し、選考委員会を設置して先進的な取り組みを選定し表彰している。また好事例を積極的に周知するとともに、本事業で表彰された先進的取り組みを他の医療機関等でも実施できるよう試行支援事業を行っている。

本事業では、看護業務の効率化によって生み出された時間を自己研鑽や、患者・利用者への質の高い看護ケアの提供へとつなげ、またその過程で「時間外労働時間数の削減」などの看護職の身体的・精神的な負担軽減の実現を目指している。

2. 事業内容

- 1) 看護業務の効率化に資する先進的取り組みの収集・選定・表彰
 - ・看護業務効率化に資する取り組みを公募し、優れた取り組みを選定し、表彰する（「看護業務効率化 先進事例アワード」の実施）。
- 2) 看護業務の効率化に資する先進的取り組みの試行の支援
 - ・過年度の「看護業務効率化 先進事例アワード」において表彰された取り組みと同様の取り組みを試行する医療機関等を公募し、支援を行う（看護業務効率化支援事業）。
- 3) 看護業務の効率化に資する先進的取り組みの周知・表彰式・報告会の開催
 - ・紹介動画・事例集の作成
 - ・紹介動画・事例集のポータルサイトへの掲載

3. 実施体制

事業の実施にあたり、「看護業務の効率化・生産性向上のための支援策検討委員会」（選考委員会）を設置した。

＜看護業務の効率化・生産性向上のための支援策検討委員会 委員＞

委員長	： 尾形 裕也	九州大学 名誉教授
副委員長	： 山本 恭子	公益社団法人広島県看護協会 会長
委員	： 釜薙 敏	公益社団法人日本医師会 常任理事
(50 音順)	神野 厚美	社会医療法人財団董仙会 常務理事
	小坂 晶巳	社会医療法人財団慈泉会 相澤病院 副院長・看護部長
	園田 孝志	一般社団法人日本病院会 常任理事
	竹下 康平	東京慈恵会医科大学 総合医科学研究センター 先端医療情報技術研究部 助教
	任 和子	京都大学大学院 医学研究科 人間健康科学系専攻先端中核看護科学講座 教授
	福島 通子	塩原公認会計士事務所 特定社会保険労務士
	榎谷 京子	公益社団法人青森県看護協会 会長
	(2022 年 7 月～)	
	松田 美紀子	慶應義塾 塾監局 参与
	山元 恵子	公益社団法人東京都看護協会 会長
	(2022 年 4 月～6 月)	

オブザーバー 厚生労働省医政局看護課 看護サービス推進室

＜事務局＞

担当理事	： 森内 みね子	公益社団法人日本看護協会 常任理事
事務局	： 後藤 裕子	労働政策部 部長
	小村 由香	労働政策部 看護労働課 課長
	塩津 麻美子	労働政策部 看護労働課
	島田 奈津美	労働政策部 看護労働課
	紀本 恭子	労働政策部 看護労働課

Ⅱ. 看護業務の効率化に資する先進的取り組みの収集・選定・表彰

（「看護業務の効率化 先進事例アワード 2022」の実施）

1. 看護業務の効率化に資する先進的な取り組みの収集

看護業務の効率化に資する先進的な取り組みを広く収集するため、2022年7月1日～2022年8月31日に、看護職が勤務している医療機関・介護保険施設等を対象に、直近3年以内に看護業務の効率化において優れた成果・効果をあげ、医療・看護サービスの充実を実現した取り組みを募集した。募集に際しては、日本看護協会公式ホームページ、日本看護協会機関紙「協会ニュース」の他、都道府県看護協会、後援団体に協力を依頼し、ホームページやメーリングリスト等で周知を行った。その結果、52件の応募があった。

なお、応募の段階で、自施設の取り組み内容について、「1. 業務改善」、「2. タスク・シフト／シェア、多職種連携」、「3. AI・ICT等技術の活用」、「4. その他の工夫」の各部門にエントリーする形式を採用した。2022年度の部門ごとのエントリー状況は下表の通りである。

<部門ごとの応募件数>

部門	件	割合
1. 業務改善	19	36%
2. タスク・シフト／シェア、多職種連携	16	31%
3. AI・ICT等技術の活用	12	23%
4. その他の工夫	5	10%
合計	52	

<各部門の内容>

1) 業務改善部門

取り組み例)「看護記録の内容の標準化およびリアルタイムでの記録」により、時間外勤務の削減と退院支援カンファレンス開催回数の増加

2) タスク・シフト／シェア、多職種連携※部門

※タスク・シフト／シェア：従来、ある職種が担っていた業務を他職種に移管すること、または他職種と協働化すること

多職種連携：共有された目的に向けて他職種と一緒に働くこと

取り組み例) 病棟薬剤師との役割委譲・協働により、看護職の時間外勤務の削減

3) AI・ICT等技術の活用部門

取り組み例) 記録業務で音声入力機能を活用したことで、看護職および看護管理者の時間外勤務の減少とカンファレンスの機会が増加

4) その他の工夫部門

取り組み例) 「繁忙度表」を活用したことで、的確な人員の采配と応援体制を確立

※「看護業務効率化 先進事例アワード2022」への応募状況は、【資料1】応募施設の属性、【資料2】応募施設の取り組み概要一覧参照

2. 看護業務の効率化に資する先進的な取り組みの選定

看護業務の効率化・生産性向上のための支援策検討委員会委員から成る選考委員会を設置し、応募書類から厳正に審査を行った。

1) 審査方法

(1) 選考委員による書面審査（9月7日～20日）

本審査対象の取り組みについて、全選考委員11名が、4つの観点（先進性・先駆性、成果、効果、普及のしやすさ）と総合評価の5項目を各1～3点、15点満点とする得点評価を行った。

(2) 審査会の開催（9月26日）

全委員の得点を合算し、総合得点をもとに各賞の選考を行った。

<賞の種類・受賞施設数>

■最優秀賞（1施設）	
対象	先進的・先駆的な観点から、最も優れた業務効率化を実現した取り組み
方法	総合評価得点が最も高い施設とする。但し、得点が同点の場合は、評価のばらつき等を考慮して決定する。
■優秀賞（各部門 1施設）	
対象	各部門において、優れた業務効率化の取り組み ① 業務改善部門 ② タスク・シフト／シェア、多職種連携部門 ③ AI・ICT等技術の活用部門 ④ その他の工夫部門
方法	各部門の得点上位4施設程度の中から選定する。
■奨励賞・特別賞（各2施設）	
対象	奨励賞：部門を問わずさらなる努力により今後の効果が期待される取り組み 特別賞：部門を問わず独創的かつユニークな取り組み
方法	得点上位20施設の中から選定する。

2) 選定の結果

審査の結果、以下の 9 施設の受賞が決定した。

賞の種類（部門名）		施設名	取り組み名
最優秀賞		株式会社 Le-caldo 訪問看護ステーション トータルケア	365 日 24 時間の電話対応専属スタッフによる訪問看護ステーションにおけるタスク・シフト/シェア
優秀賞	業務改善	社会福祉法人 恩賜財団 済生会松阪総合病院	医療機器と電子カルテのデータ共有による看護業務の効率化～専従医療安全管理者の立場から～
	タスク・シフト/シェア、多職種連携	医療法人 鉄蕉会 亀田総合病院	特定行為研修を修了した看護師を中心とする PICC チームによるタスク・シフト～安心・安全でタイムリーな留置を目指した業務改善の取り組み～
	AI・ICT 等技術の活用	社会医療法人石川記念会 HITO 病院	患者の転倒・転落リスクを AI で予測し多職種連携で個別ケアを実践する！
	その他の工夫	社会福祉法人 恩賜財団 済生会支部 大阪府済生会千里病院	コロナ禍がもたらしたリリーフ体制構築の効果
奨励賞		国民健康保険 小松市民病院	コロナ禍だからできた もう迷わない！色別カテゴリ表記で新たな診療材料管理～看護部と物品管理センターの協働～
		地方独立行政法人 東京都立病院機構 東京都立多摩北部医療センター	年休取得促進のための計画助勤
特別賞		株式会社らふえる らふえる訪問看護ステーション	訪問看護における働き方改革: ICT 活用による直行・直帰制の実現
		トヨタ自動車株式会社 トヨタ記念病院	搬送ロボットを導入した看護師のカイゼン活動—トヨタ生産方式を基盤として—

3. 表彰式・事例報告会の開催

2023 年 1 月 19 日に、東京国際フォーラムにおいて「看護業務の効率化 先進事例アワード 2022」表彰式・事例報告会を開催した。なお、当日は新型コロナウイルス感染症の感染防止のため、会場には受賞者と選考委員等の関係者のみが参集し、表彰式・事例報告会の模様を配信するハイブリット形式にて行い、会場とオンラインを合わせて約 700 名が参加した。

第一部の表彰式の後、第二部では、最優秀賞・優秀賞を受賞した 4 施設の事例報告と試行支援事業に参加した 1 施設の実施状況の報告を行った。事例報告会ではチャットを通じて、視聴者との質疑応答を行った。

表彰式・事例報告会開催後、配信視聴者を対象に看護業務の効率化や受賞取り組みに関するアンケートを実施した。7 月に実施した本事業に関するアンケート結果と同様に、「記録の効率化」「多職種との連携、タスク・シフト/シェア」への関心が高いことが分かった。「すぐに取り組みたい」事例は、人員配置やリリーフ体制、業務整理に関するものであったが、「将来的に取り組みたい」の回答が多かったのは松阪総合病院及びHITO病院の AI・ICT を活用した事例であった。業務効率化を進めるうえの課題は「対応する人材の確保・育成」、「財源の確保」であり、こうした課題への対応策の検討や支援が必要である。



受賞施設の代表者および本会福井会長（前列）とプレゼンター（後列）による記念撮影

※本事業ポータルサイト (<https://www.kango-award.jp/>) に、当日の表彰式・事例報告会の様子を収録したアーカイブ動画を公開した。

■プログラム

第一部 表彰式 (13 : 30～14 : 15)	
13 : 30	開会
13 : 30～13 : 35	開会挨拶 日本看護協会 会長 福井トシ子
13 : 35～13 : 40	厚生労働省挨拶 厚生労働副大臣 伊佐進一
13 : 40～14 : 10	受賞施設の表彰 (表彰状・副賞の授与)
14 : 10～14 : 15	全体講評 選考委員長 九州大学 名誉教授 尾形裕也
14 : 15～14 : 20	記念撮影
第二部 事例報告会 (14 : 30～16 : 00)	
14 : 30～15 : 20	事例発表 (5 施設) ①最優秀賞 株式会社 Le-caldo 訪問看護ステーション トータルケア ②優秀賞 (業務改善部門) 社会福祉法人恩賜財団 済生会松阪総合病院 ③優秀賞 (タスク・シフト／シェア、多職種連携部門) 医療法人鉄蕉会 亀田総合病院 ④優秀賞 (AI・ICT 等の技術の活用部門) 社会医療法人石川記念会 HITO 病院 ⑤優秀賞 (その他の工夫部門) 社会福祉法人恩賜財団 済生会支部 大阪府済生会千里病院
15 : 20～15 : 30	試行支援事業*の実施報告 (1 施設) 社会医療法人社団沼南会 沼隈病院 「入院業務に関わる業務改善、タスク・シフト/シェア」 試行した取り組み 看護業務の効率化 先進事例アワード 2020 タスク・シフト／シェア 多種職連携 優秀賞受賞 「入退院支援の活動からつなぐ看護へー外来でのスクリーニングを看護計画に直結させる」 公立羽咋病院
15 : 30～15 : 55	質疑応答
16 : 00	閉会

試行支援事業* : 過去に「看護業務の効率化 先進事例アワード」にて受賞した取り組みの普及を目的に、受賞した取り組みと同様の取り組みを行う施設を支援する事業。

■後援団体（13 団体）

公益社団法人 日本医師会

公益社団法人 日本歯科医師会

一般社団法人 日本医療法人協会

一般社団法人 日本病院会

チーム医療推進協議会

一般社団法人 全国訪問看護事業協会

公益社団法人 全国老人保健施設協会

公益社団法人 日本薬剤師会

公益社団法人 日本精神科病院協会

公益社団法人 全日本病院協会

公益財団法人 日本訪問看護財団

公益社団法人 全国老人福祉施設協議会

認定看護管理者会

4. 都道府県看護協会と連携した看護業務の効率化推進事業

全国各地で看護業務の効率化の推進を図るため、2022 年度より本会支援のもと、都道府県看護協会が地域の特性や実情に応じた独自の事業を新たに実施し、下記 5 道県が参加した。

1) 実施期間

2022 年 8 月 1 日（月）～2023 年 3 月 31 日（金）

2) 実施内容

■北海道看護協会

事業名	IT 機器を活用した看護業務効率化の取り組み
実施内容	北海道所在施設の先進的取り組みを普及するため、過年度「看護業務の効率化 先進事例アワード」を受賞した北海道所在の施設の IT 機器を活用した 3 件について、北海道研究学会においてシンポジウムをハイブリッド方式にて開催した（11 月 26 日）。当日は会場とオンライン参加あわせて 726 名が参加した。シンポジウムにおける発表資料と質疑応答の内容を記載した事例集を作成し、北海道内の施設に配付した。

■青森県看護協会

事業名	看護業務効率化に関する報告会
実施内容	青森県内の施設から先進的取り組みを募集し、応募のあった 4 件のうち 3 件について事例報告会をハイブリッド方式にて開催した（11 月 22 日）。当日は会場とオンライン参加あわせて約 350 名が参加した。事例発表の内容をまとめたリーフレットを作成し、青森県内の施設へ配付した。

■福井県看護協会

事業名	看護業務の効率化“幸せふくいへの挑戦事例”アワード 2022
事業内容	「幸せふくいへの挑戦事例アワード 2022」を開催し、福井県内の施設から先進的取り組みを募集した結果、15 件の応募があった。選考の結果 7 件が受賞し、授賞式・事例報告会を開催した（1 月 21 日）。当日は会場参集にて 27 名が参加した。受賞した 7 件については事例集を作成し、福井県内の医療機関及び全国の都道府県看護協会に配付した。また、看護管理者を対象に働き方改革・処遇改善等について研修会（9 月 17 日）を開催した。

■愛知県看護協会

事業名	看護職の働き方改革の推進 看護師と看護補助者のタスク・シフト／シェアの推進
事業内容	愛知県内の看護管理者を対象に看護補助者の確保・定着、協働の実際、業務委譲についての現状と課題の把握のための実態調査を行った（8月5日～31日）。愛知県内の施設から看護補助者とのタスク・シフト／シェアに取り組む施設を募集した結果、3施設の応募があった。看護補助者の活躍推進のための看護管理者研修会を開催し、1059名が参加した（6月23日～9月14日 11回開催）。

■奈良県看護協会

事業名	就業継続が可能な看護職の働き方の提案 —好事例集の作成と報告会による水平展開の実施
事業内容	2021年度に実施した「看護師の業務負担軽減に資する看護業務改善」実態調査アンケートの結果をもとに、先進的取り組みを28件収集した。そのうち17件を事例集に記載し、県内医療機関へ配布した。11月22日に開催した事例報告会において、事例集に掲載した事例のうち4件について報告を行った。事例報告会はハイブリッド方式にて開催され、100名がオンラインで視聴した。また、奈良県が設置予定の「看護師がいきいきと働き続けるための実効策検討委員会」について業務改善・処遇改善に関する情報交換を行った。

3) 都道府県看護協会と連携した事業の総評と今後の課題

事業内容は、過年度「看護業務の効率化 先進事例アワード」にて収集した事例を普及するためのシンポジウムを開催した県協会が1県、地域で独自に事例を収集した県協会が3県、看護業務の効率化のテーマに絞って研修を行った県協会が1県であった。地域の好事例を収集、周知するために実施報告会を開催した県協会は、各都道府県看護協会が運営する看護系の学会と同時開催したことで、より多くの看護職への周知を図ることができた。

今後は看護業務の効率化に関わる事業を展開する都道府県看護協会を増やすとともに、地域で独自に収集した事例から特に看護業務の効率化に寄与する事例を全国に共有する方策を検討する必要があると考えられる。

Ⅲ. 看護業務の効率化に資する先進的取り組みの周知・普及

1. 看護業務の効率化試行支援事業の実施

先進的取り組みの周知普及策の1つとして、過年度の「看護業務の効率化 先進事例アワード」で表彰された先進的取り組みと同様の取り組みを1年もしくは2年間かけて行う施設等を支援する「看護業務の効率化試行支援事業」を実施した。

1) 実施期間

2022年8月1日（月）～2023年1月31日（火）

2) 実施施設

今年度は3つの先進的取り組みについて4施設の試行実施の応募があり昨年度から継続して取り組む7施設と合わせ、計11施設が参加した。

3) 支援内容

(1) 全体説明会・グループ別 Web 会議の開催

試行実施施設・試行支援施設を対象に合同の事前説明会を開催し、関係者全員で事業の概要およびスケジュール等について認識の統一を図った後、取り組み内容別のグループによる Web 会議を実施した。取り組み当初に、試行実施施設の背景・課題、目標などを試行支援施設と共有する場を設けたことで、早い段階から現状分析・課題の明確化が可能となった。またグループごとに Web 会議を行うことで試行支援施設の負担を軽減するだけでなく、同一の取り組みを行う施設間の情報共有の場となるなどの副次的な効果もあった。

全体 Web 会議では、試行実施施設は試行した成果等について報告し、試行支援施設は講評を行った。試行実施施設は受賞施設を訪問し、取り組みを実際に見学することで運用のイメージがもてた。また、試行支援施設の中には他施設への支援を行うことで、自施設内の取り組みにおいて新たな展開を見出すことができた施設もあった。

(2) 看護業務効率化 先進事例アワード受賞施設の担当者による相談・助言・指導（電話、メール等）

(3) 先進的取り組みの試行実施にかかる費用の一部負担（上限 50 万円）

＜2022 年度参加施設と試行内容＞

グループ	取り組み内容	実施期間	試行施設
A	看護記録に要する時間削減の効率化への取り組み—記録内容の標準化とリアルタイム記録	2022 ～ 2023 年度	医療法人 札幌麻生脳神経外科病院（北海道）
B	訪問看護におけるエコーによるアセスメント導入と ICT を使った医師との連携	2021 ～ 2022 年度	医療法人葛西医院 訪問看護ステーションかつさい（大阪府）
			社会福祉法人高陽会 訪問看護ステーション麒麟（和歌山県）
C	看護部働き方改革プロジェクト:「繁忙度表」を活用した人員の采配と応援体制づくり	2022 年度	訪問看護ステーション レジハピ（広島県）
			東京都立小児総合医療センター（東京都）
D	排尿ケアチームの立ち上げ—患者の QOL 向上を目指して	2021 ～ 2022 年度	特定医療法人社団勝木会 やわたメディカルセンター（石川県）
E	ICT ツールとウェブ会議の活用による業務効率化	2021 ～ 2022 年度	社会医療法人信愛会 暇生会脳神経外科病院（大阪府）
F	入退院支援の活動からつなぐ看護へ—外来でのスクリーニングを看護計画に直結させる	2021 ～ 2022 年度	社会医療法人信愛会 暇生会ふれあい訪問看護ステーション（大阪府）
			医療法人社団相和会 淵野辺総合病院（神奈川県）
G	音声入力による記録時間の削減	2021 ～ 2022 年度	社会医療法人社団沼南会 沼隈病院（広島県）
			医療法人社団明芳会 横浜新都市脳神経外科病院（神奈川県）

4) 試行支援事業のスケジュール

7月22、27日	説明会	
8月1日	試行開始	
8月～9月	グループ Web 会議（実施計画書の確認、支援内容の調整等）	
	グループ A : 8/2 グループ B : 8/2、9/27	
	グループ C : 8/4、8/25 グループ D : 8/4	
	グループ E : 9/21 グループ F : 8/30	
	グループ G : 8/22	
10月17日	中間報告書の提出	
1月31日	試行終了	
2月13、28日	実施報告書、事業決算書・請求書の提出	
3月9、10日	全体 Web 会議	

5) 試行支援事業の総評と今後の課題

試行実施施設の多くが「時間外業務時間の削減」「業務量の減少・削減」を目標に掲げて取り組みを行った。昨年度から継続して参加した施設は組織内の環境の整備など準備を終えて先進的取り組みの導入を本格的に始動した。実施期間中は新型コロナウイルス感染症拡大に伴い取り組みが一時中断した施設もあったが、柔軟に対応しながら試行事業を継続し、終了することができた。

今年度は7施設が前年度から継続して試行事業に取り組んだ。2021年度からの継続試行実施施設と2022年度からの新規試行実施施設の双方が参加するグループにおいては、新規試行実施施設は試行支援施設と継続試行実施施設の双方から助言を受けられるなど、グループ内の交流が活発になった利点もあった。

今後は、過去3年間の試行支援事業の総括として、実際に試行支援事業に参加する施設だけでなく、少しでも取り組みに興味を持った全国のあらゆる施設に向けて、各施設が先進事例を導入する際のポイントやノウハウを取りまとめ、広く周知する必要がある。

2. 看護業務の効率化に資する先進的取り組みの紹介動画・事例集の作成

「看護業務効率化 先進事例アワード 2022」の受賞施設（9 施設）および試行支援事業の参加施設（1 施設）の取り組みについて、動画（2 施設）および事例集（概要版・詳細版）を作成し、2023 年 3 月「看護業務効率化 先進事例収集・周知事業ポータルサイト」（<https://www.kango-award.jp/>）に掲載した。

	対象・内容
動画	① 最優秀賞：株式会社 Le-caldo 訪問看護ステーション トータルケア ② 優秀賞（業務改善部門）：社会福祉法人 恩賜財団 済生会松阪総合病院
事例集	① 「看護業務の効率化 先進事例アワード 2022」受賞 9 施設 ・概要版（A4 サイズ 1 ページ分にまとめたもの） ・詳細版 ② 「看護業務の効率化試行支援事業」試行実施施設 社会医療法人社団沼南会 沼隈病院 ・詳細版

3. 本事業の周知

1) ポータルサイトのリニューアル

「看護業務効率化 先進事例収集・周知事業ポータルサイト」(<https://www.kangoaward.jp/>)では、本事業の紹介や過年度の看護業務効率化 先進事例アワードで受賞した施設の取り組みの紹介動画や事例集を掲載している。今年度は、コンテンツとサイト内の情報を整理し、より見やすい画面・構成にするとともに、関心のある事例にアクセスしやすくするよう事例の検索機能を追加した。さらに、学会報告や表彰式・事例報告会のイベント情報を公開するなど、コンテンツの充実を図った。



2) 学会報告

本事業の周知については、ポータルサイトのほか、日本看護協会機関紙「協会ニュース」、日本看護協会の公式ホームページ、機関誌「看護」臨時増刊号、関係団体のホームページでの掲載の他、「国際モダンホスピタルショウ」(2022年7月・東京都)、「日本病院学会」(2022年7月・島根県)、「日本看護学会」(2022年9月・北海道、11月・千葉県)等においてセミナーや発表等を行った。

※本事業の周知活動一覧については【資料3】参照

4. 「看護業務効率化 先進事例収集・周知事業の認知度等に関する調査」の実施

本事業の認知度および医療機関等の業務効率化への関心等を把握するため、病院・訪問看護ステーションの看護管理代表者等を対象に調査を実施した。

1) 調査の実施概要

対象：下記対象施設の看護管理者

- (1) 全国の病院約 8,200 か所（全数）
- (2) 訪問看護ステーション約 8,000 か所（全施設 13,000 か所より無作為抽出）
- (3) 認定看護管理者：約 4,500 人（本会認定システムのメール登録者）
- (4) 診療所、介護老人保健施設、介護老人福祉施設、社会福祉施設等

調査期間：2022 年 6 月 1 日（水）～2022 年 7 月 31 日（日）

調査方法：インターネット調査

※日本看護協会公式ホームページや、都道府県看護協会、関係団体等を通じて周知・調査協力の依頼を行った。

回収状況：総回答数 2,339 件

2) 調査結果

(1) 回答者の属性

所属施設は、「病院」（54.5%）、「訪問看護ステーション」（43.7%）が全体の 98% 以上であった。回答者の職位は、「管理職」（87.3%）、「中間管理職」（10.1%）、「スタッフ」（2.4%）であった。

(2) 本事業の認知度について

全体集計の結果は「知っている」（33.5%）、「名前は聞いたことがある」（35.3%）、「知らない」（31.3%）と、ほぼ同率であった。

施設別にみると、病院は「知っている」（53.0%）、「名前は聞いたことがある」（32.8%）、「知らない」（14.2%）であり、訪問看護ステーションは「知っている」（9.3%）、「名前は聞いたことがある」（38.5%）、「知らない」（52.3%）であった。

(3) 看護業務効率化で解決したいと考えている課題

全体集計の結果は「記録の効率化」（81.4%）への関心が高く、次いで「多職種との連携、タスク・シフト/シェア」（62.7%）、「業務の標準化」（60.9%）、「勤務体制の整備」（44.3%）、「帳票類の整理」（40.5%）、「ICT を用いた情報の共有」（38.4%）であり、施設別、職位別、都道府県別にみても、ほぼ変わらなかった。

(4) 過去の「看護業務効率化 先進事例アワード」受賞取り組みについての認知度
全体集計において受賞事例の認知度は、「「ユニフォーム 2 色制」と「ポリバレン
トナース育成」による持続可能な残業削減への取り組み」(74.1%) が最も高く、次
いで「音声入力で時間を短縮 残業を減らそう」(34.2%)、「ウィズコロナで ICT 促
進！一患者と家族をつなぐオンライン面会の取り組み」、「看護記録に要する時間削
減の効率化への取り組みー記録内容の標準化とリアルタイム記録に焦点を当てて」
(30.3%) であった。施設別、職位別、都道府県別においても「ユニフォーム 2 色
制」の認知度が高かった。

(5) 過去の「看護業務効率化 先進事例アワード」受賞取り組みで実施してみたい取
り組み

全体集計の結果、「看護記録に要する時間削減の効率化への取り組みー記録内容の
標準化とリアルタイム記録に焦点を当てて」(53%)、「音声入力で時間を短縮 残
業を減らそう」(48.6%) が高く、次いで「入退院支援の活動からつなぐ看護へー外
来でのスクリーニングを看護計画に直結させる」(40.1%)、「新型コロナウイルス
感染症クラスター下での看護記録革命！一スマホ活用で問題解決」(33.8%)、「看
護補助者の退職者減少を目指した「看護補助者の拡大チーム」の編成と「看護補助
者ラダーの導入」」(30.9%) の順に高かった。

3) 小括

(1) 本事業の認知度の更なる向上

今回の調査結果から、本事業の認知度を問う項目について「知っている」(33.5%)
「名前は聞いたことがある」(35.3%) と全体の 68.8% が回答している。しかしな
がら、「知らない」は 31.3% に上る。施設別にみると、訪問看護ステーションから
の回答は「知らない」(52.3%) が半数以上を占めており、本事業への認知度はいま
だ十分とはいえないことがわかった。好事例の情報がより多くの人に届くよう、多
様な媒体による周知戦略を検討するとともに、各都道府県看護協会との連携をより
強化し、周知活動を展開していく必要がある。

(2) 取り組みを後押しする情報提供

現場での関心が高い取り組みは、各施設の課題解決につながる取り組み内容で
あるともいえる。各施設が先進事例の導入に向け一歩前に進むためにも、取り組み
の際のポイントや工夫した点などを具体的に周知していくことが求められる。

IV. 資料

「看護業務の効率化 先進事例アワード 2022」応募施設の属性

1. 募集期間：2022 年 7 月 1 日（金）～8 月 31 日（水）
2. 応募総数：52 件（郵送：21 件、メール：31 件）
3. 取り組み内容

取り組み内容（複数選択あり）	2022 年	2021 年	2020 年	2019 年
	個（割合）	個（割合）	個（割合）	個（割合）
1. 業務改善	19（37%）	19（43%）	24（39%）	27（39%）
2. タスク・シフト／シェア、多職種連携	16（31%）	9（20%）	16（26%）	19（28%）
3. AI・ICT 等の技術の活用	12（23%）	12（27%）	18（29%）	17（25%）
4. その他の工夫	5（10%）	4（9%）	4（7%）	6（8%）
合計	52	44	62	69

4. 応募施設種別

施設種別	2022 年	2021 年	2020 年	2019 年
	個（割合）	個（割合）	個（割合）	個（割合）
1. 病院	43（83%）	38（86%）	45（80%）	52（91%）
2. 訪問看護ステーション	6（12%）	5（11%）	8（14%）	4（7%）
3. 有床診療所	1（2%）	0	0	1（2%）
4. 無床診療所	0	0	1（2%）	0
5. 介護老人福祉施設（特養）	1（2%）	1（2%）	0	0
6. その他	1（2%）	0	2（4%）	0
合計	52	44	56	57

5. 病床規模（病院）

施設種別	2022 年	2021 年	2020 年	2019 年
	件（割合）	件（割合）	件（割合）	件（割合）
1. 99 床以下	1（3%）	1（3%）	3（7%）	3（6%）
2. 100～199 床	4（9%）	7（18%）	8（18%）	5（10%）
3. 200～299 床	4（9%）	5（13%）	8（18%）	6（12%）
4. 300～399 床	8（19%）	6（16%）	6（13%）	9（17%）
5. 400～499 床	6（14%）	10（26%）	9（20%）	7（13%）
6. 500 床以上	20（47%）	9（24%）	11（24%）	22（42%）
合計	43	38	45	52

6. 設置主体

施設種別	2022 年	2021 年	2020 年	2019 年
	件（割合）	件（割合）	件（割合）	件（割合）
1. 厚生労働省（国立ハンセン病療養所等） ※1	0	0	1（2%）	1（2%）
2. 独立行政法人国立病院機構	0	0	2（4%）	2（4%）
3. 国立大学法人	7（14%）	4（9%）	1（2%）	8（14%）
4. 独立行政法人地域医療推進機構	0	0	1（2%）	1（2%）
5. 都道府県・市町村（一部事務組合を含む）	2（4%）	4（9%）	5（9%）	13（23%）
6. 地方独立行政法人（公立大学法人を含む）	4（8%）	1（2%）	4（7%）	0
7. 日本赤十字社	0	2（5%）	0	0
8. 済生会	6（12%）	2（5%）	0	2（4%）
9. 厚生農業協同組合連合会	0	1（2%）	2（4%）	0
10. 社会保険関係団体	1（2%）	1（2%）	0	1（2%）
11. 公益社団法人・公益財団法人	2（4%）	3（7%）	1（2%）	1（2%）
12. 私立学校法人	4（8%）	3（7%）	0	5（9%）
13. 医療法人	9（17%）	15（34%）	18（32%）	12（21%）
14. 社会医療法人財団	3（6%）	0	3（5%）	0
15. 社会福祉法人	2（4%）	2（5%）	2（4%）	2（4%）
16. 医療生協	0	0	4（7%）	0
17. 会社	10（20%）	5（11%）	8（14%）	7（13%）
18. その他の法人	2（4%）	1（2%）	3（5%）	2（4%）
19. 個人	0	0	1（2%）	0

※1 厚生労働省統計における病院設置者分野の「国立高度専門医療研究センター（国立がん研究センター、国立循環器研究センター、国立精神・神経医療研究センター、国立国際医療研究センター、国立成育医療研究センター、国立長寿医療研究センター等）は、本会の標準化項目の中の「厚生労働省（国立ハンセン病療養所等）」に含まれる。

7. 応募施設所在地

	2022 年 (件)	2021 年 (件)	2020 年 (件)	2019 年 (件)	アワード応募 延べ数 (件)	試行支援事業 参加数 (件)
1. 北海道	1	5	4	2	12	3
2. 青森県	0	0	0	0	0	0
3. 岩手県	0	0	0	1	1	0
4. 宮城県	0	1	0	0	1	0
5. 秋田県	0	0	0	0	0	0
6. 山形県	0	0	0	1	1	1
7. 福島県	0	0	0	0	0	1
8. 茨城県	2	2	1	3	8	1
9. 栃木県	0	1	0	0	1	0
10. 群馬県	0	0	0	0	0	0
11. 埼玉県	1	1	3	2	7	0
12. 千葉県	2	1	4	1	8	0
13. 東京都	6	4	8	13	31	5
14. 神奈川県	4	2	0	2	8	3
15. 新潟県	0	1	0	0	1	0
16. 富山県	0	0	0	0	0	0
17. 石川県	4	0	2	3	9	2
18. 福井県	3	3	0	7	13	0
19. 山梨県	0	0	0	0	0	0
20. 長野県	0	1	3	0	4	1
21. 岐阜県	0	0	0	0	0	0
22. 静岡県	1	0	3	3	7	0
23. 愛知県	5	4	2	5	16	1
24. 三重県	1	0	1	1	3	0
25. 滋賀県	1	1	0	0	2	0
26. 京都府	2	0	1	0	3	0
27. 大阪府	2	3	6	3	14	4
28. 兵庫県	0	2	4	2	8	0
29. 奈良県	0	1	0	0	1	0
30. 和歌山県	1	0	2	0	3	1
31. 鳥取県	2	0	0	0	2	0
32. 島根県	0	0	0	0	0	0
33. 岡山県	0	1	0	1	2	1
34. 広島県	3	5	6	2	16	4
35. 山口県	1	0	0	0	1	0

	2022 年 (件)	2021 年 (件)	2020 年 (件)	2019 年 (件)	アワード応募 延べ数 (件)	試行支援事業 参加数 (件)
36. 徳島県	0	0	0	0	0	0
37. 香川県	2	2	0	0	4	2
38. 愛媛県	1	1	2	1	5	0
39. 高知県	0	0	0	0	0	0
40. 福岡県	5	1	2	1	9	0
41. 佐賀県	0	0	0	1	1	0
42. 長崎県	0	1	0	0	1	0
43. 熊本県	1	0	1	1	3	0
44. 大分県	0	0	0	0	0	0
45. 宮崎県	0	0	1	1	2	0
46. 鹿児島県	1	0	0	0	1	0
47. 沖縄県	0	0	0	0	0	0
合計	52	44	56	57	209	30

No.	施設所在地 都道府県	施設種別	タイトル	取り組み内容
1	静岡県	病院 介護老人保健施設(老健) 介護医療院	チャットワーク活用による多職種との情報共有の効率化	AI・ICT等の技術の活用
2	茨城県	病院	効率よく効果的な褥瘡予防ケアで褥瘡発生率低下、残業時間削減 患者、看護師、経営者にもWIN WIN WINの在宅褥瘡ケアひたちなかメソッドでの展開	業務改善
3	京都府	病院	検査説明動画視聴システム導入が患者にもたらす効果とその検証 ～職種の垣根を越えた業務改善を目指して～	業務改善 タスク・シフト/シェア、多職種連携 AI・ICT等の技術の活用
4	茨城県	訪問看護ステーション	訪問看護における働き方改革:ICT活用による直行・直帰制の実現	AI・ICT等の技術の活用
5	愛知県	訪問看護ステーション	グーグルマップを活用した訪問導線の最適化	AI・ICT等の技術の活用
6	千葉県	病院	特定行為看護師を中心とするPICCチームによるタスク・シフト ～安心・安全でタイムリーな留置を目指した業務改善の取り組み～	タスク・シフト/シェア、多職種連携
7	広島県	病院	認知症治療病棟における超過勤務時間減少への取り組み 「協働受け持ちシステム」が生み出す連携・協働の効果	タスク・シフト/シェア、多職種連携
8	北海道	病院	入院患者情報共有電子ツールの導入 ～情報収集時間の短縮を目指して～	業務改善
9	滋賀県	病院	コロナ禍を機会に捉えた 看護補助者夜勤導入による看護業務の負担軽減	タスク・シフト/シェア、多職種連携
10	福岡県	病院	スピーキングアップ 新たな看護提供方式を導入し職員の身体的・精神的負担の軽減 ～心理的安全性とOJTの確立を目指して～	業務改善
11	山口県	病院	病院全体で取り組む看護師の夜勤負担軽減への体制づくり ～育児支援制度利用者が安心して夜勤に従事できるために～	その他の工夫
12	鳥取県	病院	さまざまなタスクシフトによるナースに優しい職場作り ～多職種コラボレーション・ワークライフバランス・プラチナナース対策・・・～	タスク・シフト/シェア、多職種連携
13	愛媛県	病院	患者の転倒転落リスクをAIで予測し多職種連携で個別ケアを実践する！	タスク・シフト/シェア、多職種連携 AI・ICT等の技術の活用
14	福岡県	病院	サブスクリプション(定額制)紙おむつ導入における業務効率化への取り組み	業務改善
15	大阪府	病院	がん薬物治療時のがん教育と外来待ち時間対策への取り組み ～看護師が中心に医師・栄養課・リハビリ科・地域連携部と協働を実践して～	タスク・シフト/シェア、多職種連携
16	和歌山県	訪問看護ステーション	訪問看護におけるエコーによるアセスメント導入とICTを使った医師との連携(公立羽咋病院: 2020年度最優秀受賞)・(2021年試行実施 高陽会訪問看護ステーション麒麟)携帯型エコー を用いた排泄ケアの可視化	AI・ICT等の技術の活用
17	東京都	病院	看護配置マスターの導入により看護師長の時間外勤務削減や負担感軽減などの効果について	AI・ICT等の技術の活用
18	福岡県	病院	福德ナースの挑戦！！ ～人材を活用した院内リリーフ体制の構築～	業務改善
19	神奈川県	病院	看護業務のタスクシフトにおける事務職主導の効率的な病床管理	タスク・シフト/シェア、多職種連携
20	神奈川県	病院	プロセスフローチャートを活用した入退院支援の可視化による多職種連携の取り組み	業務改善 タスク・シフト/シェア、多職種連携
21	愛知県	病院	病床管理ミーティングの効率化	業務改善
22	愛知県	病院	搬送ロボットを導入した看護師のカイゼン活動 ～トヨタ生産方式(Toyota Production System:TPS)を基盤として～	業務改善
23	香川県	病院	高齢患者に対する離床センサー設置低減に向けた取り組み ～ナースコールデータ分析から～	業務改善

No.	施設所在地 都道府県	施設種別	タイトル	取り組み内容
24	香川県	病院	ナースコールデータ分析に基づいた生体情報モニタの適正管理 —医療安全と業務効率の視点から—	業務改善
25	愛知県	訪問看護ステーション	訪問予定表の「見える化」と「効率化」による業務効率化と信頼関係強化、スタッフの意識向上の実現	業務改善
26	三重県	病院	医療機器と電子カルテのデータ共有による看護業務の効率化 ～専従医療安全管理者の立場から～	業務改善
27	石川県	訪問看護ステーション	ICTを活用した業務効率化～看介護連携強化への取り組み～	AI・ICT等の技術の活用
28	埼玉県	訪問看護ステーション	365日24時間稼働コールセンターの設置がもたらす訪問看護ステーションにおけるタスク・シフト/シェア	タスク・シフト/シェア、多職種連携
29	福岡県	病院	棚卸医療物品管理の改善活動～院内の取り組みから病棟の仕組みへの水平展開～	業務改善
30	石川県	病院	コロナ禍だからできた もう迷わない！色別カテゴリ表記で新たな診療材料管理 ～看護部と物品管理センターの協働～	タスク・シフト/シェア、多職種連携
31	東京都	病院	看護部のかたちを創造する「BE ONE NURSING TEAM」 ～機動性と新たな機能の獲得～	その他の工夫
32	石川県	病院	入院部門業務の切り分と人材活用の仕組みづくりにより看護職の業務負担軽減を図る ～アシストクルーとの協働～	タスク・シフト/シェア、多職種連携
33	東京都	病院	シフト勤務で日々変わる看護スタッフを繋ぐコミュニケーションアプリによる業務効率化	AI・ICT等の技術の活用
34	東京都	有床診療所	自製在庫管理システム開発で看護師の業務改善 ～VBA導入とタスク・シフト～	タスク・シフト/シェア、多職種連携
35	京都府	病院	IoTデバイス（バイタルデータターミナル、照合端末）導入による業務軽減の効果	AI・ICT等の技術の活用
36	神奈川県	介護老人福祉施設(特養)	医務室業務改善の可視化	業務改善
37	愛知県	病院	診療看護師(NP)による周術期医療とタスクシフト	タスク・シフト/シェア、多職種連携
38	鳥取県	病院	病棟外来一元化を生かした継続看護の基盤整備	業務改善
39	神奈川県	病院	看護補助者会を中心とした身体拘束低減の取り組み	タスク・シフト/シェア、多職種連携
40	石川県	病院	多様化する抗がん剤治療に対応するために ～ケモファイル作成の取り組み～	その他の工夫
41	広島県	病院	リハビリテーション部門と協働した転倒・転落予防の取り組み	タスク・シフト/シェア、多職種連携
42	東京都	病院	看護記録のイノベーション～患者状態適応型パス(PCAPS)	業務改善
43	熊本県	病院	新病院における、ワンフロア・ワンチームで取り組む「外来待ち時間の短縮、接遇向上、協力体制づくり」を通じた質の高い看護サービスの提供	タスク・シフト/シェア、多職種連携
44	鹿児島県	病院	多様な勤務時間変更による残業時間への効果	業務改善
45	大阪府	病院	コロナ禍がもたらしたリリーフ体制構築の効果	その他の工夫
46	東京都	病院	年休取得促進のための計画助勤	その他の工夫
47	福井県	病院	ベッドサイド情報端末システム「お知らせ君」の機能拡張と運用により、患者サービス向上、看護の質向上を図る。	AI・ICT等の技術の活用

No.	施設所在地 都道府県	施設種別	タイトル	取り組み内容
48	福井県	病院	看護師の業務効率化への取り組み ー電子カルテ機能がある携帯端末(スマートフォン)の活用による効果ー	AI・ICT等の技術の活用
49	福井県	病院	輸液管理を支援する警報情報の通知 ～スマートポンプ、ナースコールシステム及び看護師の携帯情報端末の連動による効果～	AI・ICT等の技術の活用
50	千葉県	病院	物品管理を通じた業務の軽減について	業務改善
51	広島県	病院	安全な採血業務のタスク・シェア ～臨床検査技師採血習得メソッド開発と展開～	タスク・シフト/シェア、多職種連携
52	福岡県	病院	看護の専門性を発揮するためのタスク・シフト/シェアへの取組 さく病院看護部師長会	タスク・シフト/シェア、多職種連携

本事業の周知活動一覧

1. 看護業務の効率化先進事例アワード 2022 に関する周知

1) メーリングリストでの周知	対象
都道府県看護協会看護労働担当者	47 都道府県看護協会
認定看護管理者	4,370 人
病院看護管理者懇談会	17 団体
後援団体	13 団体
看護師職能委員会 II（介護・福祉関係施設・在宅等領域 委員長）	
2) 本会媒体	対象
機関紙「協会ニュース」	会員 76 万人
日本看護協会公式ホームページ	
日本看護協会 SNS	Facebook フォロワー：2,367 人 Twitter フォロワー：5,014 人
機関誌「看護」での周知	発行部数：約 16,000 部
関係団体へのポスター送付、周知協力依頼	全国 230 カ所に 340 枚発送

2. 2021 年度 看護業務の効率化試行支援事業の募集について

1) メーリングリストでの周知	対象
WLB 通信	1,533 件（施設数）／1609 人
都道府県看護協会看護労働担当者	47 都道府県看護協会
認定看護管理者	4,370 人
2) 本会媒体	対象
日本看護協会公式ホームページ	
日本看護協会 SNS	Facebook フォロワー：2,367 人 Twitter フォロワー：5,014 人

3. 看護業務の効率化先進事例アワード 2022 表彰式・事例報告会について

1) メーリングリストでの周知	対象
都道府県看護協会看護労働担当者	47 都道府県看護協会
認定看護管理者	4,370 人
病院看護管理者懇談会	17 団体
看護師職能委員会 II（介護・福祉関係施設・在宅等領域 委員長）	
2) 本会媒体	対象
機関紙「協会ニュース」	会員 76 万人
日本看護協会公式ホームページ	
日本看護協会 SNS	Facebook フォロワー：2,367 人

	Twitter フォロワー：5,014 人
機関紙「看護」への記事掲載	発行部数：約 16,000 部

4. 学会等での事業紹介

学会名	テーマ	発表事例
日本病院学会 (7月8日)	看護業務改善による 働き続けられる職場 づくり	・「改善活動の推進による働き続けられる職場環境づくり—広島県版自己点検ツール『チャレンジ』を活用した3か年に亘る取組」 (医療法人和同会 広島シーサイド病院) ・「中小規模病院における入退院支援部門の新設—入院支援の活動からつなぐ看護へ」(社会医療法人社団沼南会 沼隈病院)
国際モダンホスピタルショウ (7月15日)	新型コロナウイルス 感染症対応下での ICT 等を活用した看護業 務の効率化	・「新型コロナウイルス感染症クラスター下での看護記録革命！—スマホ活用で問題解決」 (社会医療法人柏葉会 柏葉脳神経外科病院) ・「新型コロナ感染症発熱外来における Web 問診による看護師の職業感染予防と業務負担軽減への取り組みの成果」(稲沢市民病院) ・「新型コロナウイルス感染症対応病棟における物品搬送ロボットの活用」(日本医科大学千葉北総病院)
日本看護学会 学術集会(札幌) (9月2日)	看護業務効率化先進 事例アワード受賞施 設に学ぶ看護記録の 業務効率化 ～自施設でできるこ とを見つけよう～(看 護記録編)	・「看護記録に要する時間削減の効率化への取り組み—記録内容の標準化とリアルタイム記録に焦点を当てて」 (県立広島病院) ・「ICT ツール×ウェブ会議最大活用による業務効率化への取り組み」(みんなのかかりつけ訪問看護ステーション) ・「新型コロナウイルス感染症クラスター下での看護記録革命！—スマホ活用で問題解決」 (社会医療法人柏葉会 柏葉脳神経外科病院)
日本看護学会 学術集会(幕張) (11月18日)	看護業務効率化先進 事例アワード受賞施 設に学ぶ看護記録の 業務効率化 ～自施設でできるこ とを見つけよう～(多 職種連携編)	・「小児集中治療室で取り組む特定行為実践とタスクシフト—効率的で安全・安心な看護の提供を目指して」 (東京都立小児総合医療センター) ・「看護補助者の退職者減少を目指した『看護補助者の拡大チーム』の編成と『看護補助者ラダー』の導入 (北里大学病院) ・「入退院支援の活動からつなぐ看護へ—外来でのスクリーニングを看護計画に直結させる」(公立羽咋病院)

「看護業務効率化先進事例収集・周知事業の認知度等に関する調査」結果について

日本看護協会では、看護職がより専門性を発揮できる働き方を推進し、看護サービスの質の向上を図るため、2019年度より厚生労働省の補助金事業「看護業務効率化先進事例収集・周知事業」を実施しています。本事業では、看護業務の効率化に資する医療機関等の取り組みを選考・表彰・周知する「看護業務効率化先進事例アワード」、本アワードで表彰された事例を試行する施設を支援する事業等を行っています。（詳細は、看護業務効率化先進事例収集・周知事業ポータルサイトをご参照ください。<https://www.kango-award.jp/case/index.html>）

■調査概要

目的：「看護業務効率化先進事例収集・周知事業」の認知度および医療機関等の業務効率化への関心等を把握する。

対象：①病院・訪問看護ステーションの看護管理代表者

全国の病院約8,200か所（全数）

訪問看護ステーション約8,000か所（全施設13,000か所より無作為抽出）

※はがきによって周知・調査協力の依頼を行った。

②認定看護管理者：約4,500人（本会認定システムのメール登録者）

③診療所、介護老人保健施設、介護老人福祉施設、社会福祉施設等の看護管理代表者

※本会HPや、都道府県看護協会、関係団体等を通じて周知・調査協力の依頼を行った。

調査期間：2022年6月1日（水）～2022年7月31日（日）

調査方法：インターネット調査

回収状況：総回答数 2,339件

■調査結果

1. 回答者の属性

○回答者の所属施設は「病院」（54.4%）と「訪問看護ステーション」（43.7%）、全体の98%以上であった。

【表1】

○職位は「管理職」が（87.3%）と最も多く、「中間管理職」（10.1%）、「スタッフ」（2.4%）であった。【表2】

【表1】回答者の所属施設

	件数	割合
病院	1,274	54.5%
診療所	6	0.3%
介護老人保健施設	5	0.2%
訪問看護ステーション	1,022	43.7%
社会福祉施設	9	0.4%
介護老人福祉施設	4	0.2%
その他	13	0.6%
無回答	6	0.3%
計	2,339	100.0%

【表2】回答者の職位

	件数	割合
管理職	2,042	87.3%
中間管理職	237	10.1%
スタッフ	56	2.4%
無回答	4	0.2%
計	2,339	100.0%

2. 本事業の認知度について

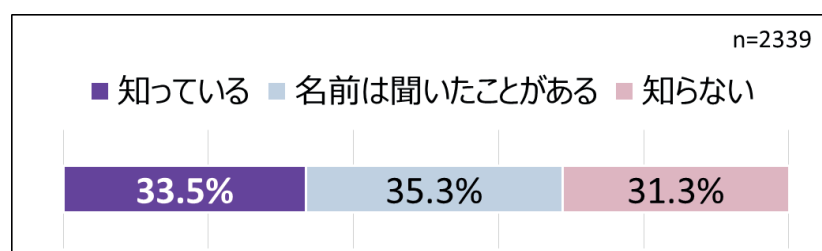
厚生労働省補助金事業「令和4年度看護業務効率化先進事例収集・周知事業」（「看護業務の効率化先進事例アワード」や「看護業務の効率化試行支援事業」）の認知状況を尋ねた。

○本事業を「知っている」（33.5%）、「名前は聞いたことがある」（35.3%）、「知らない」（31.3%）がほぼ同率であった。【図 1-1】

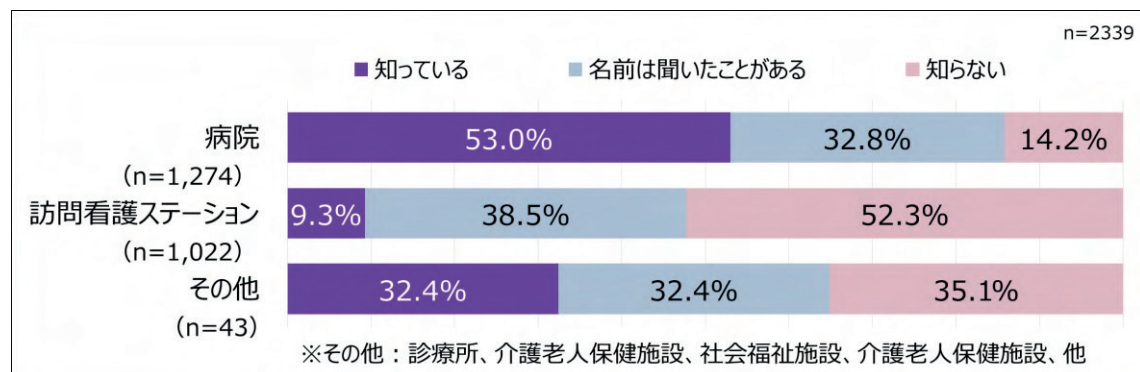
○施設別では「知っている」と回答したのは「病院」（53%）、「訪問看護ステーション」（9.3%）であり、「知らない」（52.3%）であった。【図 1-2】

○職位別では「知っている」と回答したのは「管理職」（36.5%）、「中間管理職」（13.9%）、「スタッフ」（8.9%）であった。【図 1-3】

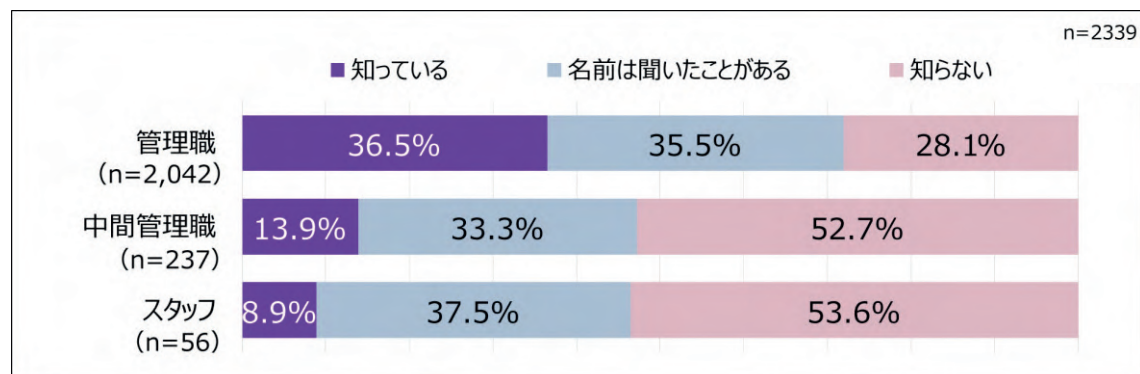
【図 1-1】 事業認知度（全体）



【図 1-2】 事業認知度（所属施設別）



【図 1-3】 事業認知度（職位別）



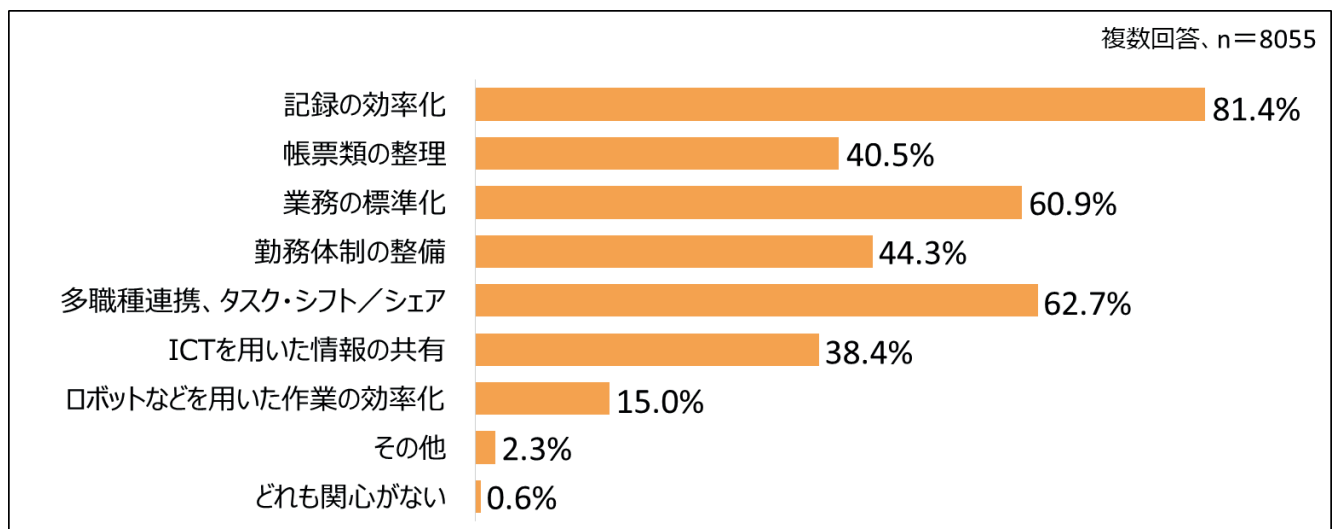
3. 看護業務効率化への関心について

自施設が今後、看護業務効率化をすすめるにあたり、関心のある取組について尋ねた。

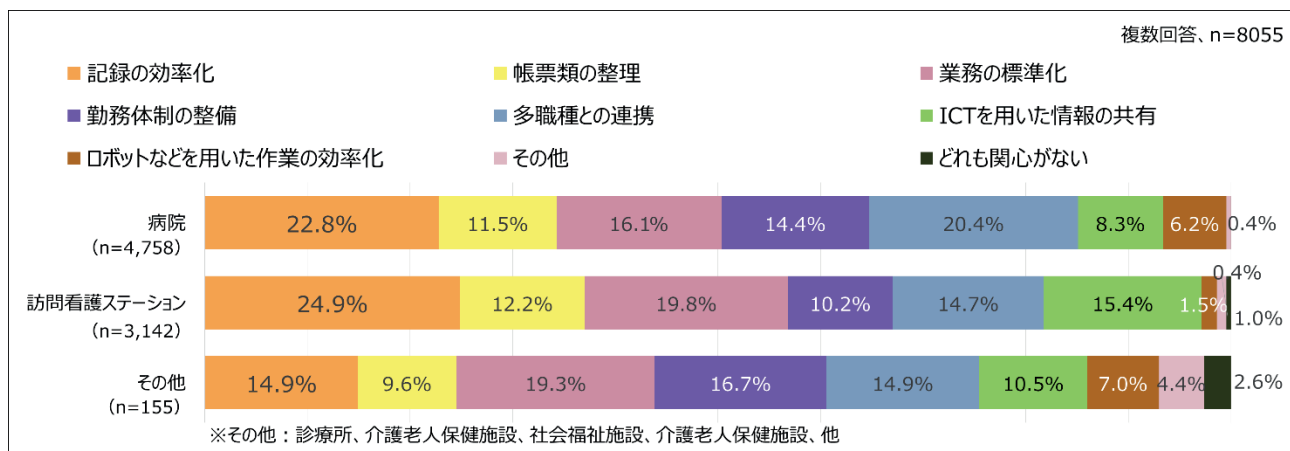
○回答者全体では「記録の効率化」(81.4%)への関心が最も高く、次いで「多職種との連携、タスク・シフト/シェア」(62.7%)、「業務の標準化」(60.9%)、「勤務体制の整備」(44.3%)、「帳票類の整理」(40.5%)、「ICTを用いた情報の共有」(38.4%)であった。【図2-1】

○施設別にみると「病院」では、「記録の効率化」、「多職種との連携」がやや多く、「訪問看護ステーション」では、「記録の効率化」「ICTを用いた状況の共有」がやや多い傾向がみられた。【図2-2】

【図2-1】看護業務効率化をすすめるにあたり、関心のある取組（全体）



【図2-2】看護業務効率化をすすめるにあたり、関心のある取組（所属施設別）



4. 「看護業務効率化先進事例アワード」受賞取組の認知度

「看護業務の効率化先進事例アワード 2019・2020・2021」において最優秀賞および優秀賞を受賞した取組の中から 14 事例を挙げ、「知っている」取組事例について尋ねた。

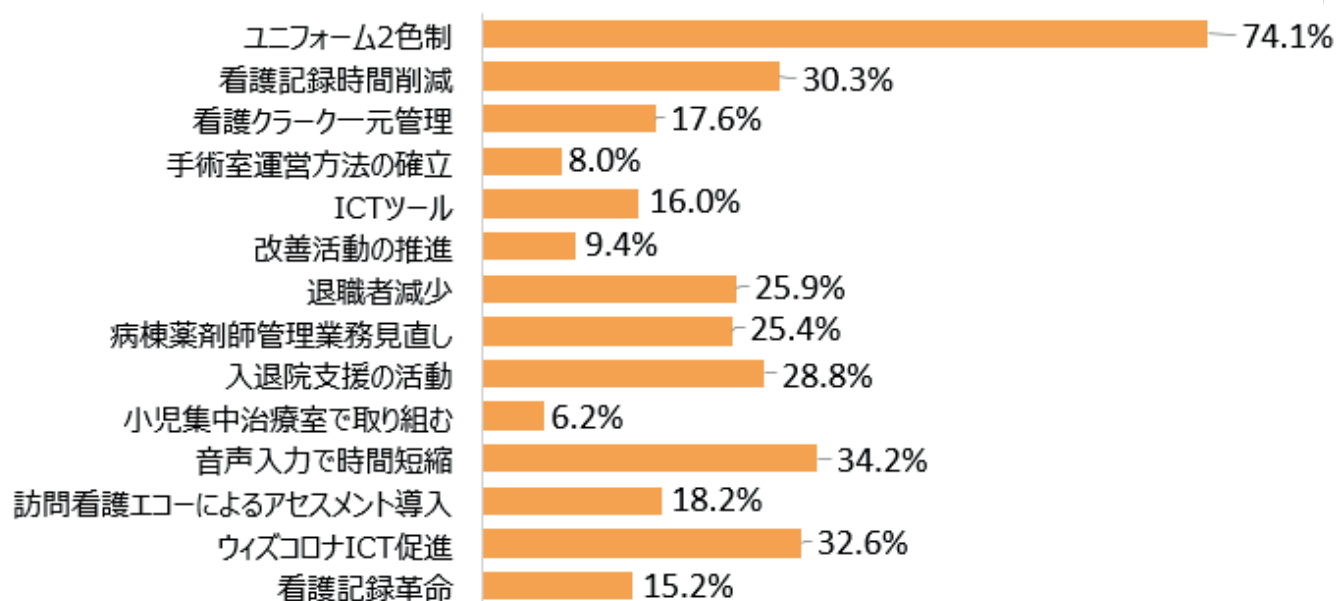
参照：＜「看護業務の効率化先進事例アワード 2019・2020・2021」最優秀賞および優秀賞事例＞

○回答者全体では「ユニフォーム 2 色制」と「ポリバレンタナス育成」による持続可能な残業削減への取組（74.1%）が最も高く、次いで「音声入力で時間を短縮 残業を減らそう」（34.2%）、「ウィズコロナで ICT 促進！～患者と家族をつなぐオンライン面会の取組～」、「看護記録に要する時間削減の効率化への取組 - 記録内容の標準化とリアルタイム記録に焦点を当てて -」（30.3%）であった。【図 3-1】

○施設別においても「ユニフォーム 2 色制」の認知度が圧倒的に高かったが、「診療所」「介護老人福祉施設」では「入退院における重複する帳票記録の一元化と多職種連携」が「ユニフォーム 2 色制」と同率で認知度が高い傾向がみられた。【表 3、図 3-2】

【図 3-1】「看護業務効率化先進事例アワード」受賞取組の認知度（全体）

複数回答、n=5484

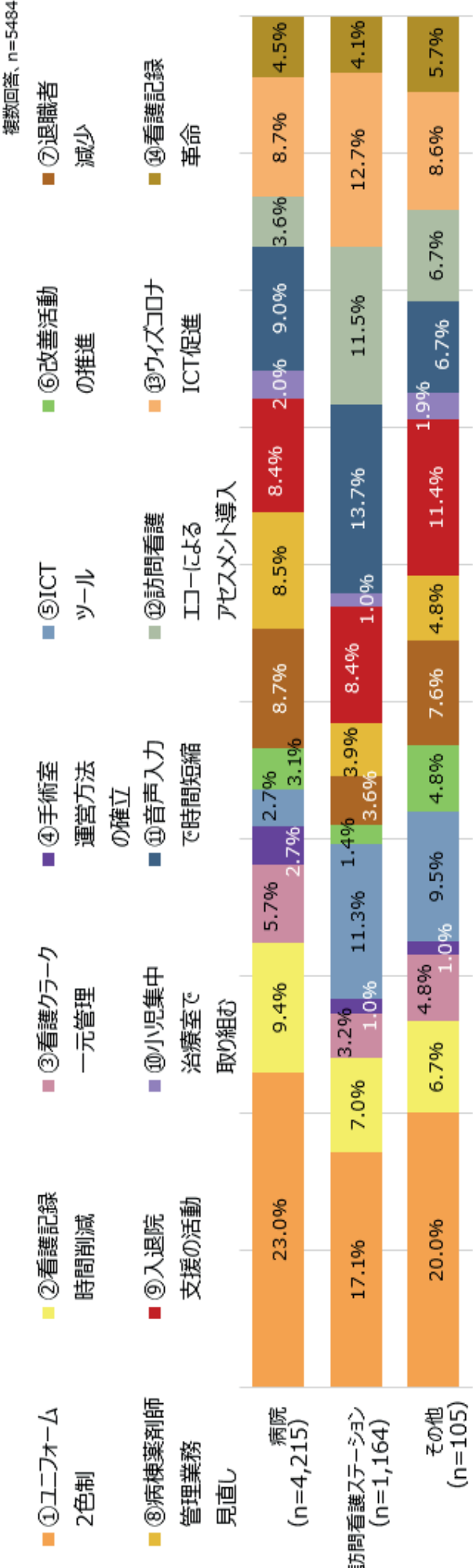


【表3】「看護業務効率化先進事例アワード」受賞取組の認知度（所属施設別）

	回答数	2① 色ユニ 制フオ ーム	時② 間看護 削減記 録	一③ 元看護 管理ク ラーク	の④ 確立室 運営方 法	⑤ ICTツ ール	⑥ 改善活 動の推 進	⑦ 退職者 減少	⑧ 見直し 棟薬剤 師管理 業務	⑨ 入退院 支援の 活動	取⑩ り組む 集中療 室で	⑪ 音声入 力で時 間短縮	ア⑫ セスメ ント導 入によ る	I⑬ CT促 進コナ	⑭ 看護記 録革命
病院	4,215 (100.0)	968 (23.0)	398 (9.4)	241 (5.7)	115 (2.7)	114 (2.7)	130 (3.1)	365 (8.7)	358 (8.5)	352 (8.4)	86 (2.0)	381 (9.0)	151 (3.6)	366 (8.7)	190 (4.5)
訪問看護ステーション	1,164 (100.0)	199 (17.1)	81 (7.0)	37 (3.2)	12 (1.0)	132 (11.3)	16 (1.4)	42 (3.6)	45 (3.9)	98 (8.4)	12 (1.0)	160 (13.7)	134 (11.5)	148 (12.7)	48 (4.1)
その他	105 (100.0)	21 (20.0)	7 (6.7)	5 (4.8)	1 (1.0)	10 (9.5)	5 (4.8)	8 (7.6)	5 (4.8)	12 (11.4)	2 (1.9)	7 (6.7)	7 (6.7)	9 (8.6)	6 (5.7)
計	5,498 (100.0)	1,191 (21.7)	488 (8.9)	283 (5.1)	128 (2.3)	258 (4.7)	151 (2.7)	417 (7.6)	408 (7.4)	463 (8.4)	100 (1.8)	548 (10.0)	294 (5.3)	524 (9.5)	245 (4.5)

※その他：診療所、介護老人保健施設、社会福祉施設、介護老人保健施設、他

【図 3-2】「看護業務効率化先進事例アワード」受賞取組の認知度（所属施設別）



5. 「看護業務効率化先進事例アワード」受賞取組で実施してみたい取組

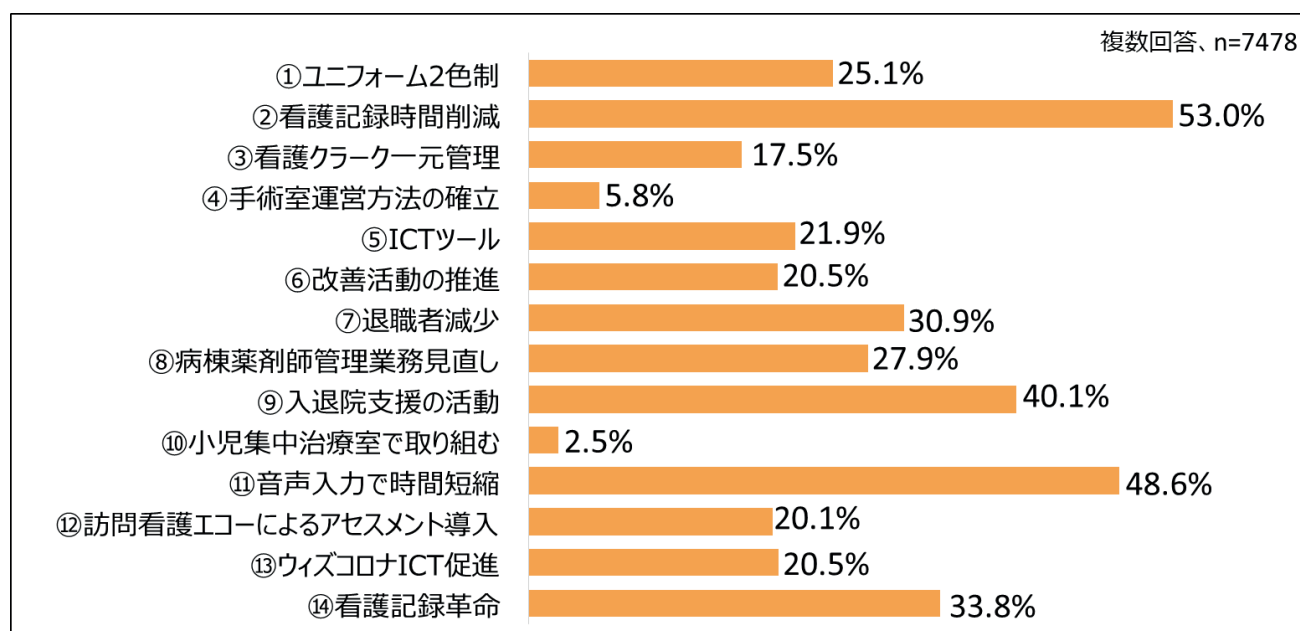
「看護業務の効率化先進事例アワード 2019・2020・2021」最優秀賞および優秀賞を受賞した取組 14 事例のうち、自施設で参考にしたい取り組みについて尋ねた。

参照：＜「看護業務の効率化先進事例アワード 2019・2020・2021」最優秀賞および優秀賞事例＞

○回答者全体では「看護記録に要する時間削減の効率化への取組 - 記録内容の標準化とリアルタイム記録に焦点を当てて -」（53%）、「音声入力で時間を短縮 残業を減らそう」（48.6%）が高く、次いで「入退院における重複する帳票記録類の一元化と多職種の連携」（40.1%）、「新型コロナウイルス感染症クラスター下での看護記録革命！～スマホ活用で問題解決～」（33.8%）、「看護補助者の退職者減少を目指した「看護補助者の拡大チーム」の編成と「看護補助者ラダーの導入」（30.9%）の順に高い。【図 4-1】

○施設別にみると、「病院」と「訪問看護ステーション」では「看護記録に要する時間削減の効率化への取組 - 記録内容の標準化とリアルタイム記録に焦点を当てて -」（14.5%、14.1%）が高く、次いで「病院」では「入退院における重複する帳票記録類の一元化と多職種の連携」（12.3%）、「訪問看護ステーション」では「音声入力で時間を短縮 残業を減らそう」（20.7%）が高い。【表 4、図 4-2】

【図 4-1】「看護業務効率化先進事例アワード」受賞取組で実施してみたい取組（全体）

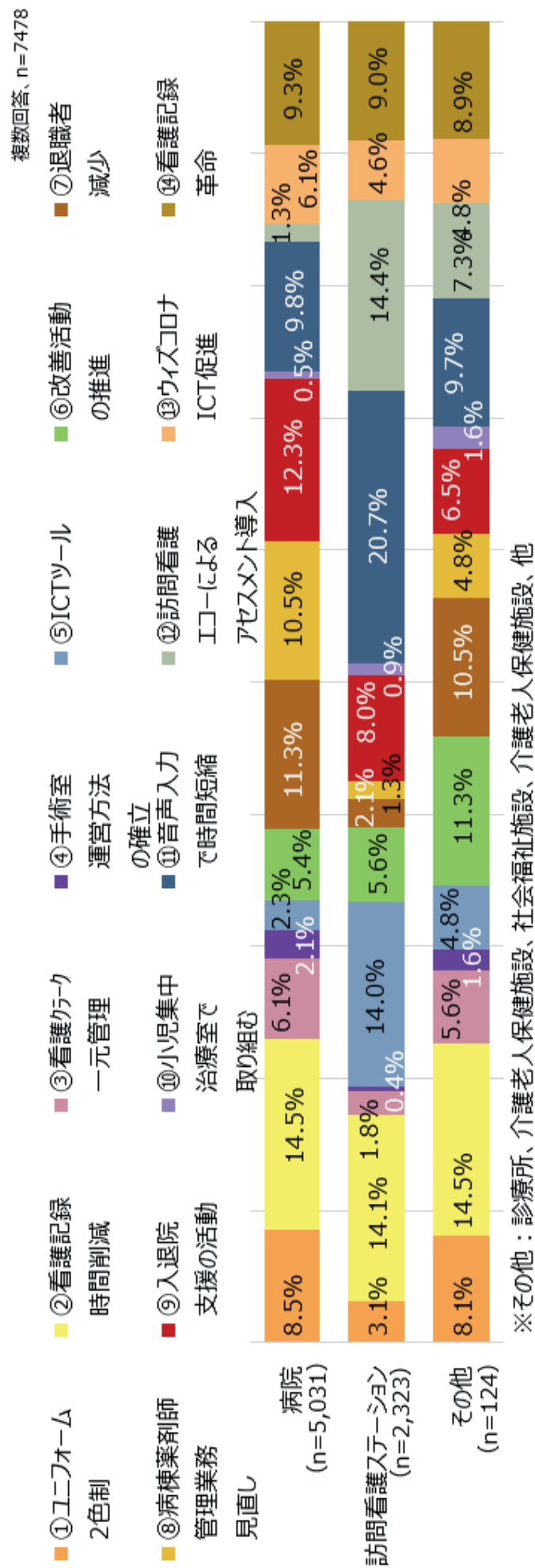


【表4】「看護業務効率化先進事例アワード」受賞取組で実施してみたい取組（所属施設別）

	回答数	① ユニフォーム2色制	② 看護記録時間削減	③ 看護クラーク一元管理	④ 手術室運営方法の確立	⑤ ICTツール	⑥ 改善活動の推進	⑦ 退職者減少	⑧ 見直し 棟薬剤師管理業務	⑨ 入退院支援の活動	⑩ 取り組む 小児集中治療室で	⑪ 音声入力 で時間短縮	⑫ アセスメント導入による	⑬ ICT促進 ナ	⑭ 看護記録革命
病院	5,031 (100.0)	427 (8.5)	731 (14.5)	307 (6.1)	106 (2.1)	114 (2.3)	271 (5.4)	566 (11.3)	530 (10.5)	621 (12.3)	26 (0.5)	494 (9.8)	65 (1.3)	305 (6.1)	468 (9.3)
訪問看護ステーション	2,323 (100.0)	72 (3.1)	327 (14.1)	42 (1.8)	10 (0.4)	325 (14.0)	131 (5.6)	48 (2.1)	31 (1.3)	186 (8.0)	22 (0.9)	481 (20.7)	334 (14.4)	106 (4.6)	208 (9.0)
その他	124 (100.0)	10 (8.1)	18 (14.5)	7 (5.6)	2 (1.6)	6 (4.8)	14 (11.3)	13 (10.5)	6 (4.8)	8 (6.5)	2 (1.6)	12 (9.7)	9 (7.3)	6 (4.8)	11 (8.9)
計	7,478 (100.0)	509 (6.8)	1,076 (14.4)	356 (4.8)	118 (1.6)	445 (6.0)	416 (5.6)	627 (8.4)	567 (7.6)	815 (10.9)	50 (0.7)	987 (13.2)	408 (5.5)	417 (5.6)	687 (9.2)

※その他：診療所、介護老人保健施設、社会福祉施設、介護老人保健施設、他

【図 4-2】「看護業務効率化先進事例アワード」受賞取組で実施してみたい取組（所属施設別）



<「看護業務の効率化先進事例アワード 2019・2020・2021」最優秀賞および優秀賞事例>

業務改善部門	
1	ユニフォーム2色制 「ユニフォーム2色制」と「ポリバレントナース育成」による持続可能な残業削減への取組 一般社団法人熊本市医師会 熊本地域医療センター（2019年度 最優秀賞） ※「ユニフォーム2色制」導入による時間外勤務の削減と、ポリバレントナース（様々な看護単位で活動できるオールラウンドプレイヤー）育成による支援体制の整備
2	看護記録時間削減 看護記録に要する時間削減の効率化への取組 - 記録内容の標準化とリアルタイム記録に焦点を当てて - 県立広島病院（2019年度 優秀賞）
3	看護クラーク一元管理 小規模病院における看護クラーク科の立ち上げ・看護クラークの一元管理による看護師負担軽減 医療法人社団協友会 メディカルトピア草加病院（2019年度 優秀賞）
4	手術室運営方法の確立 チーム医療による新たな手術室運営方法の確立～組織を巻き込んだ3カ年計画の取組を通して～ 広島県厚生農業協同組合連合会 広島総合病院（2020年度 最優秀賞） ※手術室における勤務体制の整備と、手術室看護師の人材育成
5	ICTツール ICTツール×ウェブ会議最大活用による業務効率化への取組 株式会社デザインケア みんなのかかりつけ訪問看護ステーション（2020年度 優秀賞）
6	改善活動の推進 改善活動の推進による働き続けられる職場環境作り ～広島自己採点ツール「チャレンジ」を活用した3か年に亘る業務改善の取組～ 医療法人和同会 広島シーサイド病院（2021年度 優秀賞）
7	退職者減少 看護補助者の退職者減少を目指した「看護補助者の拡大チーム」の編成と「看護補助者ラダーの導入」 学校法人北里研究所 北里大学病院（2021年度 優秀賞）
タスク・シフト/シェア、多職種連携部門	
8	病棟薬剤師管理業務見直し 病棟薬剤師との役割委譲協働による病棟薬剤管理業務の見直し 社会医療法人石川記念会 HITO 病院（2019年度 優秀賞）
9	入退院支援の活動 入退院支援の活動からつなぐ看護へ外来でのスクリーニングを看護計画に直結させるー 公立羽咋病院（2020年度 優秀賞） ※入退院における重複する帳票記録類の一元化と多職種の連携
10	小児集中治療室で取り組む 小児集中治療室で取り組む特定行為実践とタスクシフト～効率的で安全・安心な看護の提供を目指して～ 東京都立小児総合医療センター（2021年度 最優秀賞）
AI・ICT等の技術の活用部門	
11	音声入力で時間短縮 音声入力で時間を短縮 残業を減らそう 訪問看護リハビリステーション アオアクア（2021年度 優秀賞）

12	訪問看護エコーによるアセスメント導入 訪問看護におけるエコーによるアセスメント導入と ICT を使った医師との連携 株式会社トラントユイット 訪問看護ステーションフレンズ (2020 年度 最優秀賞)
13	ウィズコロナ ICT 促進 ウィズコロナで ICT 促進！～患者と家族をつなぐオンライン面会の取組～ 社会医療法人柏葉会 柏葉脳神経外科病院 (2020 年度 優秀賞)
14	看護記録革命 新型コロナウイルス感染症クラスター下での看護記録革命！～スマホ活用で問題解決～ 社会医療法人柏葉会 柏葉脳神経外科病院 (2021 年度 優秀賞)

「看護業務効率化先進事例収集・周知事業の認知度等に関する調査 質問票

【目的・経緯】

超少子高齢化の進展により医療・看護ケアニーズが高まる一方、若年人口の減少により、今後大幅な看護職員の人材確保が困難となる中で、看護業務の効率化は喫緊の課題です。日本看護協会では、2019 年から厚生労働省補助金事業「看護業務効率化先進事例収集・周知事業」を受託し、看護業務の効率化に資する事例を収集・選定・表彰する「看護業務の効率化先進事例アワード」や先進事例を自施設で試行する施設への支援を行う「看護業務の効率化試行支援事業」、ポータルサイトを通じた好事例の情報発信を行ってきました。

この度、さらに看護業務の効率化を推進し、看護職がより専門性を発揮できる働き方の推進や看護サービスの質の向上を図るため、看護管理代表者の皆様に、本事業に対する認知度や関心についてアンケート調査を実施することになりました。

設問は、看護業務の効率化への関心をお伺いする計 4 問です。所要時間は約 5 分です。お忙しいところ恐縮ではございますが、ぜひご回答くださいますようお願いいたします。

【問 1】ご回答者の方について伺います。

【問 1-1】所属施設の種別をお答えください。

1. 病院
2. 診療所
3. 介護老人保健施設
4. 訪問看護ステーション
5. 社会福祉施設
6. 介護老人福祉施設
7. その他

【問 1-2】職位をお答えください。

1. 管理職（看護部長相当職、副院長相当職（看護部長兼任含む）、副看護部長相当職、訪問看護ステーション・福祉施設等の所長相当職等）
2. 中間管理職（看護師長相当職、副看護師長相当職、主任相当職）
3. スタッフ（非管理職）

【問 1-3】所属施設のある都道府県名をお答えください。

【問 2】厚生労働省補助金事業「令和 4 年度看護業務効率化先進事例収集・周知事業」（「看護業務の効率化先進事例アワード」や「看護業務の効率化試行支援事業」）をご存じですか。

1. 知っている
2. 名前は聞いたことがある
3. 知らない

【問 3】貴施設が今後の業務効率化をすすめるにあたり、関心のある取組を、下記よりお答えください。

（複数回答可）

1. 記録の効率化（例：記録の標準化、音声入力など ICT の活用）
2. 帳票類の整理（例：院内での帳票類の統一）
3. 業務の標準化（例：手順やマニュアルの見直し）
4. 勤務体制の整備（例：「繁忙度表」を活用した他部署への応援体制）
5. 多職種との連携、タスク・シフト/シェア
6. ICT を用いた情報の共有（例：記録やエコー画像の共有）
7. ロボットなどを用いた作業の効率化（例：物品運搬ロボット、移乗リフト）
8. その他（上記の 1～7 以外）
9. どれも関心がない

【問 4】下表は、「看護業務の効率化先進事例アワード 2019・2020・2021」最優秀賞および優秀賞を受賞した取組です（計 14 事例）。

【問 4-1】1) まず「業務改善」の 7 事例のうち、「知っている」取組事例があれば、下記よりお答えください。（複数回答可）

事例番号	業務改善
1	「ユニフォーム 2 色制」と「ポリバレンタナース育成」による持続可能な残業削減への取組 （一般社団法人熊本市医師会 熊本地域医療センター） ※「ユニフォーム 2 色制」導入による時間外勤務の削減と、ポリバレンタナース（様々な看護単位で活動できるオールラウンドプレイヤー）育成による支援体制の整備
2	看護記録に要する時間削減の効率化への取組 - 記録内容の標準化とリアルタイム記録に焦点を当てて - （県立広島病院）
3	小規模病院における看護クラーク科の立ち上げ・看護クラークの一元管理による看護師負担軽減 （医療法人社団協友会 メディカルトピア草加病院）
4	チーム医療による新たな手術室運営方法の確立～組織を巻き込んだ 3 カ年計画の取組を通して～ （広島県厚生農業協同組合連合会 広島総合病院） ※手術室における勤務体制の整備と、手術室看護師の人材育成
5	ICT ツール×ウェブ会議最大活用による業務効率化への取組 （株式会社デザインケア みんなのかかりつけ訪問看護ステーション）
6	改善活動の推進による働き続けられる職場環境作り ～広島自己採点ツール「チャレンジ」を活用した 3 か年に亘る業務改善の取組～ （医療法人和同会 広島シーサイド病院）
7	看護補助者の退職者減少を目指した「看護補助者の拡大チーム」の編成と「看護補助者ラダーの導入」（学校法人北里研究所 北里大学病院）

【問 4-1】2) 次に「タスク・シフト/シェア、他職種連携」の 3 事例のうち「知っている」取組事例があれば、下記よりお答えください。（複数回答可）

事例番号	タスク・シフト/シェア、多職種連携
8	病棟薬剤師との役割委譲協働による病棟薬剤管理業務の見直し （社会医療法人石川記念会 HITO 病院）
9	入退院支援の活動からつなぐ看護へ外来でのスクリーニングを看護計画に直結させる～ （公立羽咋病院） ※入退院における重複する帳票記録類の一元化と多職種の連携
10	小児集中治療室で取り組む特定行為実践とタスクシフト ～効率的で安全・安心な看護の提供を目指して～（東京都立小児総合医療センター）

【問 4-1】3) つづいて「AI/ICT 等の技術の活用」の 4 事例のうち「知っている」取組事例があれば、下記よりお答えください。（複数回答可）

事例番号	AI/ICT 等の技術の活用
11	音声入力で時間を短縮 残業を減らそう（訪問看護リハビリステーション アオアクア）
12	訪問看護におけるエコーによるアセスメント導入と ICT を使った医師との連携（株式会社トランテュイット 訪問看護ステーションフレンズ）
13	ウィズコロナで ICT 促進！～患者と家族をつなぐオンライン面会の取組～（社会医療法人柏葉会 柏葉脳神経外科病院）
14	新型コロナウイルス感染症クラスター下での看護記録革命！～スマホ活用で問題解決～（社会医療法人柏葉会 柏葉脳神経外科病院）

【問4】下表（再掲）は、「看護業務の効率化先進事例アワード2019・2020・2021」最優秀賞および優秀賞を受賞した取組です（計14事例）。

【問4-2】1) まず「業務改善」の7事例のうち、「貴施設で参考にして取り組みたい」ものがあれば、番号でお答えください。（複数回答可）

事例番号	業務改善
1	「ユニフォーム2色制」と「ポリバレンタナース育成」による持続可能な残業削減への取組 （一般社団法人熊本市医師会 熊本地域医療センター） ※「ユニフォーム2色制」導入による時間外勤務の削減と、ポリバレンタナース（様々な看護単位で活動できるオールラウンドプレイヤー）育成による支援体制の整備
2	看護記録に要する時間削減の効率化への取組 - 記録内容の標準化とリアルタイム記録に焦点を当てて - （県立広島病院）
3	小規模病院における看護クラーク科の立ち上げ・看護クラークの一元管理による看護師負担軽減（医療法人社団協友会 メディカルトピア草加病院）
4	チーム医療による新たな手術室運営方法の確立～組織を巻き込んだ3カ年計画の取組を通して～ （広島県厚生農業協同組合連合会 広島総合病院） ※手術室における勤務体制の整備と、手術室看護師の人材育成
5	ICT ツール×ウェブ会議最大活用による業務効率化への取組（株式会社デザインケア みんなのかかりつけ訪問看護ステーション）
6	改善活動の推進による働き続けられる職場環境作り～広島自己採点ツール「チャレンジ」を活用した3か年に亘る業務改善の取組～（医療法人和同会 広島シーサイド病院）
7	看護補助者の退職者減少を目指した「看護補助者の拡大チーム」の編成と「看護補助者ラダーの導入」（学校法人北里研究所 北里大学病院）

【問4-2】2) 次に「タスク・シフト／シェア、他職種連携」の3事例のうち、「貴施設で参考にして取り組みたい」ものがあれば、番号でお答えください。（複数回答可）

事例番号	タスク・シフト／シェア、多職種連携
8	病棟薬剤師との役割委譲協働による病棟薬剤管理業務の見直し （社会医療法人石川記念会 HITO 病院）
9	入退院支援の活動からつなぐ看護へ外来でのスクリーニングを看護計画に直結させる～ （公立羽咋病院） ※入退院における重複する帳票記録類の一元化と多職種の連携
10	小児集中治療室で取り組む特定行為実践とタスクシフト ～効率的で安全・安心な看護の提供を目指して～（東京都立小児総合医療センター）

【問4-2】3) 最後に「AI／ICT等の技術の活用」の4事例のうち、「貴施設で参考にして取り組みたい」ものがあれば、番号でお答えください。（複数回答可）

事例番号	AI／ICT等の技術の活用
11	音声入力で時間を短縮 残業を減らそう（訪問看護リハビリステーション アオアクア）
12	訪問看護におけるエコーによるアセスメント導入と ICT を使った医師との連携 （株式会社トラントユイット 訪問看護ステーションフレンズ）
13	ウィズコロナで ICT 促進！～患者と家族をつなぐオンライン面会の取組～ （社会医療法人柏葉会 柏葉脳神経外科病院）
14	新型コロナウィルス感染症クラスター下での看護記録革命！～スマホ活用で問題解決～ （社会医療法人柏葉会 柏葉脳神経外科病院）

看護業務の効率化 先進事例アワード2022

受賞施設 事例集

看護業務の効率化先進事例アワード 2022 受賞施設

最優秀賞 365日24時間の電話対応専属スタッフによる訪問看護ステーションにおけるタスク・シフト/シェア

株式会社 Le-caldo 訪問看護ステーション トータルケア

優秀賞 【業務改善部門】

医療機器と電子カルテのデータ共有による看護業務の効率化
～専従医療安全管理者の立場から～

社会福祉法人 恩賜財団 済生会松阪総合病院

【タスク・シフト/シェア、多職種連携部門】

特定行為研修を修了した看護師を中心とする PICC チームによるタスク・シフト
～安心・安全でタイムリーな留置を目指した業務改善の取り組み～

医療法人鉄蕉会 亀田総合病院

【AI・ICT等の技術の活用部門】

患者の転倒・転落リスクをAIで予測し多職種連携で個別ケアを実践する！

社会医療法人石川記念会 HITO 病院

【その他の工夫部門】

コロナ禍がもたらしたリリーフ体制構築の効果

社会福祉法人 恩賜財団 済生会支部 大阪府済生会千里病院

奨励賞 コロナ禍だからできた もう迷わない！色別カテゴリ表記で新たな診療材料管理
～看護部と物品管理センターの協働～

国民健康保険 小松市民病院

年休取得促進のための計画助勤

地方独立行政法人東京都立病院機構 東京都立多摩北部医療センター

特別賞 訪問看護における働き方改革：ICT活用による直行・直帰制の実現

株式会社らふえる らふえる訪問看護ステーション

搬送ロボットを導入した看護師のカイゼン活動—トヨタ生産方式を基盤として—
トヨタ自動車株式会社 トヨタ記念病院



365日24時間の電話対応専属スタッフによる 訪問看護ステーションにおけるタスク・シフト／シェア

株式会社Le-caldo 訪問看護ステーショントータルケア

埼玉県所沢市
職員数 88 名（うち看護職員数55名）



課題・背景

看護師 ①継続した看護ケアが困難に

○請求等に関する問い合わせ等、看護師が必ずしも対応する
必要のない電話にまで訪問中の看護師が対応していたため、
継続して看護ケアを行うことが困難であった

利用者

②電話が繋がらないことによる不安の声

○利用者やその家族が電話をかけても、看護師が他の利用者へ
訪問中や看護ケア中であるとすぐに電話対応できず、
利用者やその家族を待たせてしまうことがあった

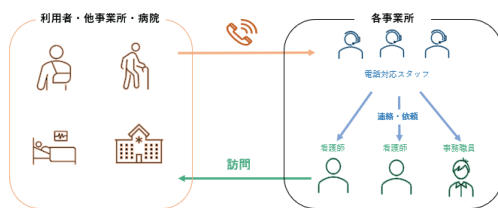
目的・目標

- ①看護師が看護業務のみに集中できる環境を構築すること
- ②365日24時間、電話対応を迅速に行うこと

▶ 大規模事業所の特性を活かし、各ステーションに電話対応専属部署の立ち上げ
※各事業所に電話対応専属スタッフを配属

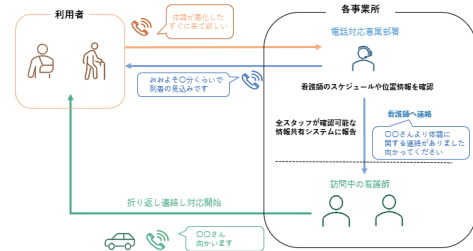
取り組み内容

① 電話対応専属部署の連携体制



- 電話対応専属部署は各事業所ごとに設置
- 電話対応スタッフは2コール以内に応答し、
問い合わせ内容に応じて看護師/事務職員へ報告

▼緊急訪問の依頼があった場合



② 電話対応の質向上への取り組み

○電話対応マニュアルの作成

▶問い合わせ内容に応じた手順・対応

問い合わせ内容	対応方法
体調に関する問い合わせ	看護師へ連絡、看護師がコールバック
緊急訪問の依頼	看護師のスケジュールを確認し、早急に対応できる看護師へ連絡 ▶スケジュール掲示板に情報を共有
訪問日の変更依頼	変更理由・次回訪問日を確認し、スケジュール掲示板に情報を共有
他事業所からの問い合わせ	事務職員へ報告、看護師の対応が必要な場合は、担当看護師がコールバック

▶初期対応するうえで、電話対応スタッフの質を担保する

③ 情報システム・フィードバック体制

○看護師のスケジュール・位置情報を把握

- ・問い合わせのあった利用者に対して一番早く対応できる看護師
に連絡できる仕組み
- ・看護師の位置を把握して利用者の元へ到着するまでの所要時間
を伝える
▶利用者の安心感につながる

成果・効果

① 業務効率化

○時間外勤務時間の削減

22時間/月 ▶ 8.5時間/月

○電話対応時間の削減

看護師 1 人あたり 90分/日 の対応時間を削減

1 件の電話対応：平均5分

1 日の平均対応回数：18件/看護師1人(8時間勤務内)

▶ 看護師は最適な訪問スケジュールを構築することができる
柔軟な訪問計画が可能になることで、
利用者に対してタイムリーに看護ケアを行うことができる

看護業務の効率化 先進事例アワード 2022



365日24時間の電話対応専属スタッフによる
訪問看護ステーションにおけるタスク・シフト/シェア

株式会社Le-caldo

訪問看護ステーション トータルケア

施設概要

1

株式会社Le-caldo

訪問看護ステーション トータルケア



地域社会のための
看護師のための 看護のチカラ
未来の日本のための

所在地

小手指ステーション：埼玉県所沢市

入間ジョンソンタウンステーション：埼玉県入間市

職員数

88 名

看護職員数

55 名

小手指ステーション50名(常時換算 | 32.0)

入間ジョンソンタウンステーション5名(常時換算 | 5.0)

※2022年12月1日 現在

看護師

1 | 訪問中の看護師が電話対応をすることでケアが中断

- 請求等に関する問い合わせ等、**看護師が必ずしも受けなくても解決できる内容の電話も受けていたため、業務が効率的でなかった**
- 利用者やその家族、他事業所からの急な電話により、**継続した看護ケアが中断されているケースが発生していた**
- 頻回の電話対応で**本来訪問すべき予定の調整を余儀なくされており、非効率な状況が発生していた**

利用者

2 | 訪問中の看護師に電話が繋がらない不安の声

- 利用者やその家族が電話をかけても、運転中や看護ケア中であると電話対応をすぐにできないことがあった
- ▶**電話がすぐに繋がれば、利用者も家族も安心感を得ることができる**

目的・目標

1 | 看護師が看護業務のみに集中できる環境を構築すること

- 問い合わせ内容に応じた電話対応の仕組みを構築し、看護ケアの中断が招く不利益を取り除く
- ▶**看護師：訪問中の利用者への看護ケアに集中できる**
- ▶**利用者：継続して看護ケアを受けられる**

2 | 365日24時間、電話対応を迅速に行うこと

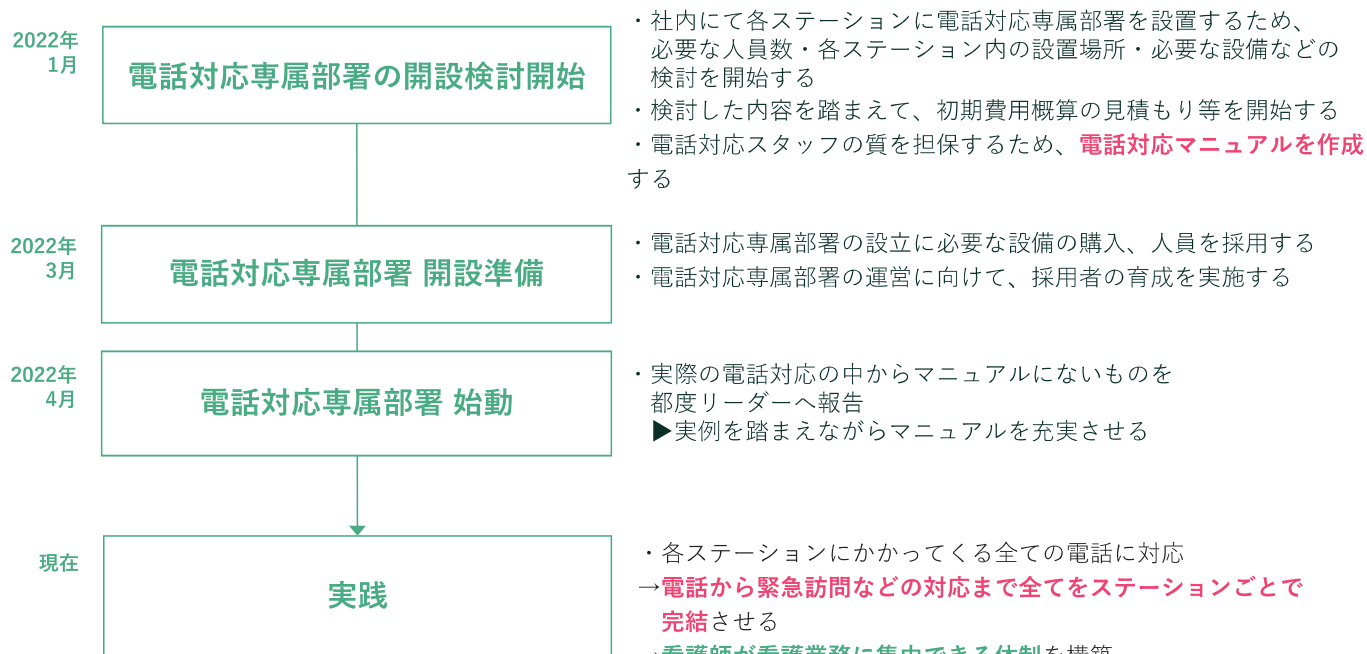
- 利用者と家族にとって、かけた電話にすぐ対応してもらえることは**自宅療養における安心感につながる**
- 事業所の方針として、**365日24時間、待たせることなく電話対応することは重要であると位置付けている**

大規模事業所の特性を活かし、各ステーションに

電話対応専属部署の立ち上げ

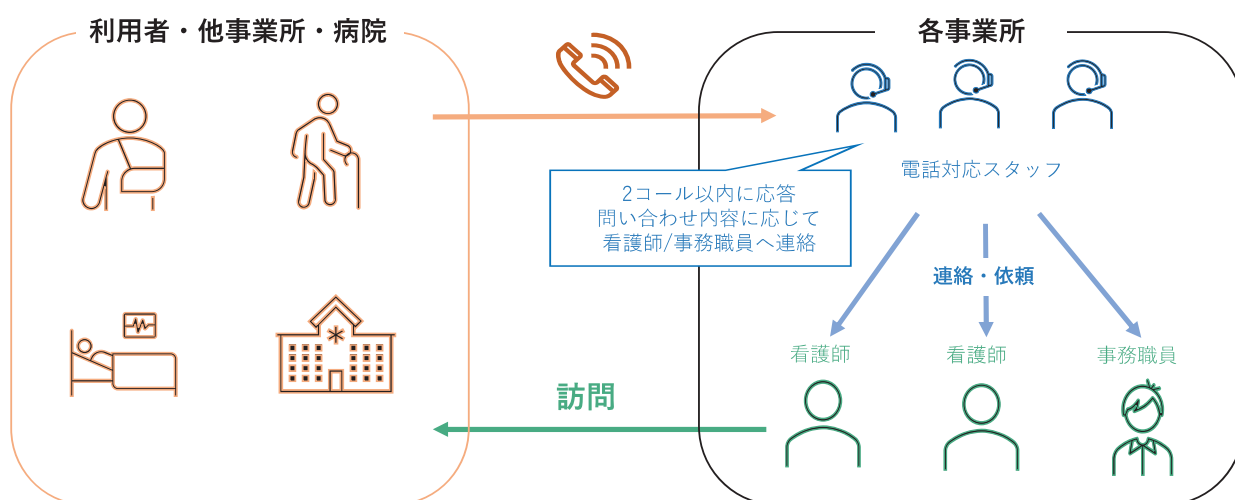
○各事業所に電話対応専属スタッフを配置

1 | 365日24時間稼働電話対応専属部署の設置



取り組み内容

1 | 電話対応専属部署の連携体制

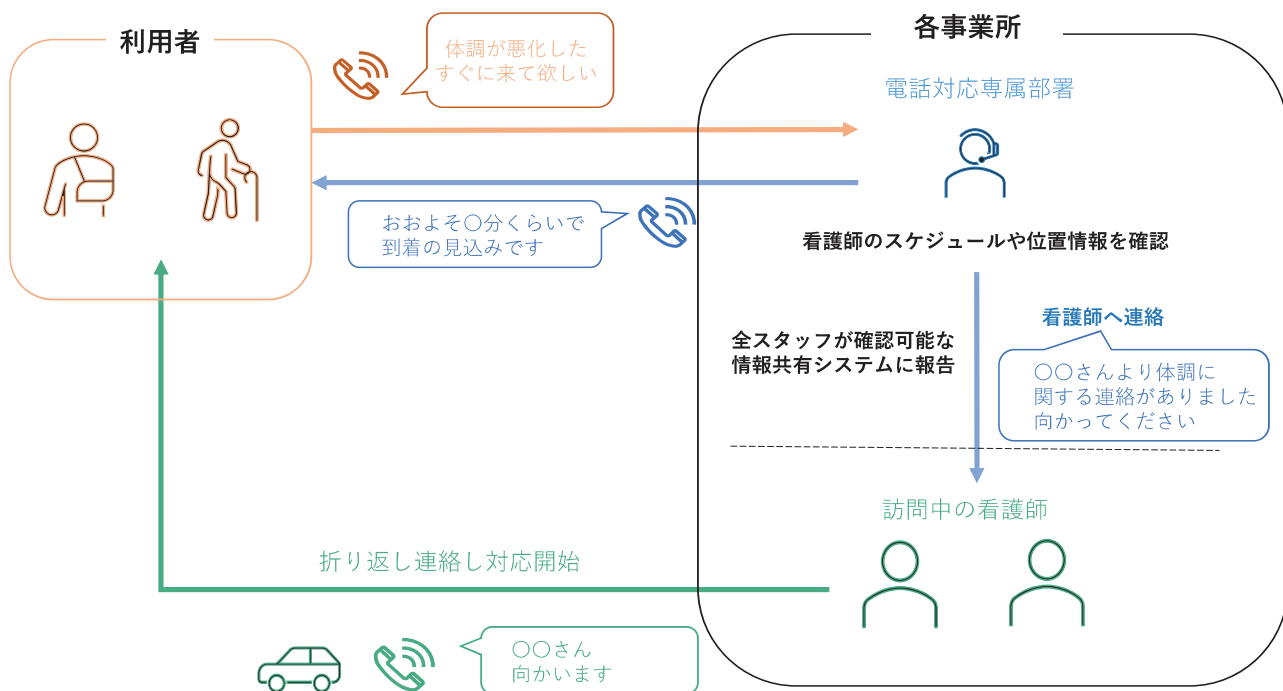


○電話対応専属部署は事業所ごとに設置

○電話対応スタッフは各ステーションの代表として電話窓口に出ている意識を常に持ち対応する

1 | 電話対応専属部署の連携体制

○緊急訪問の依頼があった場合（例）



2 | 電話対応の質向上への取り組み

○電話対応マニュアルの作成 ▶問い合わせ内容に応じた手順を明記

- ・2コール以内に電話に出るよう徹底
- ・訪問日の変更依頼があった場合は変更理由などを職員間で共有
- ・**体調に関する相談は必ず看護師に連絡**
- ・**医療知識の必要な要件は看護師から折り返し連絡** など

初期対応をするうえでの

→ **電話対応スタッフの質**を担保する

○電話オペレーションの構築 ▶電話対応マナーと接遇の徹底

- ▶電話対応の基本から内容に応じた会話の流れと処理方法までをマニュアルに明示し、随時更新



▲小手指事業所の電話対応マニュアル
電話対応専属部署準備時に作成。
随時更新し拡充している

3 | 情報共有システム・フィードバック体制

○看護師のスケジュール・位置情報を把握

- ・問い合わせのあった利用者に対して一番早く対応できる看護師に連絡できる仕組み
- ・看護師の位置を把握して利用者の元へ到着するまでの所要時間を伝える
▶利用者の安心感につながる

EX | 電話対応マニュアルについて

○看護管理者が中心となり、電話対応マニュアルを作成

対応困難な事例が生じた場合、職員間ですぐに情報を共有し、迅速にマニュアルを更新する

▼電話対応マニュアルの内容

- ・業務にあたっての遵守事項：体調に関する問い合わせについて判断しない、報連相の徹底等
- ・電話対応の注意点：接遇、復唱し確認、言葉が聞き取りにくい場合YES/NOでの質問とする等
- ・具体的な対応例：会話形式で例示、情報共有する際の報告例、各担当者への依頼方法等
- ・アクシデント対応、業務の引継ぎ方法等

▼電話対応スタッフの対応例

問い合わせ内容	対応方法
体調に関する問い合わせ	看護師へ報告、看護師がコールバック
緊急訪問の依頼	看護師の空き枠を確認し、早急に対応できる看護師へ連絡 ▶スケジュール掲示板*に情報を共有
訪問日の変更依頼	変更理由・次回訪問日を確認し、スケジュール掲示板に情報を共有
他事業所からの問い合わせ	事務職員へ報告、看護師の対応が必要な場合は、担当看護師がコールバック

*スケジュール掲示板：看護師が持つスマホからいつでも閲覧することが可能。

1 | 業務効率化

▶ 最適な訪問スケジュールの組み立て実現

○時間外勤務時間の削減

22時間/月
2022年1月～3月

▶ 8.5時間/月
2022年4月～6月

看護師の時給を2000円で試算

▶1人あたり35万円/年間を削減

○電話対応時間の削減

看護師1人あたり90分/日の対応時間を削減

1件の電話対応：平均5分

1日平均対応回数：18件/看護師1人(8時間勤務内)

○業務時間の削減によって職務満足度の向上

▶ ○看護師がケアに集中にできることで精神的負担の軽減

○時間外勤務時間の削減によって身体的負担の軽減

2 | 業務専門性の発揮

○看護師や事務職員がそれぞれの業務に集中できる環境づくり

- ▶マニュアルに沿って電話対応する。
個別の判断が必要な場合、看護に関わることは看護師へ、請求や指示書に関わることは事務へ、と内容に合わせて最適な部署に電話をつなぐことが可能になり、
業務分担が明確になった
- ▶電話対応専属部署が配置されたことで、事務職員も業務に集中できるようになった

3 | 利用者の精神的安全性の向上

○各訪問看護ステーションに電話対応専属部署が配置されたことで、すぐに電話がつながるようになり、利用者や家族の安心感につながった

1 | 看護師が看護に集中できる環境整備を進める

2 | 同様の悩みを抱える

他サービス事業所へのサポートを可能にする

1 | 事務所の特性を踏まえたきめ細かなマニュアル作成

2 | 電話対応専属スタッフのマナーと接遇体制

3 | 最適な訪問スケジュールを組み立てる仕組みづくり



医療機器と電子カルテのデータ共有による看護業務の効率化 ～専従医療安全管理者の立場から～

社会福祉法人 恩賜財団 済生会 松阪総合病院

三重県松阪市
430床／職員数 919 名（うち看護職員数489名）



課題・背景

①バイタルサイン・血糖測定に関するインシデント

- 入力漏れ、あるいは測定漏れによる未入力項目
- 誤入力による測定値の異常
- 測定実施から入力するまでのタイムラグ
- ▶ 診断や症状の把握が遅くなり、医師の確認作業が増える

②輸液ポンプやシリンジポンプ・輸液ルートに関するインシデント

- 時間通りに注入ができない注入トラブル
- 流入の記入漏れ
- 輸液ルートの選定間違い
- 三方活栓使用方法間違い
- ▶ 治療の計画通りに進まない

目的・目標

目的 電子カルテ記録における正確性と生産性の向上により、看護業務の効率化を目指す

目標 近距離無線通信連携機能(NFC)*を伴う

- ①記録時間の削減
- ②輸液ルートの院内統一化
- ③輸液ポンプ警報の削減
- EX | 付帯効果：感染対策

*近距離無線通信連携 (NFC | Near Field Communication)
非接触ICカードの通信および機器間相互通信が可能で、機器を近づけることで通信を行うため、「かざす」動作をきっかけにした、わかりやすい通信手段

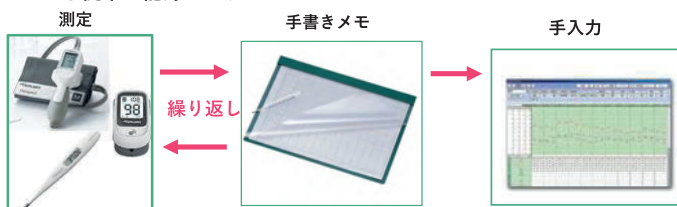
取り組み内容

①関連機器の更新・NFC機能の導入

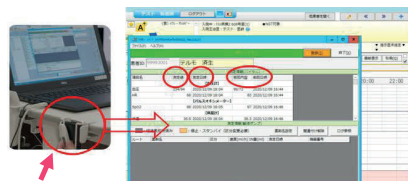


NFCを用いて、タッチするだけで電子カルテ上に
測定値や流量・積算量を反映させて、**記録の正確性と業務の効率化を図る**

○従来の記録ワークフロー



○現在の記録ワークフロー



NFCリーダー/ライター

電子カルテに測定値を反映

NFCリーダー/ライターにタッチするだけで
測定日時・前回測定値・
前回の測定日時 も一目で把握

②輸液ポンプの機器 更新/統一

○関連材料の混在/非統一による従来の問題点

- ・抗がん剤投与時の**注入トラブル**
▶ 浸透圧や輸液の粘調度により注入誤差が生じる
- ・**輸液ルートのクレンメ閉め忘れ**による
フリーフローに関するインシデント報告

○輸液ルートの整理

- ▶ 曝露防止対策輸液ルート導入による曝露防止
- ▶ 全輸液ルートPVC*フリーへの変更による輸液ルート選定ミス防止
- ▶ アンチフリーフロークリップ採用によるフリーフロー防止

○輸液ポンプを滴下制御型から流量制御型に変更

- ▶ 薬剤の粘稠率に左右されることなく適正に注入可能
- ▶ 滴下センサーを無くすことで警報対応時間の削減

○記録ワークフローの変更

- リーダーにタッチすることで
- 輸液時間量や輸液予定量を設定
- 電子カルテの経過表に記録
- ※流量変更があればタッチする度に更新される



*PVCとは：
ポリ塩化ビニルのこと、耐久性に優れているのが特徴。柔軟性を保持するためにDEHP（フタル酸ジエチルヘキシル）を可塑剤として添加している。PVCフリーとは、PVC、DEHPともに使われていないこと。

成果・効果

①記録ワークフロー変更による業務時間の削減

病床430 × 稼働率85% × 測定回数3回/1日
= 測定回数**1,096.5回/1日/全病棟**
▶ 1年に換算すると約**400,222回**

1回の記録時間を2分と仮定すると年間**800,445分**

②業務の削減

- バイタルサイン測定～記録工程の効率化
- 血糖測定～記録工程の効率化

③輸液ポンプ警報対応時間の削減

年間の警報数の変化

- 「滴下警報」「空液警報」が**0件**に
- バッテリー稼働時間が伸び、**3,834件 ▶ 132件**
バッテリー警報数が減少
- 全体の警報数が減少 **60,264件 ▶ 26,892件**
- ▶ 看護師の警報対応時間を年間**約1,668時間**削減

④輸液ルートの統一

看護業務の効率化 先進事例アワード 2022



医療機器と電子カルテのデータ共有による 看護業務の効率化

～専従医療安全管理者の立場から～

社会福祉法人

恩賜
財団

済生会 松阪総合病院

施設概要

1

社会福祉法人 恩賜財団 済生会 松阪総合病院

病院の目標

思いやりの心を持ち、納得のいく説明と共に、
より質の高い医療の提供を目指します
人にやさしく信頼される急性期病院



所在地

三重県松阪市

病床数

430 床

職員数

919 名 (2022年12月1日現在)

看護職員数

533 名 (2022年12月1日現在)

入院基本料

急性期一般入院基本料 1

1 | バイタルサイン、血糖測定に関するインシデント

- 入力漏れ、あるいは測定漏れによる未入力項目
- 誤入力による測定値の異常
- 測定実施から入力するまでのタイムラグ

▶ **診断や症状の把握が遅くなり、医師の確認作業が増える**

2 | 輸液ポンプやシリンジポンプ、輸液ルートに関するインシデント

- 時間通りに注入ができない注入トラブル
- 流量の記載漏れ
- 輸液ルートの選定間違い
- 三方活栓使用方法間違い

▶ **治療が計画通りに進まない**

目的・目標

目的

**電子カルテ記録における正確性と生産性の向上により
看護業務の効率化を目指す**

目標

近距離無線通信連携機能(NFC)*を伴う

*NFC：Near Field Communicationの略称

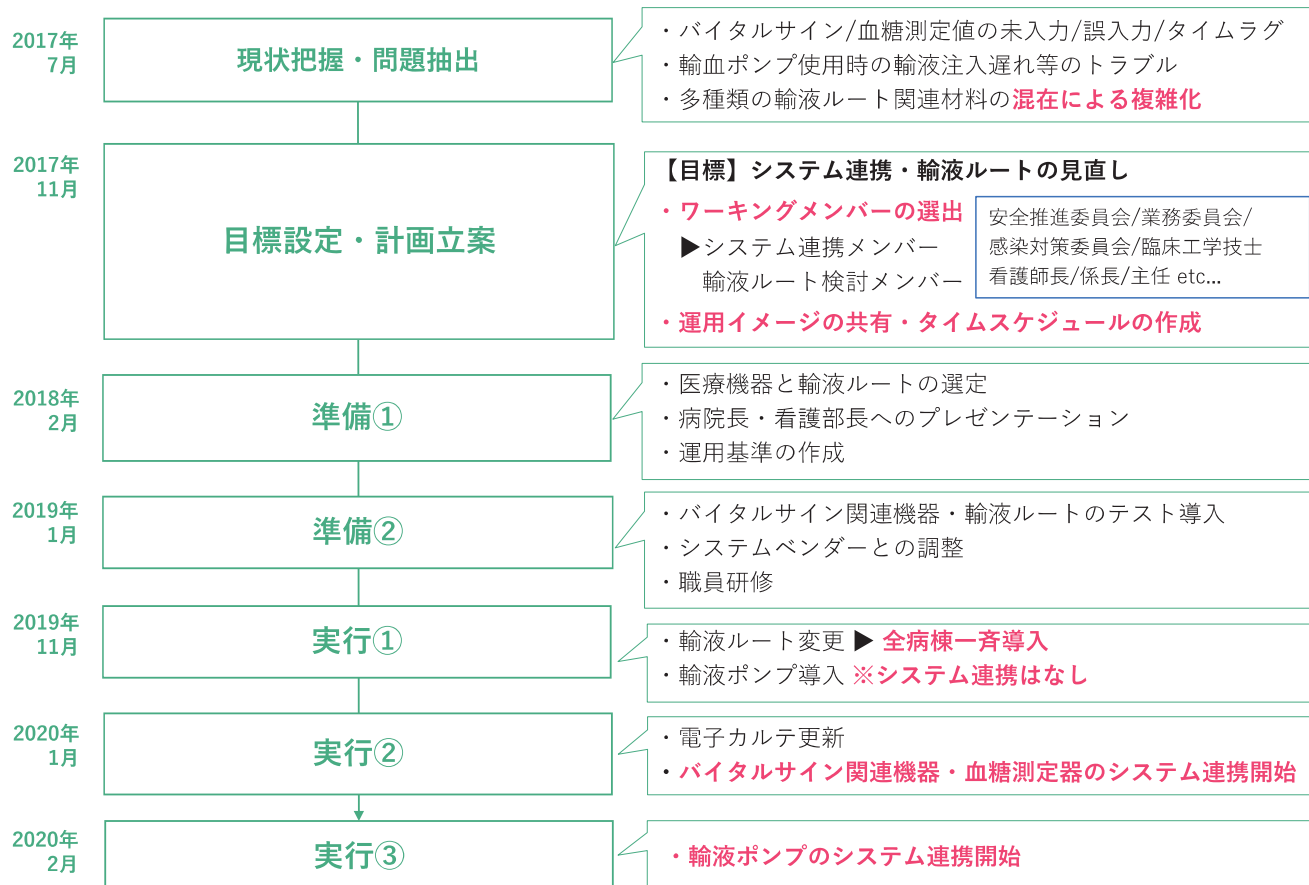
1.記録時間の削減

2.輸液ルートの院内統一化

3.輸液ポンプ警報の削減

EX | 付帯効果：感染対策

- 機器の使用履歴（どこの病棟で、誰に、いつ使用したか）を把握



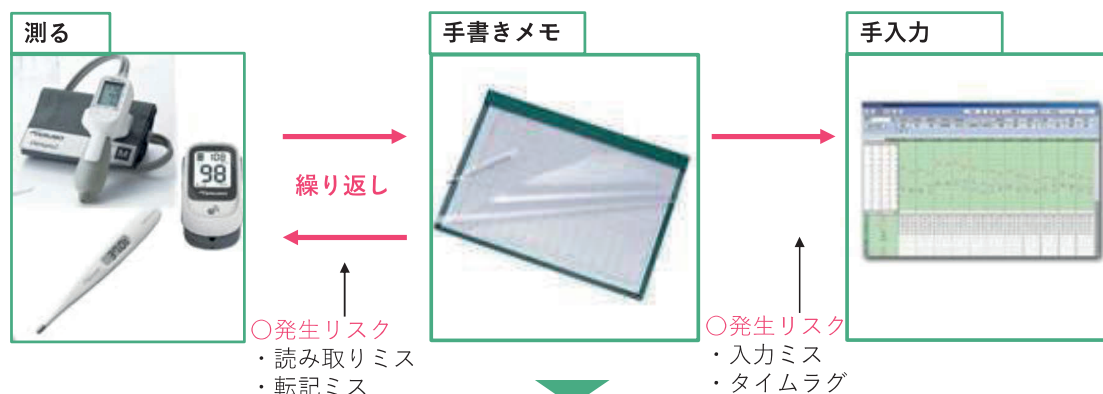
1 | 各種機器の更新・NFC連携機能の導入



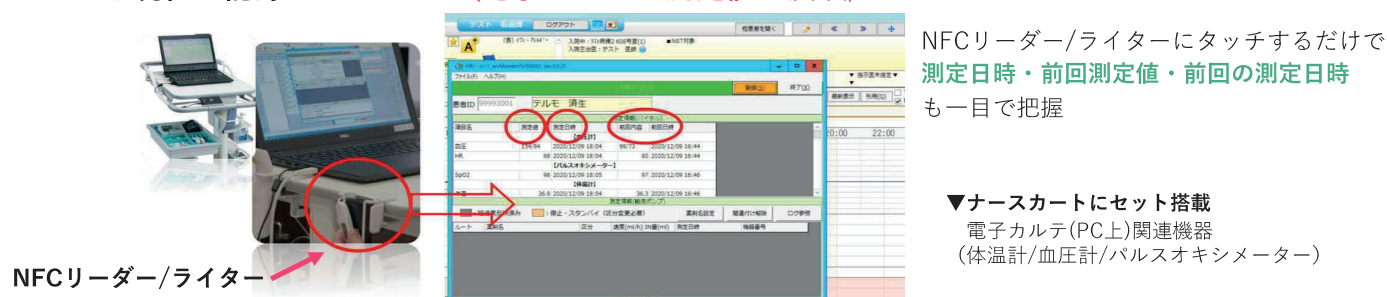
近距離無線通信を用いて、タッチするだけで電子カルテ上に
測定値や流量・積算量を反映させて、**記録の正確性と業務の効率化を図る**

2 | 記録ワークフローの改善

○従来の記録ワークフロー



○現在の記録ワークフロー(電子カルテに測定値を反映)



3 | 輸液ポンプの機器 更新/統一

○関連材料の混在/非統一による従来の問題点

- ・抗がん剤投与時の**注入トラブル**
 - ▶浸透圧や輸液の粘調度により注入誤差が生じる
- ・**輸液ルートのクレンメ閉め忘れ**によるフリーフローに関するインシデント報告

○輸液ルートの整理

- ▶曝露防止対策輸液ルート導入による曝露防止
- ▶全輸液ルートPVC*フリーへの変更による輸液ルート選定ミス防止
- ▶アンチフリーフロークリップ採用によるフリーフロー防止

○輸液ポンプを滴下制御型から流量制御型に変更

- ▶薬剤の粘稠率に左右されることなく適正に注入可能
- ▶滴下センサーを無くすことで警報対応時間の削減

○記録ワークフローの変更



リーダーにタッチして電子カルテと関連付けを行うことで

- 輸液時間量や輸液予定量を設定
- 電子カルテの経過表に記録

※流入変更があればタッチする度に更新される

輸液ポンプにNFCリーダー/ライターをかざす

*PVCとは：
ポリ塩化ビニルのこと、耐久性に優れているのが特徴。柔軟性を保持するためにDEHP（フタル酸ジエチルヘキシル）を可塑剤として添加している。PVCフリーとは、PVC、DEHPともに使われていないこと。

成果

1 | 記録時間の削減

○バイタルサイン測定～記録工程の効率化

- ・手書きでメモを取る
- ・カルテに手入力する
- ・入力の遅れによる医師からの問い合わせ対応

工程の削減

$$\begin{array}{|c|} \hline \text{病床} \\ 430 \\ \hline \end{array} \times \begin{array}{|c|} \hline \text{稼働率} \\ 85\% \\ \hline \end{array} \times \begin{array}{|c|} \hline \text{測定回数} \\ 3\text{回/1日} \\ \hline \end{array} = \begin{array}{|c|} \hline \text{測定回数} \\ 1,096.5\text{回 /1日/全病棟} \\ \hline \end{array}$$

$$\begin{array}{|c|} \hline \text{測定回数} \\ 1096.5\text{回 /1日} \\ \hline \end{array} \rightarrow \begin{array}{|c|} \hline \text{測定回数} \\ \text{約}33,352\text{回 /1ヶ月} \\ \hline \end{array} \rightarrow \begin{array}{|c|} \hline \text{測定回数} \\ \text{約}400,222\text{回 /1年} \\ \hline \end{array}$$

▶ 1回の記録につき2分かかると仮定すると 年間**800,445**分の削減

○血糖測定～記録工程の効率化

- ・手書きでメモを取る
- ・指示簿でインスリン投与量を確認する
- ・血糖値とインスリン投与量をカルテに手入力する
- ・入力の遅れによる医師からの問い合わせ対応

工程の削減

○測定値やスライディングスケールのインスリン量がタイムリーにカルテに反映される

2 | 院内輸液ルートの一

○テスト導入を経て、輸液ルート変更の全病棟一斉導入が実現できた

3 | 輸液ポンプ警報対応時間の削減

○滴下制御型→流量制御型への機種変更による

点滴・空液警報の減少

更新前

更新後

年間警報件数

点滴警報 21,576件

空液警報 10,542件

0件

○バッテリー駆動時間の延長による

バッテリー警報の削減

更新前 3,834件

更新後 **132**件

○全体の警報件数の減少

更新前 60,264件

更新後 **26,892**件

	更新前	更新後
閉塞	21,690 件	25,482 件
点滴	21,576 件	0 件
空液	10,542 件	0 件
気泡	2,622 件	1,278 件
バッテリー	3,834 件	132 件
合計	60,264 件	26,892 件

※使用日数から60日の警報件数に換算（6倍）し、更新前の台数（124台）に補正

ナースステーションから病室までの往復時間を3分と仮定した場合

▶ 看護師の警報対応時間を**約1,668時間**削減

4 | 感染対策

- ・輸液ポンプと電子カルテの連携により、輸液ポンプの使用状況が可視化され、計画的に患者へ割り当てることが可能に

輸液ポンプを介した 接触感染リスクの低減

輸液ポンプの使用状況の一覧表

輸液ポンプの使用状況の一覧表

No.	商品名称	管理番号	科名称	型式	製品番号	用途	状態	投出数量	定額品数	保管在庫日	物品交換	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
①輸液ポンプ	300000124	③輸液ポンプ001	7E-2B1A	3000019021		待機中		2021/9/17	未定	未定																					
②輸液ポンプ	300000125	③輸液ポンプ002	7E-2B1A	3000019022		待機中		2021/9/17	未定	未定																					
③輸液ポンプ	300000126	③輸液ポンプ003	7E-2B1A	3000019023		貸出中	2回線4期	2021/9/17	未定	未定																					
④輸液ポンプ	300000127	③輸液ポンプ004	7E-2B1A	3000019024		使用中	H2O	2021/9/17	未定	未定																					
⑤輸液ポンプ	300000128	③輸液ポンプ005	7E-2B1A	3000019025		点検待ち		2021/9/17	未定	未定																					
⑥輸液ポンプ	300000129	③輸液ポンプ006	7E-2B1A	3000019026		使用中	SQU	2021/9/17	未定	未定																					

☐ 稼働 ☐ 停止 ☐ 故障発生時 ☐ 修理 ☐ 点検待ち
☐ 待機 ☐ 貸出 ☐ 点検 ☐ 修理 ☐ 故障発生時 ☐ 点検待ち ☐ 修理待ち
☐ 点検待ち ☐ 故障発生時 ☐ 修理待ち

機器空状況の把握
待機中

貸出部署の把握
貸出中

使用患者の把握
使用中

点検状況把握
点検中

效果

1|看護ケアの時間の確保ができる→看護の専門性の発揮

- 未入力・誤入力・タイムラグの防止は看護ケアの時間の確保となった

2 | 治療に専念できる→医師の専門性の発揮

- タイムリーに正確なデータを把握できる
- 無駄な連絡が削減でき、治療に専念できる

3 | 記録の保全が可能→安全対策につながる

- 追跡調査時に正確な時刻の把握ができる
- 読み取りミス、転記ミス、入力ミスのインシデント削減
- 機器ごとに患者使用歴を管理することによる、感染防止

1 | システム連携の拡大

○中央物品管理センターで管理をしている医療機器もシステム連携することでさらに効率的な物品管理が可能に

2 | システム連携による看護ケア時間の確保

3 | 安心・安全な看護提供ができる体制の整備

導入のポイント

1 | システム連携を成功させるには、多職種間連携が必須

2 | 日頃から多職種とのコミュニケーションを深め、チーム力を高めることが成功の要

○計画に時間をかけて院内の理解を得ることで、運用開始時の協力体制が整い、スムーズな導入が可能に



特定行為研修を修了した看護師を中心とする PICCチームによるタスク・シフト ～安心・安全でタイムリーな留置を目指した業務改善の取り組み～ 医療法人 鉄蕉会 亀田総合病院

千葉県鴨川市
917床／職員数 2617 名（うち看護職員数950名）



課題・背景

- ① 中心静脈カテーテル留置・長期の末梢静脈カテーテル留置の実態はあるが、PICC*への移行が進んでいなかった

○ 病棟でのPICC挿入の介助による看護師の業務負担の増加

*PICC | Peripherally Inserted Central Venous Catheter（末梢挿入型中心静脈カテーテル）の略語。腕から挿入する中心静脈カテーテルで、他の中心静脈カテーテルと比較して、比較的簡単に挿入でき、挿入後の感染などのリスクも少ないのが特徴とされる

- ② 特定行為研修を修了した看護師の誕生（2020年）

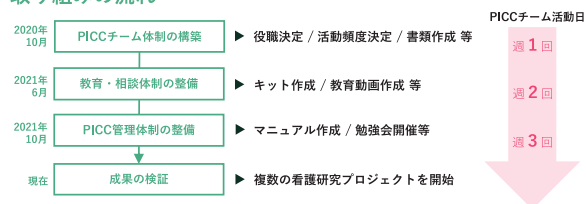
目的・目標

- ① 安心・安全で質の高い看護を効果的・効率的に提供する
② 看護師の業務負担の軽減

▶ 特定行為研修修了者らによるPICCチームの発足

取り組み内容

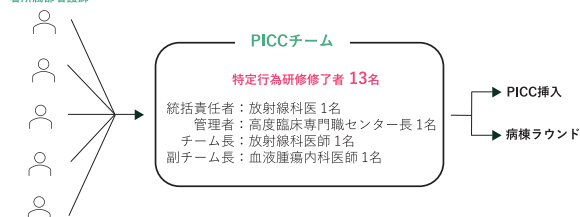
取り組みの流れ



PICCチームの活動体制

- 看護師は、1人が月3日程度PICCチーム活動に従事
- 看護師は病棟または部署横断的に看護ケアを行う専門部署（高度臨床専門職センター）に所属

看所属部署看護師



① PICCチームによる実践

○ 特定行為研修修了者によるPICC挿入

- ・ 週3回（月・水・金）の活動日
- ・ 手順書で患者の病状の範囲を確認
- ・ PICCチーム長の医師との連絡体制の確保
- ・ 挿入者 / 介助者 / 外回りを2～3人の特定行為研修修了者が分担する
- ・ 挿入場所は画像TV室/内視鏡室/病棟などから状況を確認の上判断

○ 病棟ラウンド・アフターケア

- ・ 挿入部位、固定、閉塞の確認
- ・ 違和感や苦痛の確認
- ・ 病棟の看護師からの相談に対応



▲PICC挿入の様子

▲挿入患者への病棟ラウンドの様子

② PICC管理の統一

○ 業務フローの効率化と患者ケア改善

	依頼	調整	挿入・介助	管理
取り組み以前	担当医 他科依頼入力 電話連絡 当日依頼	放射線科医師 診療の合間で日誌、 介助者、部室の調整 画像センターの看護師 当日準備	放射線科医師が挿入 画像センターの看護師 介助、記録、コネクト 医師が病棟で挿入 病棟看護師が介助	病棟の看護師
取り組み以後	担当医 PICC依頼入力	PICCチーム 日誌調整、準備	PICCチーム 特定行為研修修了者 挿入・介助	病棟の看護師 PICCチーム 病棟ラウンド
効率化	依頼テンプレートの作成 当日・事前予約可	依頼一覧の自動化 事前に日報調整	手順書に依りPICCチーム による 挿入 / 介助 / 記録 医師の連絡体制	コンサルテーション アフターケア 教育

成果・効果

① 特定行為研修修了者によるPICC実践

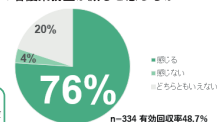
PICC導入実績が 導入前 平均 56件/年間 ▶ 導入後 **589件/年間（2021年）**

② 業務量の削減

年間 **883.5時間** のPICC挿入介助時間を削減

▶ 看護師の身体的負担の軽減

▼ 病棟の看護師へのアンケート
Q. 特定行為研修修了者がPICCを挿入することで
自身の看護業務量が減ると感じるか



③ 費用の削減

医師の人工費を年間 **3,491,554.5円** 削減

年間で挿入に費やす時間 **835.5時間** と医師の時給4,179円で試算
（厚生労働省「令和3年賃金構造基本統計調査による職種別平均賃金（時給換算）」参照）

④ インシデント件数の減少

PICCチームによるPICC穿刺にかかるインシデント件数

2019年度: **1件** 2020年度: **0件** 2021年度: **0件**

医師によるCV穿刺にかかるインシデント件数

2019年度: **4件** 2020年度: **1件** 2021年度: **0件**

⑤ 患者・利用者の苦痛を軽減

PICCへ移行し、長期留置が可能になったことで 穿刺回数削減/適切なカテーテル選択
ができるようになり、**患者の満足度が向上した**

⑥ 安心・安全・タイムリーなPICC挿入の実現

PICCチームへの依頼フロー整備により末梢静脈ライン確保困難事例や自科医師での対応困難な事例でも
スムーズな治療開始/タイムリーな穿刺を実現し、**医療安全性が向上した**

⑦ チーム連携の向上

困難事例などの情報共有やフィードバックにより、**トラブルシューティング、スキルが向上した**
グループウェアシステムの活用や多職種協働により、チーム連携が向上した

看護業務の効率化 先進事例アワード 2022



特定行為研修を修了した看護師を中心とする PICCチームによるタスク・シフト

～安心・安全でタイムリーな留置を目指した業務改善の取り組み～

医療法人 鉄蕉会 亀田総合病院

施設概要

1

医療法人鉄蕉会 亀田総合病院

看護部理念

全ての人々に
最高水準の看護サービスを提供する



所在地	千葉県鴨川市
病床数	917床（一般865床・精神52床）
職員数	3,132 名
看護職員数	1,066 名
主たる入院基本料	入院基本料1

※2022年12月1日現在

1 | 中心静脈カテーテル留置・長期の末梢静脈カテーテル留置の実態があるが、PICC*への移行が進まなかった

- カテーテル血流感染や静脈炎予防のためPICCを院内で推奨
- ※「血管内留置カテーテル由来感染の予防のためのCDCガイドライン2011」に基づく
- 医師によるタイムリーなPICC挿入が困難
- 看護師の業務負担
- 末梢静脈カテーテル挿入、採血の困難事例の穿刺
- 長期点滴加療中の末梢静脈カテーテル交換
- 病棟でのPICC挿入の介助

2 | 特定行為研修を修了した看護師の誕生(2020年)

- 看護師の専門性の発揮

*PICC

Peripherally Inserted Central Venous Catheter（末梢挿入型中心静脈カテーテル）の略語。腕から挿入する中心静脈カテーテルで、他の中心静脈カテーテルと比較して、比較的簡単に挿入でき、挿入後の感染などのリスクも少ないのが特徴とされる

1 | 安心・安全で質の高い看護を効果的・効率的に提供

- タスク・シフトによる看護師の専門性を発揮
- 特定行為研修修了者を中心としたPICCチーム体制の構築
- 安心・安全でタイムリーなPICC挿入と管理の実践
- 患者の苦痛を最小限にし、患者のQOL向上を目指したケアの提供

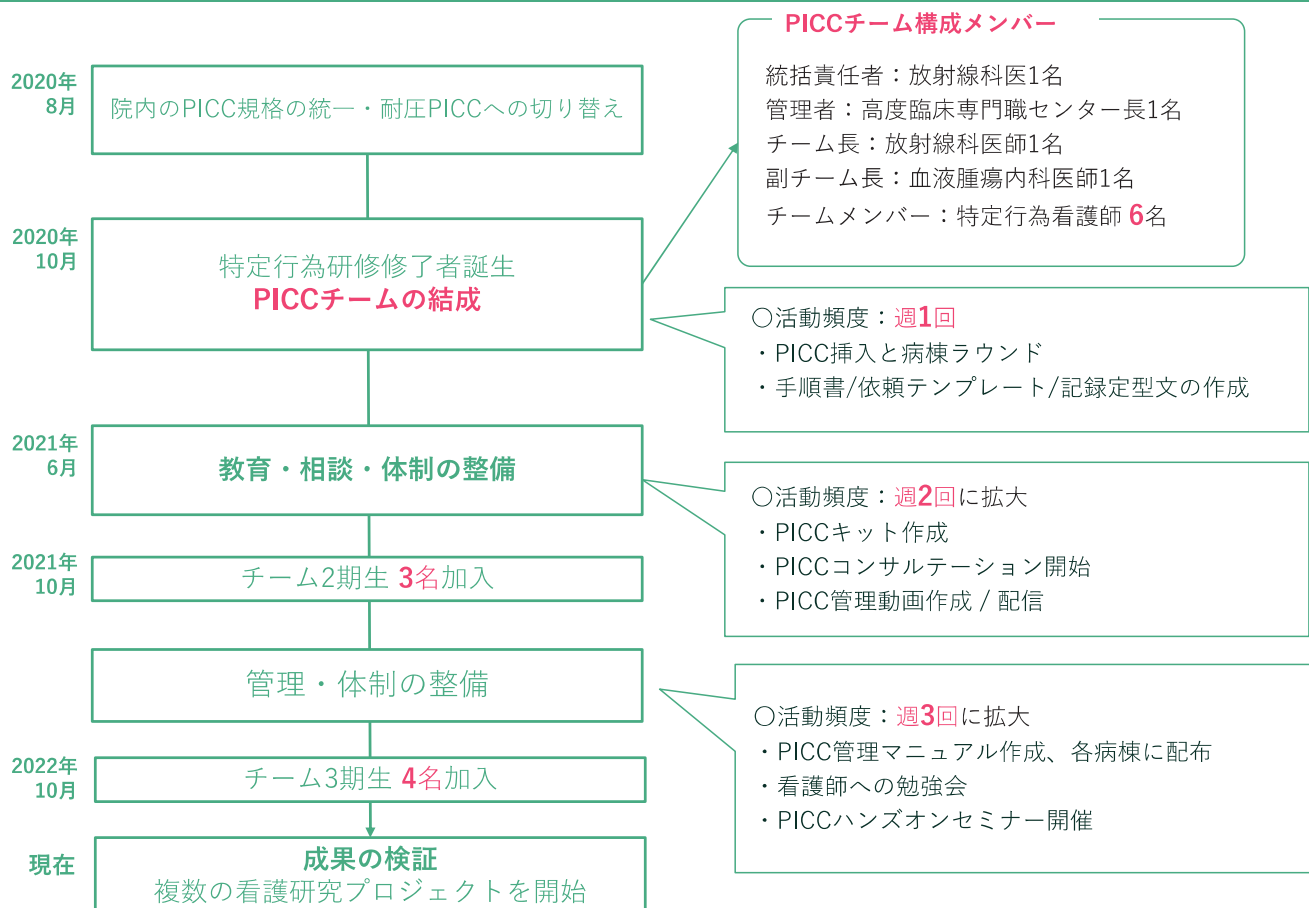
2 | 看護師の業務負担の軽減

- 医師・看護師が専門性を要する業務に専念できる

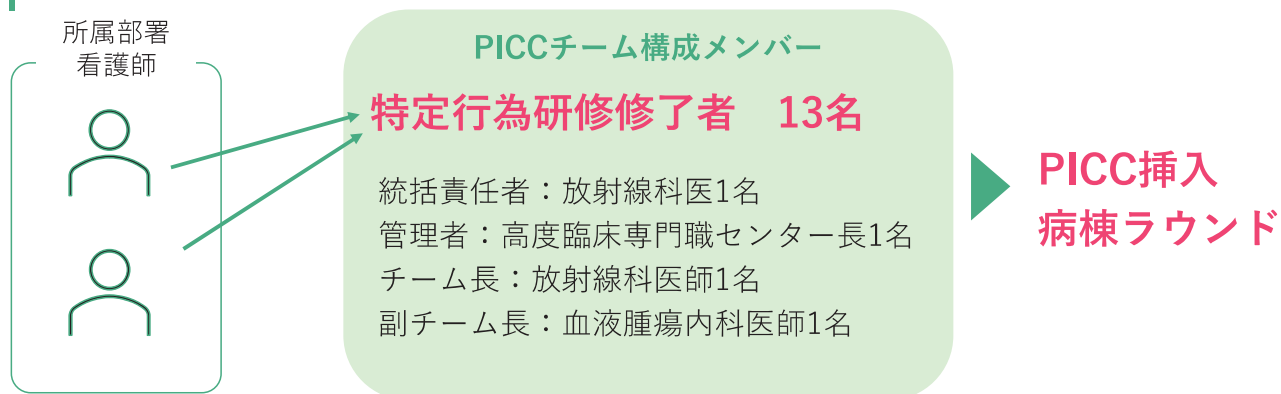
特定行為研修修了者らによるPICCチームの発足

2020年より以下のPICCの特定行為を習得した看護師が誕生

医師の指示の下、手順書により、身体所見（末梢血管の状態に基づく末梢静脈点滴実施の困難さ、食事摂取量等）及び検査結果等が医師から指示された病状の範囲にあることを確認し、超音波検査において穿刺静脈を選択し、経皮的に肘静脈又は上腕静脈を穿刺し、PICCを挿入する。



1 PICCチームの活動体制



○看護師は、**1人が月3日程度PICCチーム活動**に従事

○看護師は**病棟**所属と**高度臨床専門センター**という部署横断的に看護
ケアを行う専門部署に所属

2 PICCチームによる実践

特定行為研修修了者が

○週3階（月・水・金）を活動日とし、各診療科からの依頼を受けてPICC挿入を実施

- ・手順書で患者の病状範囲を確認
- ・PICCチーム長の医師との連絡体制の確保
- ・挿入場所は画像TV室/内視鏡室/病棟などから状況を確認の上判断

▼挿入者 / 介助者 / 外回りを
2~3人の特定行為看護師で分担する

○病棟ラウンド・アフターケア

- ・挿入部位 / 固定 / 閉塞の確認
- ・違和感や苦痛の確認
- ・病棟看護師からのヒアリング

▶ PICCの管理方法や挿入方法の改善を行う
PICCの挿入後のトラブル対応を行う

▼PICC挿入の様子



▼挿入患者への病棟ラウンドの様子

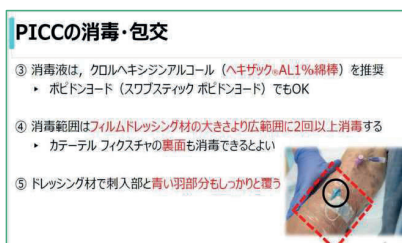


3 教育体制の整備・PICC管理の統一

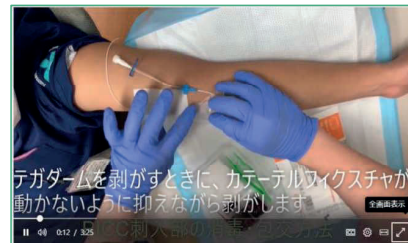
○院内PICCの管理方法の統一

- ・病棟での勉強会を開催
- ・PICC管理マニュアルの作成
- ・PICC管理の動画の作成・配信

▼PICC管理マニュアル



▼PICC管理動画の作成



○PICC管理についてコンサルテーションを受け（PHS、メール）対応する

脱血ができないのですが、どうしたら良いでしょうか

依頼したいのですが、本日挿入可能でしょうか

点滴の滴下がない/薬液の注入ができません

点滴の滴下・薬液の注入はできるのに逆血がありません

3 | 教育体制の整備・PICC管理の統一

○看護部の業務小委員会、教育担当者会でPICC管理についての講義を行う

○研修医、特定行為研修生へのPICCのハンズオンセミナーを開催

▼PICCハンズオンセミナー / ファシリテーター



○PICCに関するインシデントの振り返り改善策の共有

医療安全、管理者、チーム長を含めて振り返り、改善策を共有する

○PICC物品の管理、改善提案をする

PICCキットの作成など

3 | 教育体制の整備・PICC管理の統一

○業務フローの効率化と患者ケア改善

	 依頼	 調整	 挿入・介助	 管理
取り組み以前	担当医 他科依頼入力 電話連絡 当日依頼	放射線科医師 診療の合間で日程、 介助者、部屋の調整 画像センターの看護師 当日準備	放射線科医師が挿入 画像センターの看護師 介助、記録、コスト 医師が病棟で挿入 病棟看護師が介助	病棟の看護師
取り組み以後	担当医 PICC依頼入力	PICCチーム 日程調整、準備	PICCチーム 特定行為研修修了者 挿入、介助	病棟の看護師 PICCチーム 病棟ラウンド
効率化	依頼テンプレートの作成 当日・事前予約可	依頼一覧の自動化 事前に日程調整	手順書に従いPICCチーム による 挿入 / 介助 / 記録 医師の連絡体制	コンサルテーション アフターケア 教育

▶ PICC依頼から管理までタイムリーなケアの提供

1 | 特定行為研修修了者によるPICC実践

OPICC導入実績

導入前

平均56件/年間

導入後

589件/年間(2021年)

○挿入目的

6日以上点滴治療 61%

組織障害性の高い薬剤の使用 28%

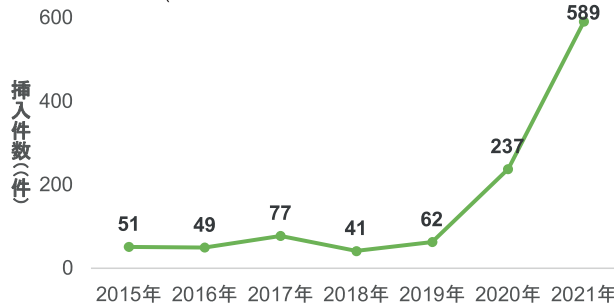
○依頼診療科

82% にあたる28/34診療科がPICCチームに依頼

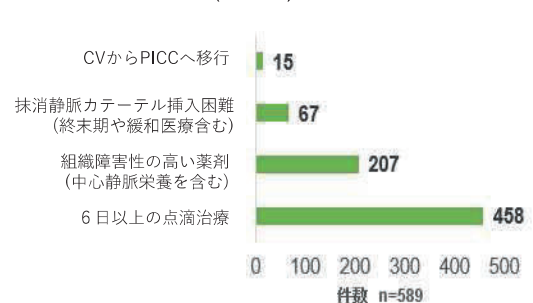
OPICC留置期間

平均 24日間(1-199日)

▼PICC挿入件数(2015年~2021年)



▼PICC挿入目的別件数(2021年)



2 | 業務量の削減

○PICCチームへのタスクシフトにより

年間**883.5時間**のPICC挿入介助時間を削減

(2021年度PICC挿入件数589件、1件当たりの手技時間を1.5時間で計算)

○病棟看護師によるPICC挿入介助からPICCチーム看護師によるPICC挿入により

約**60分**の業務時間 短縮

○末梢静脈ラインからPICCへの移行による

穿刺、採血回数の削減

PICCを末梢静脈ライン・96時間(4日目交換)で差し替えとして試算(CDCガイドラインによる)

○各患者毎の留置期間の合計約11524日 ÷ 4 の合計約**2881回**の穿刺回数削減

末梢静脈ライン差し替えを平均15分として試算

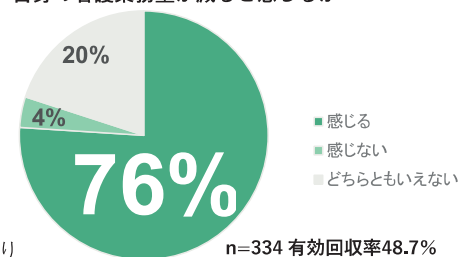
○2881回 × 15分 = 43,215分 = 約**720時間**を削減

PICCを末梢静脈ライン・7日間で1回採血があったと試算

○各患者のPICC留置期間約12348日 ÷ 7日 = 約**1764回**の採血の回数の削減

▼病棟の看護師に対してアンケート

Q.特定行為研修修了者がPICCを挿入することで自身の看護業務量が減と感じるか



看護師の
身体的負担の削減

3 | 費用の削減

医師の人件費を年間**3,419,554.5円**削減

年間で挿入に費やす時間**835.5時間**と医師の時給**4,179円**で試算
(厚生労働省「令和3年度賃金構造基本統計調査による職種別平均賃金(時給換算)」参照)

4 | インシデント件数の減少

OPICCチームによるPICC穿刺にかかるインシデント件数

2019年度：**1**件 2020年度：**0**件 2021年度：**0**件

○医師によるCV穿刺にかかるインシデント件数

2018年度：**4**件 2019年度：**1**件 2020年度：**0**件

5 | 患者・利用者の苦痛を軽減

穿刺回数削減/適切なカテーテル選択により

患者の満足度向上

PICCへの移行で長期留置が可能になり**穿刺、採血の回数が減少**



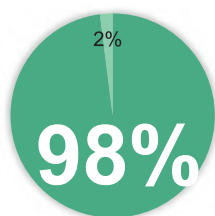
針で刺される回数がだいぶ減って
楽になった



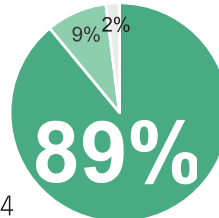
見に来てもらえると安心する

Q. PICCを挿入することで患者の満足度・QOLは向上すると感じますか

医師 n=34



看護師 n=334



■ 感じる
 ■ どちらともいえない
 ■ 感じない

○個々の患者に合わせた治療の適用

- ・PICCチームの病棟ラウンドにより
患者の可動域などを考慮した**個々に合わせた固定**の工夫ができた
- ・CVラインから**PICCに変更することで**
首まわりの苦痛を感じていた患者やシャワーを浴びられなかった患者のQOLが向上した

7 | 安心・安全・タイムリーなPICCの挿入の実現

PICCチームへの**依頼フロー整備**



末梢静脈ライン確保困難事例や自科医師での対応困難な事例でも

スムーズな治療開始/タイムリーな穿刺を実現

穿刺後の管理体制が整備されたことで

医療安全性が向上

8 | チーム連携の向上

困難事例などの情報共有やフィードバックにより

トラブルシューティング、手技スキルの向上

グループウェアシステムの活用

挿入依頼情報やデータ実績の管理、病棟ラウンドの患者状況の共有などを行う

多職種協働

画像センター看護師、放射線科医師、放射線科技師との協働で患者の受け入れや部屋の確保、放射線撮影などを調整し、タイムリーにPICC挿入を行えるようになった

9 | その他

○特定行為研修修了者の職務満足度向上

安心・安全・タイムリーな穿刺の実現で患者、医師からの信頼を獲得した

○技術の向上

PICCチームによる研修医、研修生への指導などにより

研修医の技術向上や**特定行為研修修了者の育成**が進む

○人材不足解消

チームの活動によって**特定行為研修修了者の活躍**が院内にて広まり、看護師の中に**特定行為研修修了者を目指し、研修へ応募が増加**

- 1 | 自院内で安定的に活動していくための継続的改善
- 2 | インシデント対応を含めた経験知の向上
- 3 | チームメンバーのキャリア支援（研究を含めた）
- 4 | さらなる特定行為チームの結成

○病棟人工呼吸チーム / 特定行為看護師外来チーム etc…

▶特定行為研修修了者の活躍の場を拡大

導入のポイント

- 1 | 特定行為研修修了者の活動を院内で周知

「どの行為をするかではなく、どのような質の高い看護を実践できるか」に着目

- 2 | 特定行為研修修了者の活動をサポートする体制の整備

PICCチームに対して

- 3 | 手技が熟達した指導医のサポート



患者の転倒・転落リスクをAIで予測し 多職種連携で個別ケアを実施する！

社会医療法人 石川記念会 HITO病院

愛媛県四国中央市
257床／職員数 550 名（うち看護職員数230名）



課題・背景

- ①入院患者の高齢化率の増加 ▶ 転倒・転落リスクのマネジメントの重要性増加
- ②従来の転倒・転落アセスメントシートを用いた評価による問題点
- ・頻回（入院時・1週間毎・安静度変更時）に評価するが、入院患者の92%が危険度Ⅱ・Ⅲに該当
 - ・優先度の高い患者に対して、適切な判断・対応が実施されていなかった

▼転倒・転落危険度

危険度Ⅰ	1～9点	転倒・転落する可能性がある
危険度Ⅱ	10～19点	転倒・転落を起こしやすい
危険度Ⅲ	20点以上	転倒・転落をよく起こす

目的・目標

多職種が力を合わせ、患者の転倒・転落を防ぎ、
その先にある機能回復、在宅復帰を見据えたケア構築

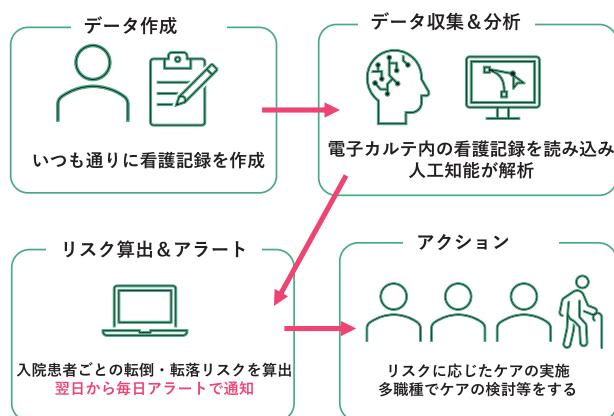
取り組み内容

転倒・転落予測システムAIの活用

言語解析AIが電子カルテの看護記録を解析し、日々、入院患者ごとの転倒転落リスクを予測、アラートを発報し患者ごとのリスク評価をレーダーチャートで示すもの。
評価項目は、感覚・運動機能・活動・意識・認識・排泄・薬剤・言語・医療行為・転倒対策。

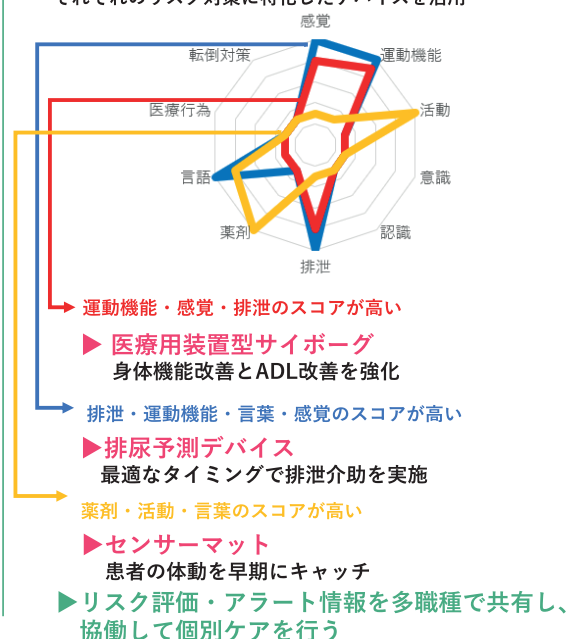
- ① 電子カルテの看護記録を解析し、入院患者の転倒・転落リスクを予測

○運用の流れ



- ②多職種連携で患者に即したケアに取組み、転倒転落インシデントを減少させる

○リスク評価をレーダーチャート化し、転倒転落の要因となるスコアが高い項目に合わせてそれぞれのリスク対策に特化したデバイスを活用



成果・効果

- ①業務量の減少・削減

○転倒転落リスク判定に係る時間 従来の35分 から 0分へと削減
削減された時間を
チームでのアセスメントや対応策の検討などの時間に活用

○優先度の高い患者に対して、適切な判断・対応が可能になった

○看護記録の精度向上

どのような内容の看護記録を作成すればAIによるリスク判定が詳細になり、患者の安楽につながるのか、一人ひとりが考えて記録するようになった。

- ②インシデント報告件数の減少

○多職種協働により、患者に即した対策が講じられるようになったことによる成果

導入前 460件 ▶ 導入後 284件
(2020年) (2021年)

176件の減少

令和4年度厚生労働省補助金事業 看護業務効率化先進事例収集・周知事業
看護業務の効率化 先進事例アワード 2022



患者の転倒・転落リスクをAIで予測し
多職種連携で個別ケアを実践する！

社会医療法人 石川記念会 HITO病院

施設概要

1

社会医療法人 石川記念会 HITO病院

いきるを支える

Humanity
Interaction
Trust
Openness



所在地

愛媛県四国中央市

病床数

257 床

職員数

577 名 ※2022年12月1日現在

看護職員数

230 名 ※2022年12月1日現在

一般病棟入院基本料 1：119床
HCU 1：12床 / SCU：6床、
回復期リハビリテーション病棟入院料 1：50床、地
域包括ケア病棟入院料 2：53床
緩和ケア病棟入院料 1 17床

1 入院患者の高齢化率の上昇

○転倒・転落リスクに対するマネジメントの重要性が高まる

2 転倒・転落予測システムAI導入以前

▼2013年から導入していた転倒・転落アセスメントシートの内容

	大項目（9項目）	小項目（32項目）	点数
A	年齢	70歳以上又は9歳以下	1点
B	既往歴	転倒・転落したことがある/意識消失したことがある	2点
C	感覚	視力障害がある/聴力障害がある	1点
D	機能障害	麻痺・しびれ感がある/骨・関節に障害がある（拘縮・変形）	3点
E	活動領域	足腰の弱り・関節の低下がある/車イス・杖・歩行器を使用している/移動に介助が必要である/寝たきり状態である	3点
F	認識力	見当識障害・意識混濁・混乱がある/認知症がある/病識・判断力・理解力の低下がある/せん妄がある/記憶力の低下/再学習が困難である/精神疾患の既往	4点
G	環境	70歳以上で入院1週間以内である/リハビリ訓練中である	2点
H	排泄	尿・便失禁がある/頻尿である/トイレ介助が必要である/尿道カテーテル留置中/夜間トイレに行く/トイレまで距離がある	各2点
I	薬剤	鎮痛剤/睡眠安定剤/麻薬/抗パーキンソン剤/降圧利尿剤/緩下剤/化学療法	各1点
J	患者特徴	介助を呼ばない・行動が落ち着かない・一人でやろうとする・環境変化に慣れない・自宅で布団で寝ている	4点

3 従来の転倒・転落リスク判定の問題点

○従来の転倒・転落に対する取り組み

2013年から転倒・転落アセスメントシートを導入し、電子カルテで運用していた。

入院時、情報を得て得点を入力してリスクを評価、その後実施対策を講じていた。

電子カルテ上で、自動計算される仕組みとなっており、所要時間は1患者5分程度であった。

○従来の転倒・転落リスク判定

▶転倒・転落アセスメントシートを用いて、入院時・1週間毎・安静度変更時に評価

○入院患者の92%が危険度Ⅱ以上と評価されていた

▶優先度の高い患者に対して、適切な判断・対応が実施されていなかった

▼転倒・転落危険度

危険度Ⅰ	1～9点	転倒・転落する可能性がある
危険度Ⅱ	10～19点	転倒・転落を起こしやすい
危険度Ⅲ	20点以上	転倒・転落をよく起こす

入院患者の92%が危険度Ⅱ・Ⅲに該当

4 従来の転倒・転落予測アセスメントシートの課題

- 入院時、漫然と転倒・転落アセスメントシートを使って評価している
- 超高齢社会が到来し、入院患者の高齢化
 - ▶ **ほとんどの患者が転倒・転落危険度Ⅱ以上**
- 画一的な転倒・転落への対応策で、個別性がない

課題

優先度の高い患者が埋もれてしまい、
適切な判断・対応が実施されていない

目的

**多職種が力を合わせ、患者の転倒・転落を防ぎ
その先にある機能回復、在宅復帰を見据えたケア構築**

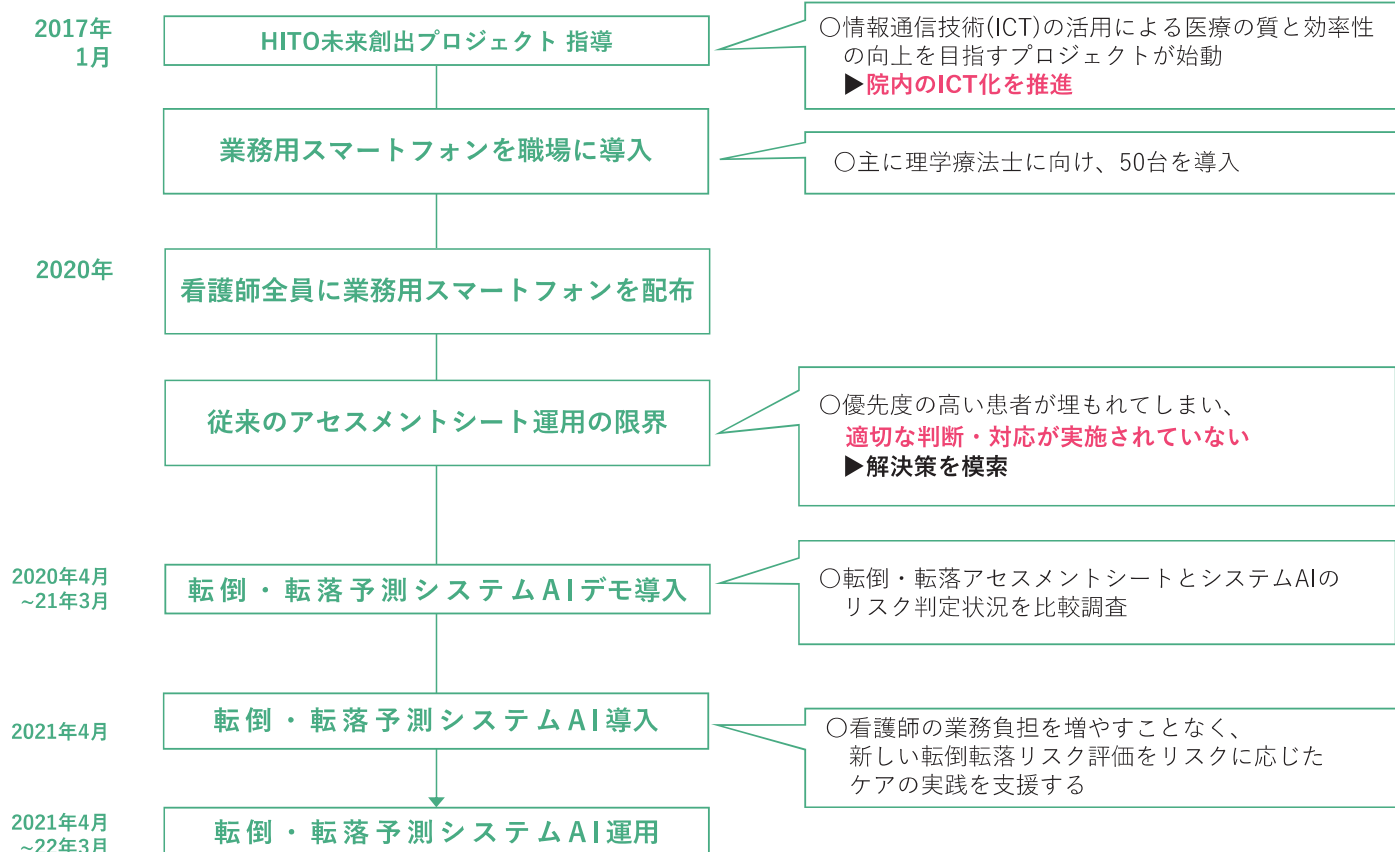
取り組み内容

1

転倒・転落予測システムAIを用いて
電子カルテの看護記録を解析し、入院患者の転倒・転落リスクを予測する

2

転倒・転落予測システムAIのアラート情報により選別されたリスク判定に基づき
多職種連携で患者に即したケアに取り組み、
転倒・転落インシデントを減少させる

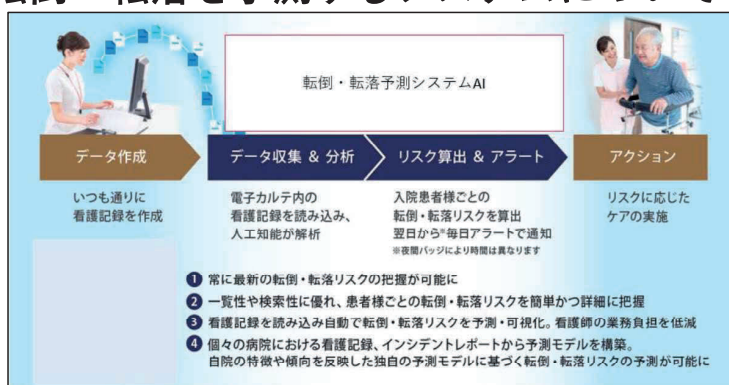


取り組み内容

1

転倒・転落予測システムAIを用いて 電子カルテの看護記録を解析し、入院患者の転倒・転落リスクを予測

AI活用による「生きる」を支える 転倒・転落を予測するシステムについて



○転倒・転落を予測するシステムAI →：言語解析AI

※言語解析AIとは？

形態素分解で単語や文章をベクトル化し、看護記録の特徴を数値化する。それらの関連性をスコア化することで統計学的な客観性・透明性・再現性を実現し、日々の看護記録からアセスメントのサポートが期待できる。

1 転倒・転落予測システムAIを用いて 電子カルテの看護記録を解析し、入院患者の転倒・転落リスクを予測

2020年4月
～21年3月

転倒・転落予測システムAIデモ導入

▼デモ導入

転倒・転落アセスメントシートでの危険度Ⅱ・Ⅲ判定患者数と**転倒・転落予測システムAI**でのアラート発報患者数の比較を行なった。

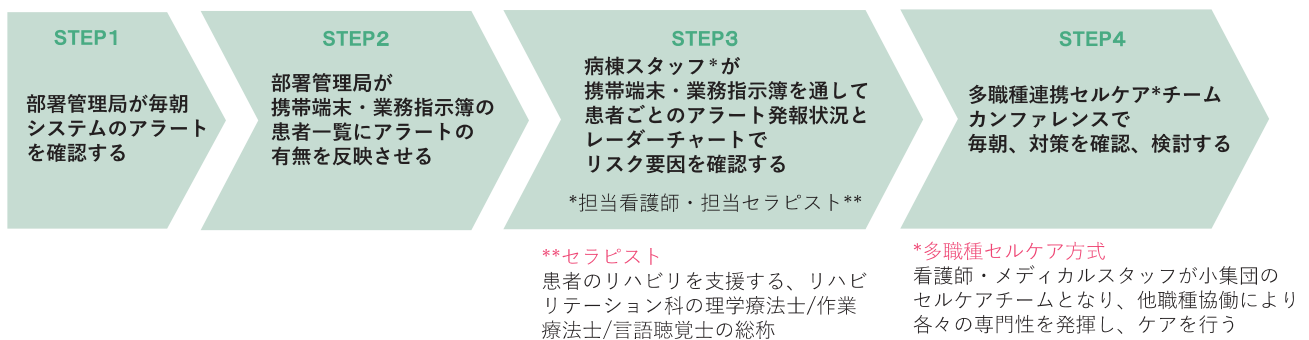
2021年4月

転倒・転落予測システムAI導入

2021年4月
～22年3月

転倒・転落予測システムAI運用

▶運用の流れ



2 看護記録からのAI予測

○転倒・転落を予測するための学習モデルを作成（教師あり学習）

○過去の看護記録データ（3年分：1,299,884件）と実際に転倒した方の

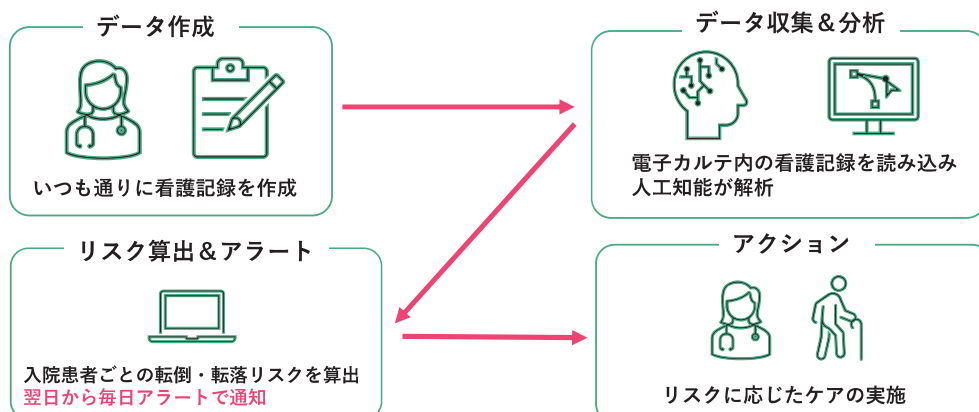
看護記録を比較して学習（看護記録データと転倒転落のインシデントレポート：636件）

▶エンジニアや医療安全部と多職種での**医療用語の摺合**や**リスク判定する用語の選定**を行った
解析において**判定する閾値の設定**は何度も検討しようやく現在の形に落ち着いた

○「予兆検知」のため、転倒・転落事象の**直前（前日～7日前）の文章に注目**

○AIシステムサーバを院内ネットワーク内に設置

○看護記録のデブリーを**自動取得し、アラートを発信**



3 転倒・転落予測システムからの分析

○リスクをスコア化

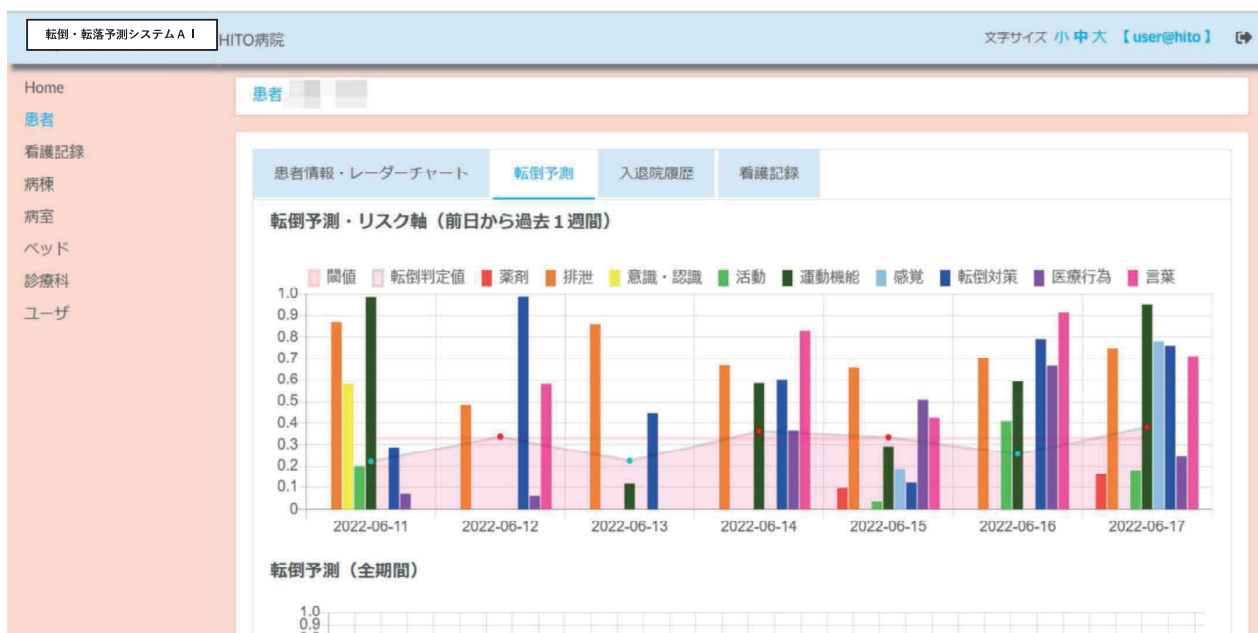
▶夜間に前日の看護記録を解析し、設定言語から重要度を数値化



3 転倒・転落予測システムからの分析

○時系列での転倒・転落リスク予測

▶要因別にデータを抽出し、患者に即したケアに繋げる



3 転倒・転落予測システムからの分析

○リスク評価をレーダーチャート化

▶リスクが高い要因を一目で把握可能



3 転倒・転落予測システムからの分析

○病棟毎のリスク対象者を抽出・表示

▶各項目で並び替え可能で、重要度の高い患者を把握できる

患者

この画面を Home にする

すべて (4250) 入院中 (234) 転倒注意 (130)

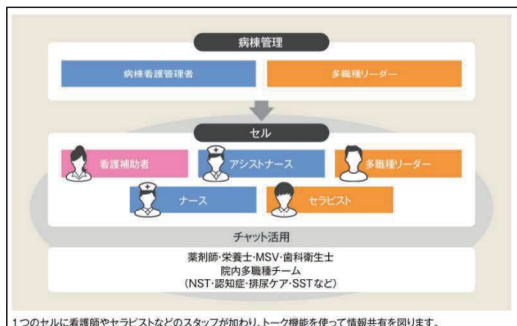
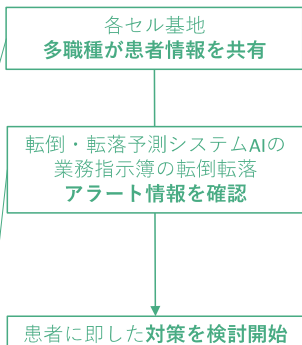
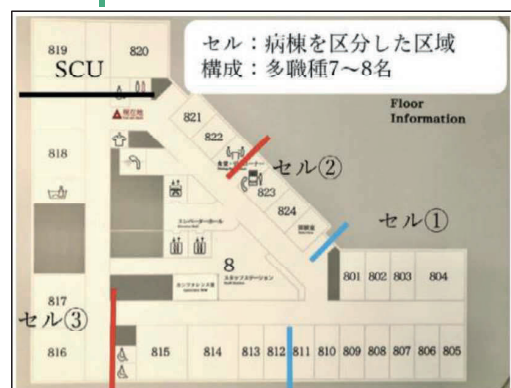
アラート	スコア	患者名	患者コード	病棟	病室	ベッド	直近アラート日	直近入院日
○	0.352979			5階病棟			2022/06/15	2022/05/12
○	0.441338			5階病棟			2022/06/15	2022/06/12
○	0.408809			5階病棟			2022/06/17	2022/06/16
○	0.365347			5階病棟			2022/06/14	2022/06/14
○	0.347984			5階病棟			2022/06/16	2022/06/07
○	0.420997			5階病棟			2022/06/17	2022/06/05
○	0.517174			5階病棟			2022/06/17	2022/05/25
○	0.4141			5階病棟			2022/06/17	2022/05/31
○	0.400611			5階病棟			2022/06/16	2022/05/22
○	0.343899			5階病棟			2022/06/16	2022/05/12

First Previous 1 2

全 130 件中 101 - 130 件の患者を表示しています

4 多職種連携による個別ケアの実践

▼チャット機能を用い、多職種でケアを検討



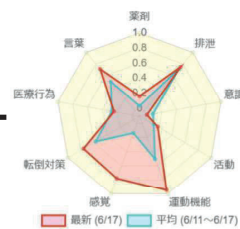
院内専門チームを交えた **マトリクス型組織***へ
フラット型チーム医療*を強化

*マトリクス型組織：1人1人が複数のチームに参画し複数の業務を遂行
*フラット型チーム医療：意思決定等の権限を職員全体に分散

5 転倒・転落システムAIを活用した対応策

①要因：運動機能・感覚・排泄・感覚

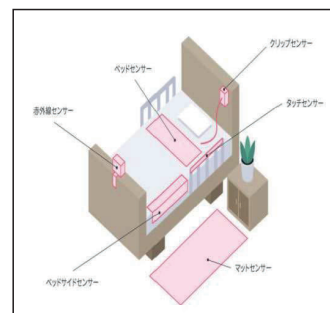
②要因：薬剤・活動・言葉



▶ **医療用装置型サイボーグ**
多職種で用いて、身体機能改善
とADL改善を強化

▶ **排尿予測デバイス**
多職種で最適なタイミングで
排泄介助を実施

▶ **センサーマット**
適正使用し、多職種で体動を早期
にキャッチ



▶ 患者の個別的な問題に焦点をあてて対策をとることが可能になった

1 | 業務量の減少・削減

転倒・転落アセスメント危険度Ⅱ・Ⅲ
病棟入院患者全体の**92%**

転倒・転落予測システムAIでの
アラート発報患者数
病棟入院患者全体の**45%**

○転倒転落リスク判定に係る時間 従来の**35分**から**0分**へ削減 ▶ チームでのアセスメントや対応策の検討などの時間に活用
*患者1人につき5分、当該患者7名と換算

転倒・転落予測システムAIによるリスク因子の高い患者の選別により

○優先度の高い患者に対して、適切な判断・対応が可能

AIが看護記録を解析した上リスク判定を行っているので

○スタッフの負担軽減に繋がる

○看護記録の精度向上

▶どのような内容の看護記録を作成すればAIによるリスク判定が詳細になり、
患者の安楽につながるのか、一人ひとりが考えて記録するようになった

2 | インシデント報告件数の減少

多職種協働により、患者に即した対策が講じられることで

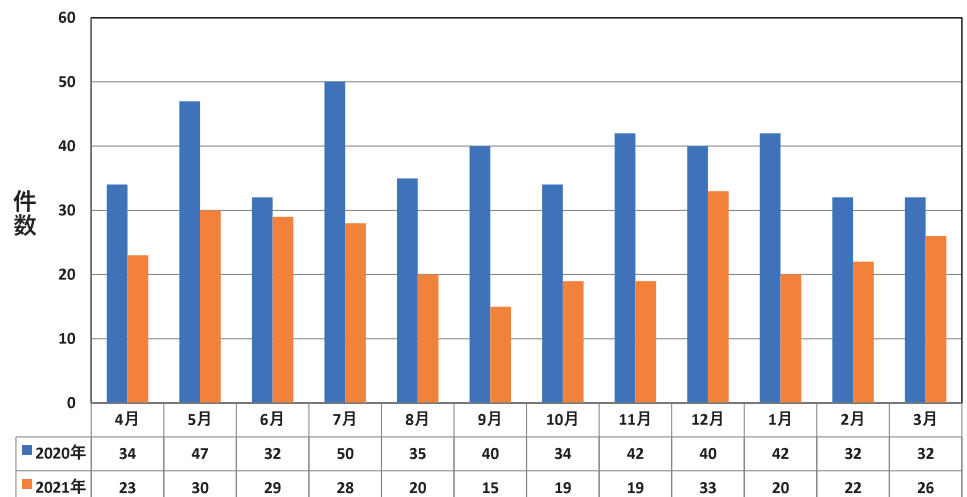
○転倒・転落インシデント報告件数が減少した

▼取り組み前後の転倒・転落インシデント報告件数

導入前(2020年) **460件**

導入後(2021年) **284件**

176件の減少



AIシステムの更なる展開

○臨床現場で使用しているアセスメントシートなど現場のデータを有効に使うことにより **AIを活用できれば労働時間短縮につながる**

○転倒・転落予測システム A I は、多職種でケアの検討をするなどの **多職種連携を強化することにより、適切な転倒・転落アセスメントが可能と考えられる**

導入のポイント

1 | 現場データのDX化を進める

○**データ共有や業務の可視化・業務整理**を前提として進める

2 | AIに正確な看護記録を学習させる

- AIの運用にはデータ解析の元となる正確な情報が必要不可欠。
- AIに提供する情報が多いほど、リスク評価等の精度は向上する。
- 患者の安楽を目指すアセスメント力を活かした記録を作成する。

3 | 多職種連携



コロナ禍がもたらしたリリーフ体制構築の効果

社会福祉法人 恩賜財団 済生会支部
大阪府済生会千里病院

大阪府吹田市
333床／職員数 926名（うち看護職員数399名）



課題・背景

①従来の非体系的な看護職員リリーフ体制

○急な休みが発生した場合には副看護部長が個別に対応するという非体系的な運用方法

②コロナ患者の受け入れ開始による混乱

○新型コロナウイルス感染症専門病棟（以下、コロナ病棟）では24時間患者の受け入れ体制を確保するため7対1基準を大きく上回る看護職員配置を行っていた

しかし、繁閑格差がたびたび発生するため、人員の適正配置と人材育成に苦労した

③有給休暇取得率の部署間格差

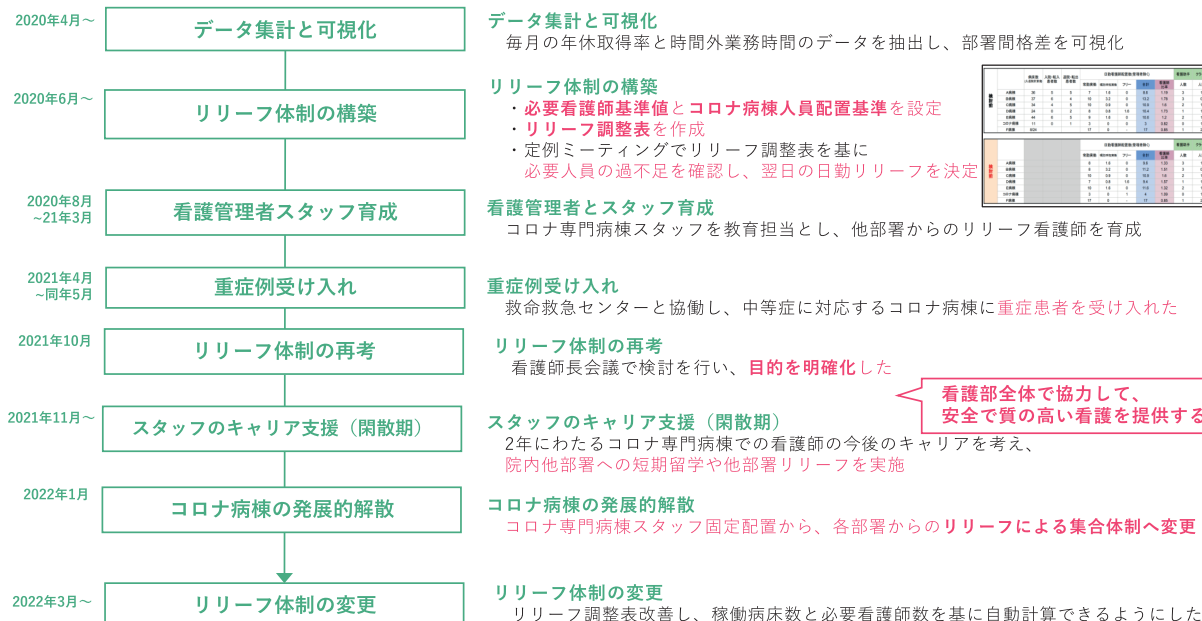
○病棟間の取得率格差 | 最大値【62.1%】 最小値【48.6%】：最大格差は13.5%あった

○看護師1人あたりの取得日数格差 | 中央値最大値【12.3日】中央値最小値【8.5日】：最大格差は3.8日あった

目的・目標

24時間新型コロナウイルス感染症患者を受け入れる体制と
通常診療を両立させるためのリリーフ体制を確立する

取り組み内容



看護部全体で協力して、
安全で質の高い看護を提供する

成果・効果

①体系的なリリーフ体制構築の実現

○定例ミーティングでリリーフ調整表を用いて日勤リリーフを決定

②有給休暇取得状況の改善

○有給休暇取得率の上昇・部署間格差の改善

	年次有給休暇取得率 (平均)	年次有給休暇取得率の部署間格差	
		最小値～最大値	中央値
2020年度	48.6%	36.3%～70.3%	55.2%
2021年度	55.3%	48.6%～74.0%	55.8%

③時間外業務時間の削減

○一人あたりの月平均時間外勤務時間数の削減

	月平均一人当たり 時間外勤務時間数	一般病棟看護師 時間外勤務時間（総計）
2020年度	10時間34分	32,801時間
2021年度	9時間33分	29,153時間

④人件費の削減

○看護師の時給を2,000円で試算した場合 年間**660万円**の削減

⑤看護職員アセスメント力・感染対策スキルの向上

○中等症コロナ患者のケアを経験した看護職員の増加

47名(2020年度) ▶ **160名(2021年度)**

▶ コロナ病棟やICUにおけるコロナ重症患者に対する看護の経験から
呼吸器関連のアセスメント力や感染対策スキルが向上

看護業務の効率化 先進事例アワード 2022



コロナ禍がもたらした リリース体制構築の効果

社会福祉法人 恩賜財団 済生会支部
大阪府済生会千里病院

施設概要

1

社会福祉法人 恩賜財団 済生会支部 大阪府済生会千里病院

病院理念（行動規範）

心のこもった
チーム医療を行う



所在地	大阪府吹田市
病床数	333 床
職員数	908 名
看護職員数	352名
入院基本料	入院基本料1

※2022年12月1日時点

1 非体系的な看護職員リリーフ体制

○急な休みが発生した場合には副看護部長が個別に対応する、非体系的な運用方法だった

2 新型コロナウイルス感染症患者の受け入れ開始による混乱

○新型コロナウイルス感染症専門病棟（以下、コロナ病棟）では24時間患者の受け入れ体制を確保するため7対1基準を大きく上回る看護職員配置を行っていた

しかし、繁忙格差がたびたび発生するため、人員の適正配置と人材育成に苦労した。

▼経緯

2020年 3月 呼吸器内科病棟に新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）患者の受け入れを開始

同年 8月 同病棟をコロナ病棟とする病床再編成

2021年12月 第5波までは、大阪府からの要請に応じて最大21床の中等症に対応するコロナ病棟を運用

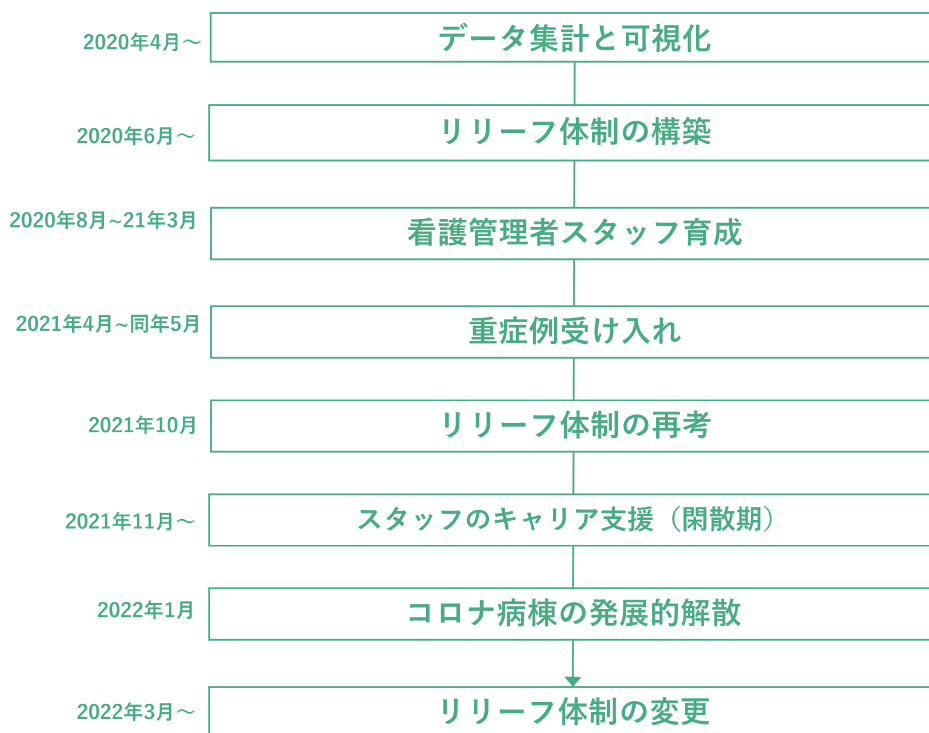
3 有給休暇取得率の看護部内の部署格差

有給休暇取得率の部署格差に対する改善のため、一般病棟に限らず
手術・外来部門、救命救急センターを巻き込んだリリーフ体制の構築が必要

| 目的・目標

24時間新型コロナウイルス感染症患者を受け入れる体制と
通常診療を両立させるためのリリーフ体制を確立する

取り組みの経緯



1 | データ集計と可視化

○毎月の年次有給取得率と時間外業務時間のデータを抽出し、部署格差を可視化



2 | リリーフ体制の構築

○必要看護師基準値と、コロナ病棟人員配置基準を設定

▼2020年6月 コロナ病棟人員配置基準（初版）

患者数	リーダー	メンバー	フリー	日勤 看護師数
～4名	1	2	1	4
5名～7名	1	3	1	5
8名～10名	1	4	1	6
11名～13名	1	5	1	7
14名～16名	1	6	1	8
17名	1	6	2	9

○重症度、看護師の習熟度を考慮し作成した

▼2022年3月 コロナ病棟人員配置基準（最新版）

患者数	リーダー	メンバー	フリー	日勤看護師数
3名～5名	1	1	0	2
6名～8名	1	1	1	3
9名～11名	1	2	1	4
12名～14名	1	4	1	6
15名～17名	1	5	1	7
18名～20名	1	6	1	8
21名～23名	1	7	1	9
24名～27名	1	8	1	10

2 | リリーフ体制の構築

○リリーフ調整表を作成

○定例ミーティングでリリーフ調整表を基に必要人員の過不足を確認し、翌日のリリーフ体制を決定

▼リリーフ調整表

検討前		病床数 (入退院計算後)	入院・転入 患者数	退院・転出 患者数	日勤看護師配置数(管理者除く)					看護助手		クラーク		リリーフ数(出す)		リリーフ数(受け入れ)	
					常勤実働	嘱託/時短実働	フリー	合計	看護師 比率	人数	人数	人数	希望	人数	希望		
	A病棟	36	5	5	7	1.6	0	8.6	1.19	3	1	0	不可	1	受け持ち		
	B病棟	37	6	4	10	3.2	0	13.2	1.78	3	0	2	どちらでも可	0	不要		
	C病棟	34	4	5	10	0.9	0	10.9	1.6	2	1	1	どちらでも可	0	不要		
	D病棟	24	0	2	8	0.8	1.6	10.4	1.73	1	1	1	どちらでも可	0	不要		
	E病棟	44	6	5	9	1.6	0	10.6	1.2	2	1	0	不可	1	受け持ち		
	コロナ病棟	11	0	1	3	0	0	3	0.82	0	1	0	不可	1	ケア		
	F病棟	8/24			17	0	-	17	0.85	1	2	0	不可	0	不要		

ミーティングにて調整後

検討後			日勤看護師配置数(管理者除く)					看護助手		クラーク		リリーフ数(出す)		リリーフ数(受け入れ)	
			常勤実働	嘱託/時短実働	フリー	合計	看護師比率	人数	人数	人数	希望	人数	決定		
	A病棟		8	1.6	0	9.6	1.33	3	1	0	不可	1	受け持ち		
	B病棟		8	3.2	0	11.2	1.51	3	0	2	受け持ち	0	不要		
	C病棟		10	0.9	0	10.9	1.6	2	1	0	不可	0	不要		
	D病棟		7	0.8	1.6	9.4	1.57	1	1	1	ケア	0	不要		
	E病棟		10	1.6	0	11.6	1.32	2	1	0	不可	1	受け持ち		
	コロナ病棟		3	0	1	4	1.09	0	1	0	不可	1	ケア		
	F病棟		17	0	-	17	0.85	1	2	0	不可	0	不要		

※本スライドのリリーフ調整表は、2022年3月時点使用版

3 | 看護管理者とスタッフの育成

○コロナ病棟配属の看護師を教育担当とし、他部署からのリリーフ看護師を育成

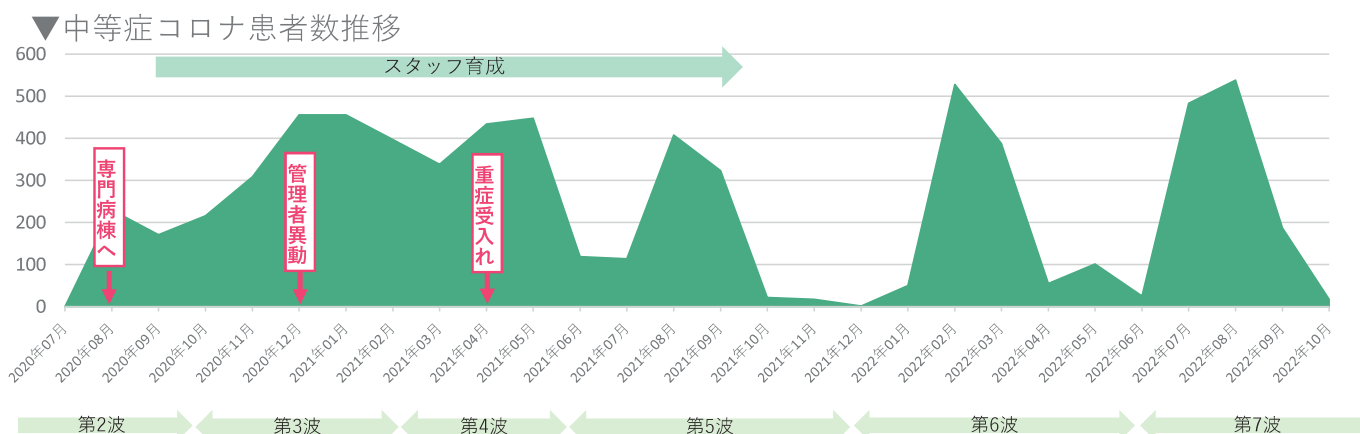
- ・管理者が2ヶ月コロナ病棟に異動し、感染症看護の実務を経験する機会とした
- ・PNS®による日々の看護ケアを通し、感染症看護と他科患者の看護を双方で教育し合える体制をつくった
- ・コロナ病棟に異動した管理者が、2ヶ月の異動期間が終わった後、自部署内で伝達を行った

※PNS®は国立大学法人福井大学の登録商標

4 | 重症例の受け入れ

○救命救急センターと協働し、中等症に対応するコロナ病棟に重症患者を受け入れを開始した

○済生会の他施設より看護師の応援派遣を受けた



5 | リリーフ体制の再考

○リリーフ体制の目的の明確化

- ・看護管理者間で、今のリリーフ体制の課題、看護部としてリリーフの目的を明確にすべき等の意見があった
- ・看護師長会議で、リリーフ体制に関する検討を行った

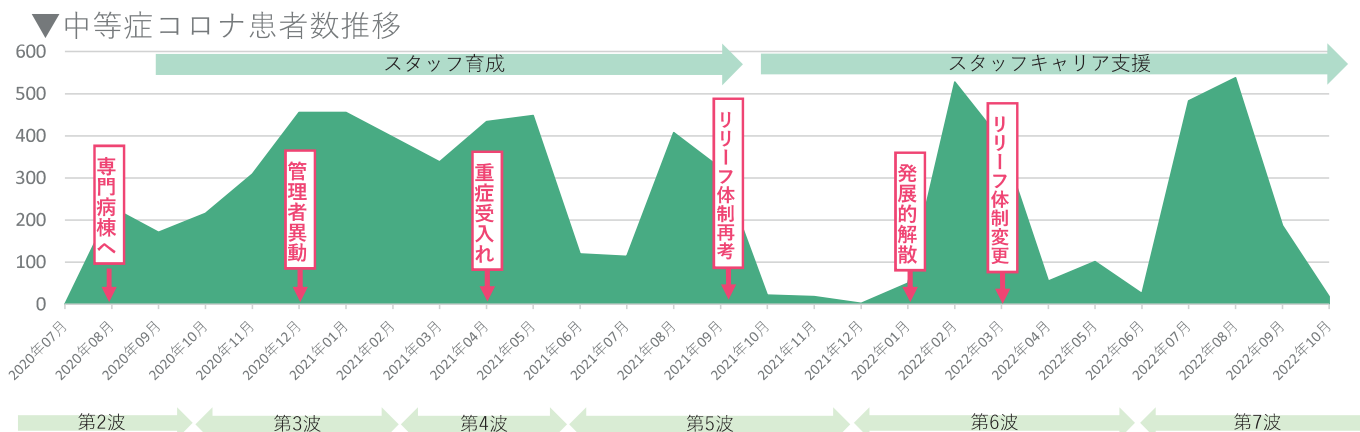
目的

- ・看護部全体で協力して、安全で質の高い看護を提供する
- ・済生会の他施設に頼ることなく、済生会千里病院の患者は、済生会千里病院の看護師で看護する

6 | スタッフのキャリア支援(閑散期)

○2年にわたるコロナ病棟での看護師の今後のキャリアを考え、
コロナ病棟で勤務する看護師の短期留学や他部署リリーフを実施

○定例ミーティングでコロナ病棟の看護師配置数を最終決定後、
他部署へのリリーフを調整する仕組みへ変更

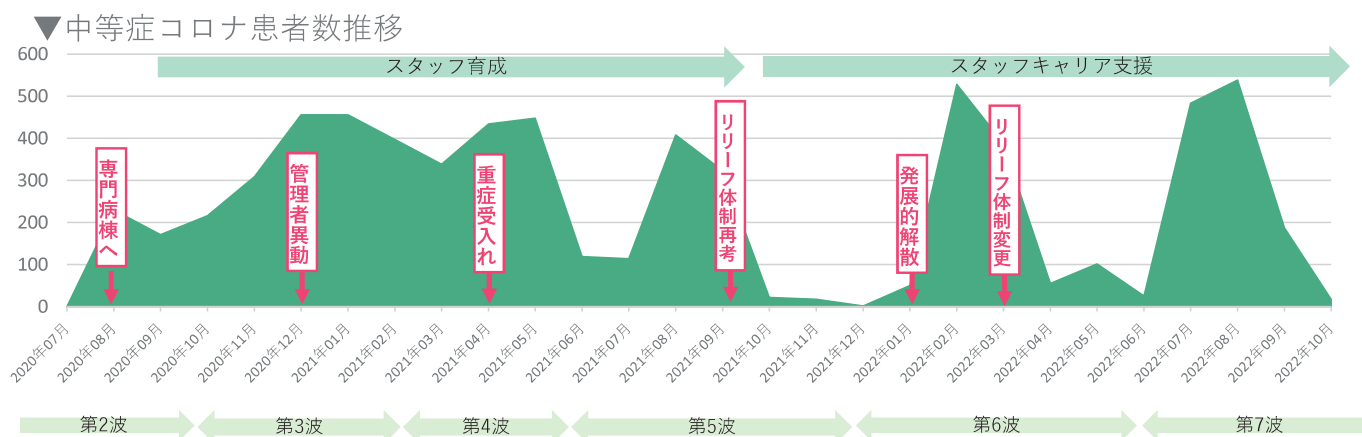


7 | コロナ病棟の発展的解散

- コロナ病棟を、看護師固定配置から、**各部署からのリリーフによる集合体制へ変更**
 - ・コロナ病棟に配属されていた看護師全員と面談し、希望を聞いた
 - ・看護師は全員他病棟へ異動し、**コロナ病棟の配置人員は看護管理者1名のみとした**

8 | リリーフ体制の変更

- リリーフ調整表*を改善（*リリーフ調整表は、スライド7参照）
 - ・稼働病床数と必要看護師数を基に自動計算できるようにした
- 定例ミーティングで翌日のコロナ病棟の職員配置数を最終決定後、他部署へのリリーフを調整する仕組みへ変更



効果

1 | 体系的なリリーフ体制の構築

- 副看護部長が個別に対応する非体系的なものから、体系的な運用方法を構築することができた

2 | 看護師の人員配置の適正化と、病院機能の維持

- 看護師のアセスメント力、感染対策スキルの向上による効果
 - ・**柔軟な人員配置ができた**
 - ・コロナ病棟の運用と併行して、救命救急センターでのコロナ重症患者の受け入れおよび三次救急応需を一度も止めることなく、脳卒中、心筋梗塞、外傷等を受け入れ、がん診療も継続して行うことができた
 - ・**感染拡大防止につなげることができた**

成果

1 | 年次有給休暇取得状況の改善

○年次有給休暇取得率の上昇・部署間格差の改善

	年次有給休暇取得率 (平均)	年次有給休暇取得率の部署格差	
		最小値～最大値	中央値
2020年度	48.6%	36.3%～70.3%	55.2%
2021年度	55.3%	48.6%～74.0%	55.8%

2 | 時間外勤務時間の削減

○一人あたりの月平均時間外勤務時間数の削減

	月平均一人当たり 時間外勤務時間数	一般病棟看護師 時間外勤務時間（総計）
2020年度	10時間34分	32,801時間
2021年度	9時間33分	29,153時間

3 | 人件費の削減

時間外業務時間の削減により、
仮に看護師の時給を2,000円で試算した場合

年間約**660万円**の削減

4 | 看護師のアセスメント力・感染対策スキルの向上

○中等症コロナ患者のケアを経験した看護師の増加

中等症コロナ患者のケアを経験した看護師数

47名(2020年度) ▶ **160名**(2021年度)

○看護師の呼吸器関連のアセスメント力や感染対策スキルが向上

コロナ病棟やICUでのコロナ重症患者に対する業務を経験が活きた

5 | 看護師の意識変化

○リリーフに対する看護師の意識変化

・当初は消極的であった看護師が、主体的にリリーフに行くようになった

6 | 看護管理者の成長

○看護師の声を聞いて改善活動を行うという看護管理者成長の機会

- ・リリーフ体制に対する看護師へのアンケート結果では、ポジティブな意見がある反面、「相談できる人がいないので困る」「居場所がない」「経験がないため対応に困った」などの意見があった
- ▶看護師がより働きやすい環境を整えるため、主任看護師会議で取り組む

○看護部全体の適正な人員配置について考え対応しようとする管理者の意識改革

- ・看護師長一人ひとりが自部署だけでなく、看護部全体の状況を意識的に把握できるようになり、適正な人員配置について考え、議論できるようになった
- ・患者数と看護師配置数に基づいたリリーフ調整に限らず、業務が集中する一時的な短時間のリリーフ（お助けナース）や、自部署では対応する機会の少ない診療科・特殊治療へのリリーフ（ペーシング挿入中患者等、より専門的な看護が必要な患者がコロナ病棟に入院した際の応援対応）が臨機応変にできるようになった

今後の展望

1 | リリーフ調整表の見直し

- リリーフ調整表によるリリーフの実績を蓄積している
- 今後は重症度、医療・看護必要度や入院患者数、手術件数等の変数により重みづけを反映させたリリーフ調整表へ改善するよう検討中である

2 | 人員配置に関する指標の検討・より適正な人員配置の実現

- リリーフの実績データを参考に、人員配置の指標を検討しより適正な人員配置を目指す

3 | 環境整備

- 物品配置や、業務手順の標準化により、どの部署でも働きやすい環境をつくる

4 | キャリア形成支援

- リリーフが人員配置だけでなく、個人のキャリアビジョンに反映する取組みを検討する

導入のポイント

- 1 | 看護管理者が対話を繰り返し、目標を共有する
- 2 | 自部署だけでなく看護部全体の状況を把握し、全体として適正な看護配置を考える
- 3 | 管理職への適切な権限委譲を行う
- 4 | 情報を継続的に発信し、組織の使命やビジョンを伝え続ける



コロナ禍だからできた もう迷わない！ 色別カテゴリ表記で新たな診療材料管理 ～看護部と物品管理センターの協働～

国民健康保険 小松市民病院

石川県小松市
340床／職員数 573 名（うち看護職員数307名）



課題・背景

COVID19の拡大による**病棟の再編成・職員の配置転換**により**病棟間でのスタッフ異動が増加**
▶診療材料探しに時間がかかり、非効率であった



診療材料の表記が一般名称で分かりにくい



引き出しを何カ所も開けないとどこにあるかわからない



表示が白色のみで分かりにくい

▼改善前の診療材料棚



目的・目標

目的

病棟の診療材料の表示・配置を標準化し診療材料を探す時間を短縮する

目標

- ① 院内の診療材料配置場所を把握・可視化する
- ② 見やすい、わかりやすい表記を作成する

取り組み内容

① 診療材料の表示・配置の標準化

「コッターの変革理論」を応用し、8段階に分けて取り組みを実施

*参考文献：倉岡有美子(2018)「看護現場を変える コッターの企業変革の看護への応用」医学書院

2020年3月～

- STEP 1** 危機意識を高める
COVID-19患者の受け入れ開始により、看護職員の異動や応援業務が増えたが、応援先で材料探しに苦労しているとの声が聞かれた
- STEP 2** 変革推進チームを作る
副院長(物品管理班)と主任、物品管理センターで推進チームを立ち上げ
- STEP 3** 適切なビジョンを作る
病棟の診療材料の表示・配置を標準化し、診療材料を探す時間を削減する
- STEP 4** 変革のビジョンを周知徹底する
推進チームは部署の管理者で組織、部署スタッフへの取り組み周知を進めた
- STEP 5** 従業員の自発的な行動を促す
病棟間の材料配置の違いを可視化することで、各部署の看護師の表示・配置の標準化への意識を高める
- STEP 6** 短期的な成果を生む
COVID-19患者の受け入れ病棟から診療材料の表示・配置を標準化し、材料探しの時間が短縮された
- STEP 7** さらに変革を進める
COVID-19患者の受け入れ病棟の表示方法をさらに他病棟に広げ、現場スタッフの意見を聞きながら工夫を重ねた
- STEP 8** 変革を根付かせる
班活動(副院長会・主任会)から委員会活動へ規模拡大し、病棟だけでなく外来にも進める

② 全病棟の材料振り分け

病棟ごとで同じ診療材料でもミキシング材料室/処置材料室の配置が異なっていたが

- 物品管理センターが材料のバラつき状況を色分けし、可視化
- 看護師が材料を配置する場所の振り分けを決定するための基準を設置

Ex. 血液に関する検体材料 → ミキシング材料室
血液以外の検体材料 → 処置材料室

▼振り分け前 ■ミキシング材料室 ■処置材料室

材料CD	材料名	規格	カテゴリー	本棟3病棟	本棟5病棟	本棟7病棟	本棟8病棟
XXXXX	Q10-30吸入(50箱)★	小型血前測定器用(血前測定)	20G×4mm 14※	血液測定			
XXXXX	4-777777777 (4F)	30G/0.8mm/12 30※	血液測定	A10	A07	B02	A09
XXXXX	4F 4-777777777 (4F)	30G/0.8mm/12 30※	血液測定	A10	A07	B02	A09

▼振り分け後

材料CD	材料名	規格	カテゴリー	配置場所	本棟3病棟	本棟5病棟	本棟7病棟	本棟8病棟
XXXXX	Q10-30吸入(50箱)★	小型血前測定器用(血前測定)	20G×4mm 14※	血液測定	ミキシング			A09
XXXXX	4-777777777 (4F)	30G/0.8mm/12 30※	血液測定	血液測定	ミキシング	A09	A06	A07
XXXXX	4F 4-777777777 (4F)	30G/0.8mm/12 30※	血液測定	血液測定	ミキシング	A09	A06	A07

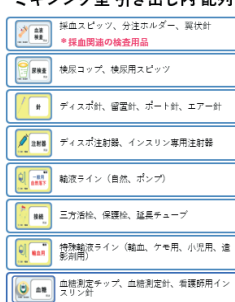
③ カテゴリ・引き出し内の配列の決定

○カテゴリの整理

材料を分析し、**大分類(カテゴリ) > 中分類(関連) > 小分類(商品)**と定めた

○引き出し内の配列整理

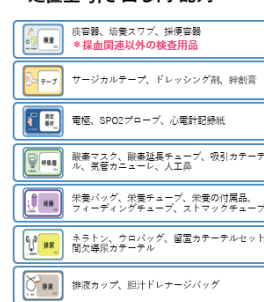
ミキシング室 引き出し内 配列



上段
数や種類が多い小物

下段
大物で引き出しやすいもの

処置室 引き出し内 配列



④ カテゴリの色分け・イラスト化

大分類(カテゴリ)で色別化
材料のイラストを挿入した表示カードを作成

▼運用の様子



中分類をイラスト化

中分類

大分類



「関連」と記載

成果・効果

① 業務量の削減・減少

診療材料を探す時間の削減

検尿コップを探す時間	取り組み前	取り組み後	
自部署看護師(7名)	17秒	3秒	自部署看護師は14秒の短縮
他部署看護師(5名)	48秒	5秒	自部署看護師は43秒の短縮

中心静脈カテーテル(CV挿入)の準備時間

CV挿入の準備	取り組み前	取り組み後	
自部署看護師	7分～10分	3分～5分	自部署看護師は2～7分の短縮

② 費用の削減

診療材料の定数を見直し、診療材料を適正に配置できるようになり、不要な在庫を持たなくなる ▶各病棟の**物品購入費用の削減**

③ 看護職の身体的・精神的負担の軽減

診療材料を探す → 他のスタッフに聞く手間/ストレスの削減

▶新人看護師・異動してきた看護師にも分かりやすくなった

▶イラスト表記により、外国人の看護補助者にも分かりやすくなった

④ 感染予防

引き出しに触れる回数が激減した

⑤ チーム連携の向上

看護部と物品管理センターが協働し、役割分担が進んだ

⑥ 診療材料の整理整頓

棚に収まりきらない材料がなくなった

看護業務の効率化 先進事例アワード 2022



コロナ禍だからできた もう迷わない！ 色別カテゴリ表示で新たな診療材料管理

～看護部と物品管理センターの協働～

国民健康保険 小松市民病院

施設概要

1

国民健康保険 小松市民病院

共に歩む



所在地	石川県小松市
病床数	340床
職員数	573名（2022年8月31日現在）
看護職員数	307名
入院基本料	入院基本料1(2022年8月31日現在)

COVID19の拡大による**病棟の再編成・職員の配置転換**により、**病棟間でのスタッフ移動が増加**

診療材料棚の表示がわかりづらく、応援先の看護師に尋ねるなど、材料を探すのに時間がかかっており、**非効率であった**



ラベル表記が一般名称や商品名であり、物品によって看護師には分かりにくい…



表示が白色のみで、分かりにくい



どこに何があるのか分からず、引き出しを何ヶ所も開けて探さないと見つけることができない

▼改善前の診療材料棚



病棟の診療材料の表示・配置を標準化し

診療材料を探す時間を短縮する



1 | 院内の診療材料配置場所を把握・可視化する

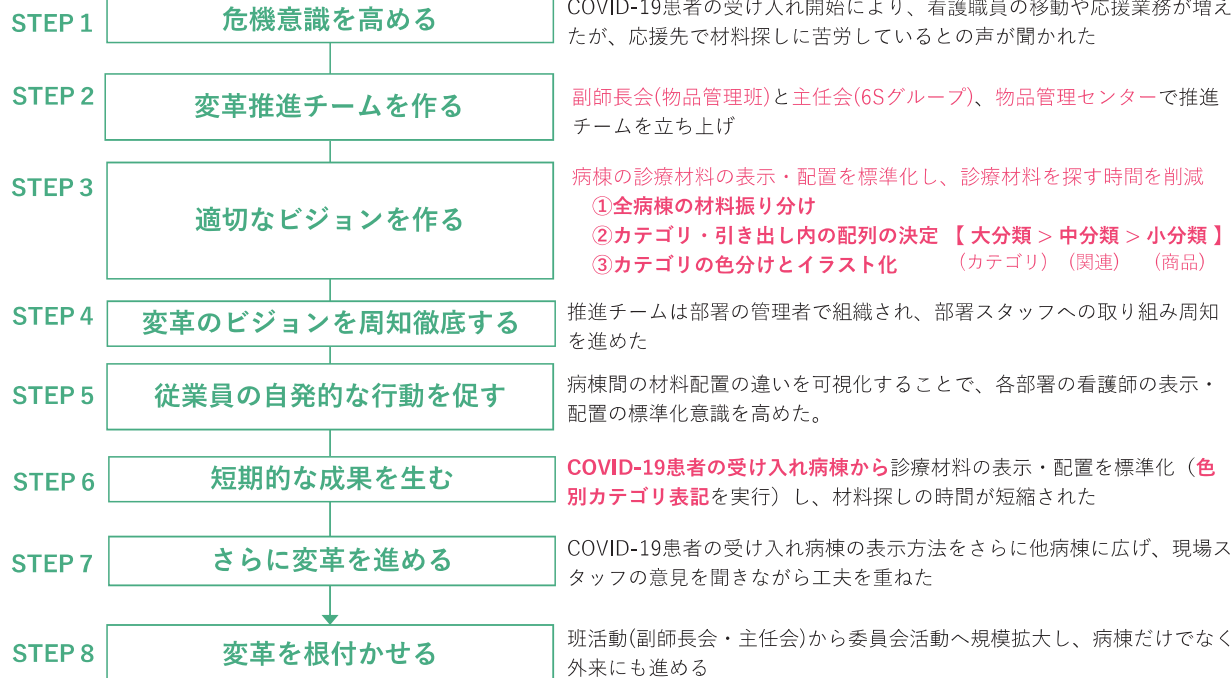
2 | 見やすい・わかりやすい表記を作成する

1 診療材料の表示・配置の標準化

○「**コッターの変革理論**」を応用し、8段階に分けて取り組みを実施

*参考文献：倉岡有美子(2018)「看護現場を変える コッターの企業変革の看護への応用」医学書院

2020年3月



取り組み内容

1 全病棟の材料振り分け

病棟ごとに同じ診療材料でもミキシング材料室/処置材料室の配置が異なっていた

物品管理センターが

○2部屋の材料のバラつき状況を色分けし、可視化

看護師が

○材料を配置する場所の振り分けを決定するための**基準**を設置

振り分け基準例

血液に関する検体材料 → ミキシング材料室
血液以外の検体材料(便・痰) → 処置材料室
etc...

▼振り分け前 ■ミキシング材料室 ■処置材料室

材料CD	材料名	規格	カテゴリ	本館3病棟	本館5病棟	本館6病棟	本館7病棟	本館8病棟
XXXXX	Gセンサー 30枚入(50箱)★	小型血糖測定器用電	血糖測定					B02
XXXXX	ペンニードル 30本入★	32G×4mm 14本×3	血糖測定			B02		A09
XXXXX	ディテールフィットチップ 30G/0.8mm/ピッチ 30本入	30G/0.8mm/ピッチ 30	血糖測定	A10	A07	B02	A09	B02
XXXXX	ディテールフィットチップ(新タイプ)★	血糖測定チップ/30	血糖測定	A10	A07	B02	A09	B02

◀血糖測定関連でも部署によりおいてある部屋が違う

▼振り分け後

材料CD	材料名	規格	カテゴリ	配置場所	本館3病棟	本館5病棟	本館6病棟	本館7病棟	本館8病棟
XXXXX	Gセンサー 30枚入(50箱)★	小型血糖測定器用電	血糖測定	ミキシング					A09
XXXXX	ペンニードル 30本入★	32G×4mm 14本×3	血糖測定	ミキシング					A09
XXXXX	ディテールフィットチップ 30G/0.8mm/ピッチ 30本入	30G/0.8mm/ピッチ 30	血糖測定	ミキシング	A09	A06	A07	A09	A09
XXXXX	ディテールフィットチップ(新タイプ)★	血糖測定チップ/30	血糖測定	ミキシング	A09	A06	A07	A09	A09

▲配置場所を決定し、全部署統一した

2 カテゴリ・引き出し内の配列の決定

材料を分析し

○ 大分類(カテゴリ) > 中分類(関連) > 小分類(商品)を定める

▼取り組み前

棚番	材料名	規格	大分類
B01	動脈血サフー(PICO針7.5) 22G×32mm J956-D	22G×32mm	検査・採血用器材
B01	動脈血サフー(safePICO)針無 1.5mL 956-610(針無 1.5mL)	針無 1.5mL	検査・採血用器材
B01	カテーテル 22G×70mm NN-2270C(100本)	22G×70mm	注射・輸液
B01	ディスポ注射器 30mL用・リッド・緑色 (25本)	30mL用・リッド・緑色	注射・輸液
B01	スポンジP No120P 40×120mm(11.5×7.5×9mm)	40×120mm(11.5×7.5×9mm)	被覆材
B02	フィルトレーション・リット 30G/30本入 (8箱)★	30G/30本入	検査・採血用器材
B02	ディスポ・ファイナリティ・ディスポ 30G/0.8mm/7.5mm 30本	30G/0.8mm/7.5mm 30本入	検査・採血用器材
B02	ディスポ・ファイナリティ・ディスポ (新タイプ)★	血糖測定チップ/30個入	検査・採血用器材
B02	ディスポ・ファイナリティ・ディスポ専用)★	採血穿刺針/30本入	検査・採血用器材
B02	カテーテル・リット 30枚入 23196(12箱)★	30枚入	検査・採血用器材
B03	スポンジ・心電図用電極 40mm/リット・ゲル/50個	40mm/リット・ゲル/50個	検査・採血用器材
B03	ゲル・心電図用電極 25×45mm/1000mm 6個/袋	25×45mm/1000mm 6個/袋	検査・採血用器材
B03	ゲル・心電図用電極 25×45mm/1000mm 4個/袋	25×45mm/1000mm 4個/袋	検査・採血用器材

「検査・採血」カテゴリの材料が3段の引き出しにバラついて
いる【棚番：B01 / B02/B03】

「注射・輸液」「被覆材」といったカテゴリの材料が同じ引き出しに配置されている

▼取り組み後

棚番	材料名	大分類	中分類	小分類(デブラ)
B01	BBLカルチャースワブEZ(100本)	検査・採血用器材	便・痰(尿)検査	培養スワブ
B01	S採便容器TP-A 1本入 G-PZ31(100袋)★	検査・採血用器材	便・痰(尿)検査	便潜血容器(便培養容器)
B02	エー・エー・エー(モニター用記録紙) FQW50-2-100(10冊)	診断・造影用器材	心電計	心電図記録用紙
B02	エー・エー・エー(心電計記録紙) FQW210-10-295(5冊)	診断・造影用器材	心電計	心電図記録用紙
B02	ディスポ・ファイナリティ・ディスポ 成人用(0.8mm) TL-271 T(24本)	診断・造影用器材	測定検査	SPO2プローブ
B03	ニトロソ・S 20×23mm 25枚/袋 21-135(40袋)	被覆材	血糖	絆創膏(小)
B03	カプレステープ 19mm×10m/白色(12巻)	被覆材	テープ	カプレステープ

大分類(カテゴリ)ごとに棚番が統一されている

2 カテゴリ・引き出し内の配列の決定

ミキシング室 引き出し内 配列

血液検査	採血スピッツ、分注ホルダー、翼状針 *採血関連の検査用品
尿検査	検尿コップ、検尿用スピッツ
針	ディスポ針、留置針、ポート針、エアー針
注射器	ディスポ注射器、インスリン専用注射器
一般用 自然落下	輸液ライン (自然、ポンプ)
接続	三方活栓、保護栓、延長チューブ
輸血用	特殊輸液ライン (輸血、ケモ用、小児用、造影剤用)
血糖	血糖測定チップ、血糖測定針、看護師用インスリン針

上段

数や種類が多い小物

下段

大物で
取り出しやすいもの

処置室 引き出し内 配列

検査	痰容器、培養スワブ、採便容器 *採血関連以外の検査用品
テープ	サージカルテープ、ドレッシング剤、絆創膏
測定 器材	電極、SPO2プローブ、心電計記録紙
呼吸器	酸素マスク、酸素延長チューブ、吸引カテーテル、気管カニューレ、人工鼻
経腸	栄養バッグ、栄養チューブ、栄養の付属品、フィーディングチューブ、ストマックチューブ
排尿	ネラトン、ウロバッグ、留置カテーテルセット、間欠導尿カテーテル
排泄	排泄カップ、胆汁ドレナージバッグ

*ラベル表示は看護師にとって分かりやすいものにした

3 | カテゴリの色分け・イラスト化

○ 大分類(カテゴリ)で色別化

○ 材料のイラストを挿入した表示カードを作成



▼運用の様子



大分類	区分
中分類	・ 院内で、いくつもの種類（メーカー違い、用途別など）があり通称で明記 ・ カードには、関連と記入
小分類	・ 院内で1種類のみ、商品名（通称で表記）（サイズ、太さ、長さなどの規格は、種類としない） ・ 専門性のある材料で、使用頻度が高い

成果・効果

1 | 業務量の削減・減少

○ 診療材料を探す時間の削減

検尿コップを探す時間	取り組み前	取り組み後
自部署看護師（7名）	17秒	3秒
他部署看護師（5名）	48秒	5秒

自部署看護師は14秒の短縮
他部署看護師は43秒の短縮

○ 中心静脈カテーテル(CV挿入)の準備時間の短縮

cv挿入の準備	取り組み前	取り組み後
自部署看護師	7分～10分	3分～5分

自部署看護師は2～7分の短縮

2 | 費用の削減

○ 診療材料の定数を見直し

診療材料を適正に配置できるようになり、適正請求が可能となった

各病棟の物品購入費用が削減

採用されなくなった血糖測定器の付属品が定数配置されていた部署も…

例

- シリンジ数 80本/週 → 60本/週
- プラスチック針 150本/週 → 100本/週

3 | 看護職の身体的・精神的負担の軽減

○診療材料を探す → 他のスタッフに聞く手間/ストレスの削減

- ▶ 新人看護師・部署異動してきた看護師にも分かりやすくなった
- ▶ イラスト表記により、言葉は話せるが、**文字の読めない他国の看護補助者の文字の壁をなくす**ことができた
- ▶ 材料を準備する導線の無駄がなくなった



補充スタッフ間の指導も簡単に！



日本語が読めない外国人スタッフでも容易に材料が探せるようになった

4 | 感染予防

○引き出しに触れる回数が激減した

- ▶ 以前は引き出しを何か所も開けて材料を探していた

5 | チーム連携の向上

○看護部と物品管理センターが協働し、役割分担が進んだ

看護部	物品管理センター
・ 物品管理センターから提案されたデータを業務の導線を考慮し検討、病棟間の違いを調整 ・ 診療材料を分類、色別カテゴリを決定 ・ 意識改善すべく、看護師スタッフへ始動	・ 材料の種類/定数/払出履歴をデータ化し、適正化を提案 ・ 診療材料の分担/色別カテゴリを提案 ・ 表記カードの作成

6 | 診療材料の整理整頓

○棚に収まりきらなかった材料が全て収まった

定数見直し→空き場所が確保できたことで

○中心静脈カテーテル挿入の処置材料を1つの棚でセット化



例

○中心静脈カテーテル挿入セット

- ・ 滅菌手袋
- ・ 術衣
- ・ オイフ(覆布)
- ・ ガーゼ
- ・ 消毒綿棒
- ・ 縫合セット

◀ 以前は引き出しを7～8段開けて集めていたが、**3段に収納することができた**

1 | 色別カテゴリ表記のイラスト統一化

○より見やすく・わかりやすく

2 | 物品の定数管理にバーコード管理を導入

○管理時間の削減

導入のポイント

1 | 意識改革・目的/目標の共有

① チームを組成し、危機意識を高める

部署の管理者で取り組み推進チームを組織し、部署スタッフへの取り組み周知を進めて意識改革を図る

② 適切なビジョンを示して周知徹底し、自発性の醸成と短期的な成果を生み出す

異動スタッフの多いCOVID-19受け入れ病棟から診療材料の表示・配置を標準化し、材料探しの時間を短縮
変化に戸惑う現場から辛口の意見も出るが、試行錯誤を重ねながら、病棟間の材料配置の違いを可視化する
ことで、各部署の看護師の表示・配置の標準化意識の醸成

③ 変革の規模を拡大させ、根付かせる

班活動(副師長会・主任会)から委員会活動へ規模を拡大させ、病棟だけでなく外来にも変革を押し進める



年休取得促進のための計画助勤

地方独立行政法人 東京都立病院機構
東京都立多摩北部医療センター

東京都東村山市
337床／職員数 442名（うち看護職員数365名）



課題・背景

- 働き方改革という流れ
 - 超過勤務や年次有給休暇取得日数の少なさが目立つ
- 部署間の年次有給休暇の平均取得日数の格差
 - 看護師の経験年数や働き方の多様化、診療科の特徴などが影響し、平均で7～15日の格差

「年5日の年次有給休暇の確実な取得」の義務化
※2019年4月施行

都立多摩北部医療センターはこれを達成していたものの、
看護職員の平均取得日数は11日と少なかった

目的・目標

看護職員が
「働き続けることができる職場」を整備する

- ・看護部全体の年次有給休暇取得を平均17日以上にする
- ・部署間の年次有給休暇取得格差の是正
- ・看護師間の連携の強化

取り組み内容

① アニバーサリー休暇の導入（2019年3月より）

導入によって、職員に「5日間は自分で年次有給休暇を取得する」という意識改革をめざす

- ▶1年目 | 目標年次有給休暇平均取得日数15日を達成
- ▶翌年度 | 目標を17日（年間付与日数20日の85%）に引き上げた

年初からの取得が進むなど、看護管理者・看護職員の意識変化が見られた

しかし 部署による平均取得日数の差は埋まらず：9.1日

② 「計画助勤」体制の導入（2021年3月より）

○ 導入の目的

- 有給休暇取得日数の部署によるばらつきを均てん化する
- ▶職員を計画的に日単位で他部署に勤務（助勤）させる

○ 導入と実施の流れ

STEP 1 グループ編成

- 12部署を派遣部署（8部署）と受入部署（4部署）に分け、派遣部署3部署と受入部署1部署でグループを編成

STEP 2 計画助勤 希望・可能表の作成

STEP 3 計画助勤者に基準を設定

- 計画助勤者には一定の基準を設けた

STEP 4 計画助勤希望・可能表を基に看護部長が計画助勤スケジュールを作成



計画助勤スケジュールを作成

- グループ内調整が難しい時は他グループと交渉し、計画助勤者を確保
- 看護部長は計画助勤のスケジュールを踏まえて各部署の勤務計画を決定する

STEP 5 受入部署の計画助勤者受け入れ環境づくり

- 計画助勤者は、受入部署でその部署の中堅看護師とペアで活動
- ▶助勤者が慣れない他部署で円滑に業務にあたるように配慮
- 計画助勤者受け入れは部署間連携強化の機会
- ▶計画助勤者の経験値が活かせる患者を担当するよう調整

STEP 6 年次有給休暇取得促進のための提案

- ポスターを設置し、看護師に意識改革を促すとともに患者に理解を求めた

○ 計画助勤の実績（2021年度）

計画助勤実施回数 延べ68回

計画助勤者 8部署から 40名を派遣

40名のペア看護師と延べ63回業務を実施

22名のリーダー看護師が延べ52回リーダー業務を実施

- ▶計画助勤者は受入部署のメンバーとペアを組んで活動するため、受入部署は他部署の人とペアを組める要員を選出した
- ▶受入部署のリーダー看護師はペア看護師と一緒に計画助勤者をフォローした

成果・効果

① 有給休暇取得状況の改善

平均15.8日(2020年度)▶平均17.6日(2021年度)

取得日数最小値の被支援部署も 10.9日(2020年度)▶13.6日(2021年度)

② 看護職の身体的・精神的負担の軽減

③ チーム連携向上

- 計画助勤による対応力の向上
- ▶さまざまな病棟での経験を積むことによってコロナ禍の度重なる病棟再編にも対応

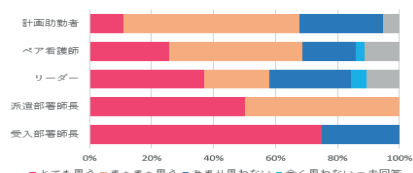
④ 看護職の満足度向上

- 多摩北部医療センターで働くことにやりがいを感じる看護職員が増加（右グラフ参照）

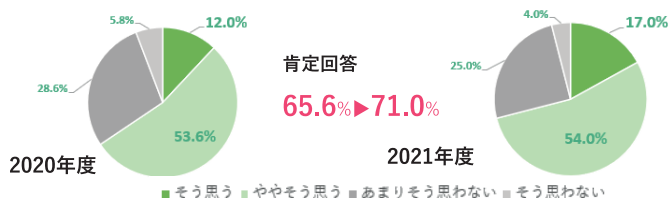
▼看護職員へのアンケート

Q. 協力したことで年休取得が促進できたと感じたか

▶平均73.7%の肯定回答



Q. 当院で働くことにやりがいを感じているか



肯定回答
65.6%▶71.0%

令和4年度厚生労働省補助金事業 看護業務効率化先進事例収集・周知事業
看護業務の効率化 先進事例アワード 2022



年休取得促進のための計画助勤

地方独立行政法人 東京都立病院機構
東京都立多摩北部医療センター

施設概要

1

地方独立行政法人 東京都立病院機構 東京都立多摩北部医療センター



患者中心の良質であたたかい医療

所在地	東京都東村山市
病床数	337 床
職員数	442 名
看護職員数	365 名
主たる入院基本料	急性期一般基本料1

※2022年4月1日現在

1 働き方改革という流れ

○都立病院は毎年20日間年次有給休暇が付与される

しかし…

年次有給休暇の取得日数は低い

「年5日の年次有給休暇の確実な取得」の義務化
※2019年4月施行

多摩北部医療センターは達成していたものの、
看護職員の平均取得日数は11日と少なかった。

2 部署間の年次有給休暇平均取得日数の格差

○部署により平均で7~15日の格差

▶看護師の経験年数や働き方の多様化、診療科の特徴などが影響

▶ **不公平感や労働意欲の低下を招く可能性**

看護職員が「働き続けることができる職場」を整備する



- 1 看護部全体の年次有給休暇取得を平均17日以上に
- 2 部署間の年次有給休暇取得格差の是正
- 3 看護師間の連携の強化

取り組み内容 上記の目標達成のため、以下の取り組みを実施

- ・アニバーサリー休暇の導入（2019年3月）
- ・「計画助勤」体制の導入（2021年9月）

1 | アニバーサリー休暇の導入

[illegible]

○アニバーサリー休暇

アニバーサリー休暇の休み希望は他の職員の通常の休み希望より優先される

▶アニバーサリー休暇に対する付加価値を示すことで「5日間は自分の意思で取得する」という職員の年次有給休暇取得に対する意識改革を目指す

○アニバーサリー休暇導入による変化

2020年度 | 目標の年次有給休暇平均取得日数15日を達成

▶職員からは「休みをとりやすい」と好評で、年初から取得が進むなど、看護管理者・職員の意識変化が見られた

▶ 2021年度 | 目標を**17日**(年間付与日数20日の**85%**)に引き上げた

しかし

年次有給休暇取得日数は改善されたが、参加率は54.1～66.1%

「アニバーサリー(記念日)ではないから」と希望せず、制度の意図が伝わらない

▶ 部署による平均取得日数の差は埋まらず：9.1日

取り組み内容

2 計画助勤の導入

○導入の目的

年次有給休暇取得日数の部署によるばらつきを均てん化する

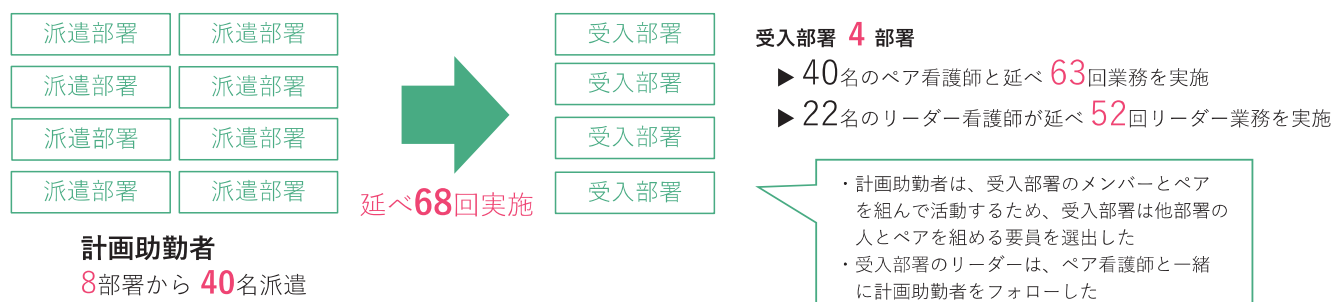
▶職員を計画的に日単位で他部署に勤務（助勤）できるようにする



計画助勤を受けた部署では、助勤当日の日勤帯勤務者数を補充できる

▶その日の有給休暇取得を職員に勧めることで、年次有給休暇の取得が進むと見込んだ

○計画助勤の実績【2021年度】



2 | 計画助勤の導入

STEP 5 受入部署の計画助勤者受け入れ環境づくり

○計画助勤者は、受入部署でその部署の中堅看護師とペアで業務を行う

- ▶ 助勤者が慣れない他部署で円滑に業務にあたれるように配慮
- ▶ 受入部署は適切な人材をペアになるよう選定

○計画助勤者受け入れは**部署間連携強化の機会**

- ・計画助勤者の経験値が活かせる患者を担当するよう調整
- ・受入部署の診療料や業務について学習できるよう必要な情報を提供
- ・受入部署のスタッフとの打合わせを設定
- ・感謝の気持ちを伝える

STEP 6 年次有給休暇取得促進のための提案

各部署が1～7月の年次有給休暇取得促進に向け取り組んだ内容とその結果・要因について調査し、取得が進んでいる部署の取り組みをWLBメンバーが分析してのち、後半に向けた戦略を全体に提案した
ポスターを設置し、看護師と患者の双方に意識改革を呼びかけた

職員向けポスター▶
「ちゃんと休む」を強調



患者向けポスター▶
「しっかり働く」を強調



成果・効果

1 | 年次有給休暇取得状況の改善

平均**15.8**日(2020年度) ▶ 平均**17.6**日(2021年度)

取得日数最小値だった受入部署も

平均**10.9**日(2020年度) ▶ 平均**13.6**日(2021年度)

Q. 協力したことで年次有給休暇取得が促進できたと感じたか

回答数103人中「とても思う」「まあまあ思う」の割合

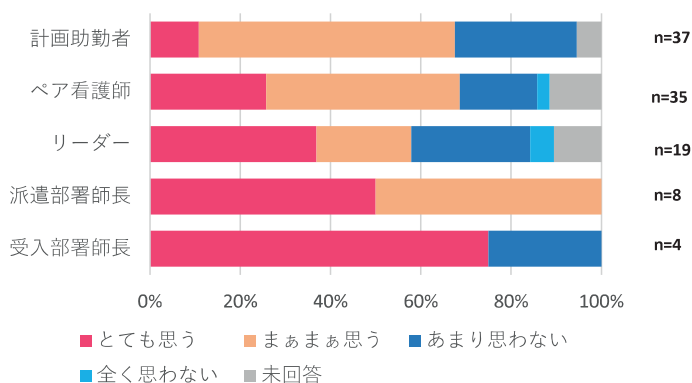
平均**73.7%**の肯定回答



年次有給休暇取得日数が増えた



助勤者が慣れている人だったので受け入れた部署での業務がスムーズだった



2 | 看護師の身体的・精神的負担の軽減

Q. 計画助勤者の受入れ・派遣を通じてどのような事を感じたか（最も回答が多かった項目）

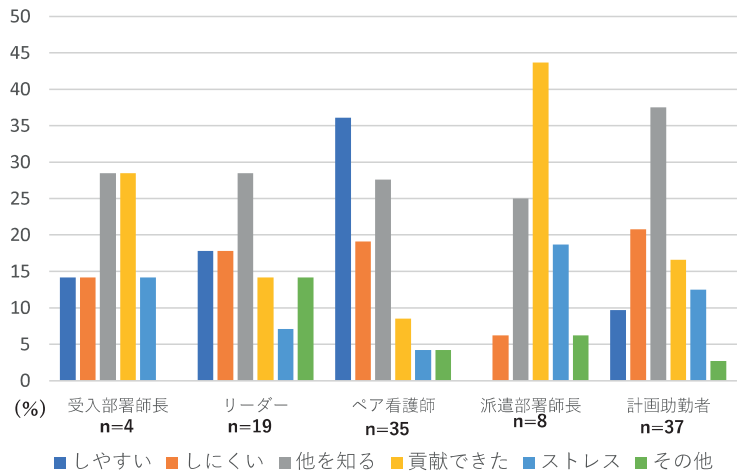
受入部署師長 「他病棟を知ることができた」
「貢献できた」
受入部署リーダー 「他病棟を知ることができた」
受入部署ペア 「仕事がしやすかった」
派遣部署師長 「貢献できた」
計画助勤者 「他病棟を知ることができた」

▶ 肯定回答が全対象において最も多い

○理由として

「勤務経験者であったため安心」（受入部署師長）

「他病棟を知る事で自分にプラスになる」（計画助勤者）



3 | チーム連携向上

○看護範囲の拡大

コロナ患者の増減により、専用病棟の数に変化

+

コロナ専用病棟は固定していないため、概ね半年を目処に別の病棟へ替わる体制

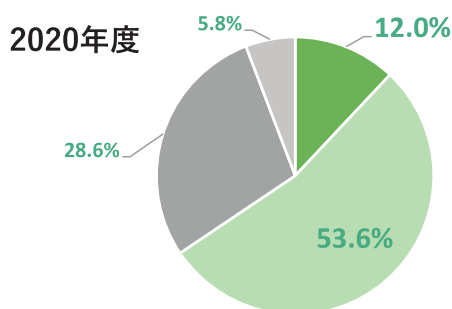
病棟看護師は一般患者からコロナ患者までを広範囲に看護することとなった

○計画助勤による対応力の向上

様々な診療科の患者を看護する経験を積むことで
度重なる病棟再編成に順応することができるようになった

4 | 看護師の満足度向上

Q. 多摩北部医療センターで働くことにやりがいを感じているか



■ そう思う ■ ややそう思う ■ あまりそう思わない ■ そう思わない

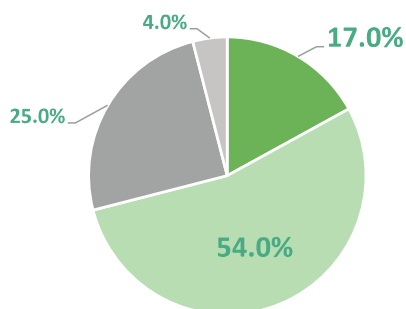
肯定回答 **65.6%** (2020年度)

理由として



「提供する医療の内容、患者ニーズ対応、患者・家族との関わり、
業務改善への取組等にやりがいを感じる」等

2021年度



■ そう思う ■ ややそう思う ■ あまりそう思わない ■ そう思わない

肯定回答 **71.0%** (2021年度)

今後の展望

1 | 助勤制度の進化をめざす

「計画助勤」に加え突発的なニーズに応える助勤制度も

2 | WLBの更なる推進

看護師長全体の意思統一、職員の意識づけ

導入のポイント

1 | 助勤へ行く看護師への意識付け

○「あなただから頼む」という専門性の発揮と責任感への期待を伝える

2 | スタッフへの目的の共有

○「何のためにこの取り組みを行っているか」目的の理解を深め共通認識をもつ



訪問看護における働き方改革 ICT活用による直行・直帰制の実現

株式会社らふえる らふえる訪問看護ステーション

茨城県土浦市

職員数 13 名（うち看護職員数9名）



課題・背景

小規模事務所では**経営の安定**が最優先事項

職場環境を整備し雇用の促進と定着を図る

+

顧客確保のためのサービスの質の担保

が重要

○設立当初から直行・直帰制を実現し、設立5年後には常勤換算約10名を超える

○職員間のコミュニケーション希薄化・変更が多い訪問予定の伝達困難・報告/連絡/相談の混乱などの課題に直面

目的・目標

目的

職員がワークライフバランスを維持しながら、互いに連携して、質の高い看護実施ができる訪問看護ステーションを実現する

目標

直行・直帰制で出社しなくても訪問看護に必要な業務を遂行できる

取り組み内容

① 所内のICT環境の整備

○職員全員に業務用スマートフォン、タブレットを配布

○セキュリティ対策の強化

- ・セキュリティ対策を専門業者に委託
- ・所内インターネット回線にファイアウォールを設置
- ・所外業務用機器のセキュリティソフトを管理者が一括管理

② 情報共有、コミュニケーションの円滑化

1) チームナッシング制の導入

- ・直行・直帰制による孤立化を防止することを目的とし、3～4人でチームを構成し、1チーム30名前後の利用者を担当

2) SNSサービスの利用

- ・チーム、職場全体の情報共有、コミュニケーションの手段として、SNSサービスを目的別に活用

③ 独自業務アプリの開発

1) 業務管理アプリの機能

▼設計コンセプト

看護過程の各段階における情報やアセスメントを
看護師の思考に沿って入力できるように設計

○利用者の基本情報管理

○勤怠管理等の機能

勤務実働時間や移動距離計算などを自動計算

○データ保管機能

訪問看護運営及び労務管理上必要な書類のペーパーレス化

○訪問スケジュール管理

- ・1ヶ月分の訪問スケジュール自動作成機能

▶利用者側の条件（契約日時、居住地域、介護度、ケアの難易度等）

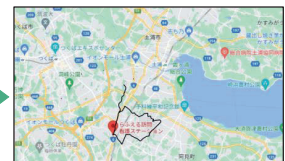
看護師側の条件（勤務日、経験、担当不可要件等）

などをあらかじめ入力し、**マッチング機能で最適化**

- ・職員の予定を見える可

▶訪問以外の作業も含め、職員の動向を色別に見える可

▼職員のホーム画面を開くと日々のスケジュールが表示され、「地図」のボタンから経路の確認ができる



2) 業務管理の機能 | 看護過程展開ツール

▼設計コンセプト

- ・職員が日々の業務の流れの中で、モバイル機器を用いて使用できる
- ・クラウド運用により、いつでも、だれでも、どこでも、簡単にモバイル操作ができる
- ・利用者及び職員の**基本情報が一括管理**できる

○看護過程アシスト機能

アセスメントに必要な情報を網羅・系統的に入力

▶看護診断に対する看護計画を実践過程の段階に沿って入力すると、その後の展開にリンクされる

○アウトプット自動化による業務の効率化

入力されたデータのリンクにより

各種書類・帳簿類を自動作成する機能

○その他のサポート機能

処方リスト、手順書、緊急電話記録等の

入力箇所設定により情報共有をサポート

成果・効果

① 業務量と業務時間の削減・短縮、費用の削減

○一つの業務に要する時間の短縮

訪問スケジュール作成： 数日 ▶ 2～3時間/月

報告書等の作成/1書類： 平均 60分程度 ▶ 40分程度

○時間外業務時間の削減

月平均の時間外業務時間： 157.8時間(2017年度) ▶ 55.7時間(2021年度)

常勤換算平均： 10.1人(2017年度) ▶ 9.4人(2021年度)

年間の時間外業務手当総支払額： 2,699,428円(2017年度) ▶ 827,636円(2021年度)

② 看護職の身体的・精神的負担の軽減

○ワークライフバランスの実現により職員はゆとりをもって仕事を取り組めるようになった

○研修参加意欲も増加

③ コロナ禍における円滑な直行・直帰

○感染拡大以前から実施していたため、コロナ拡大時も円滑に実施できた

○職員の感染（濃厚接触を含め）は 0 人

④ 指示系統の変化

・上司→部下という単一方向から、フラットで誰でも情報を得て意見を述べるができる関係性へ

職員個々の**自立性・自主性**を高め

プロフェッショナルとしての**自信**に繋がる

⑤ 職員アンケート

看護職の人員配置が最適化できた

今までよりさらに患者・利用者の満足度が向上した

チーム連携が向上した

看護業務の効率化 先進事例アワード 2022



訪問看護における働き方改革

ICT活用による直行・直帰制の実現

株式会社らふえる
らふえる訪問看護ステーション

施設概要

1

株式会社らふえる らふえる訪問看護ステーション

施設理念

Laugh & Wellness
Laugh & Wellbeing
Laugh & Well



所在地

茨城県土浦市

職員数

15名

看護職員数

10名(常勤5名・非常勤5名)

※2022年11月1日現在

小規模事務所では経営の安定が最優先課題

職場環境を整備し雇用の促進と定着を図る

+

顧客確保のためのサービスの質の担保 **が重要**

▶ 設立当初から直行・直帰制を実現し、設立5年後には常勤換算約**10**名を超える

▶ 以下の課題にも直面

- 職員間のコミュニケーション希薄化
- 変更が多い訪問予定の伝達困難
- 報告、連絡、相談の混乱
- 職員の勤務状況が見えない

▶ 課題解決のため、**ICT***の導入が必須

* ICT : Information and Communication Technology | 情報通信技術

目的・目標

目的

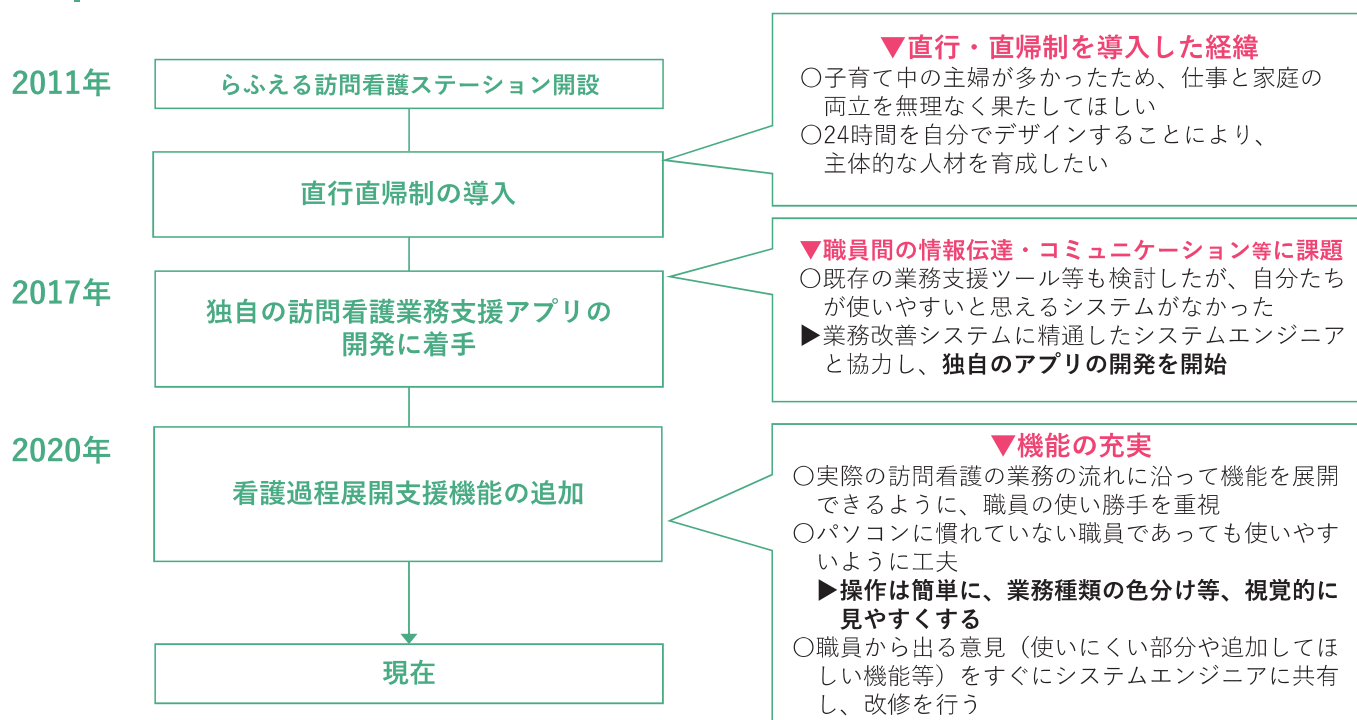
職員がライフワークバランスを維持しながら
互いに連携して質の高い看護実施ができる
訪問看護ステーションを実現する

目標

直行・直帰制で出社しなくても
訪問看護に必要な以下の業務を遂行できる

- ① 情報共有、指示伝達、意見交換が円滑に行われ、日々のケアの水準が保たれる
- ② 職員が互いの動向や作業状況を把握し、急変等の予定外の対応も迅速にできる
- ③ 報告書作成などのデスクワークを効率的に行い、訪問稼働率を上げる
- ④ 管理者が職員の職務状況を把握し、労働基準法に則った勤怠管理ができる
- ⑤ 直行・直帰制により雇用が促進され、職場ストレスによる離職者がいない
- ⑥ 効率化による職場環境改善が看護師の能力向上となり質の高い看護実践につながる

1 看護師の直行直帰制・支援アプリの開発



取り組み内容

1 所内のICT環境の整備

○職員全員に業務用スマートフォン、タブレットを配布

○セキュリティ対策の強化

- ・セキュリティ対策を専門業者に委託
- ・所内インターネット回線にファイアウォール*を設置
- ・所外業務用機器のセキュリティソフトを管理者が一括管理

*内部のネットワークに外部から侵入してくる不正アクセスや、内部ネットワークから外部への未許可通信から守るための「防火壁」

2 情報共有、コミュニケーションの円滑化

○チームナースング制の導入

- ・直行・直帰制による孤立化を防止することを目的とし、3～4人でチームを構成し、1チーム30名前後の利用者を担当
- ・ケア内容の検討、地域連携、職員間の業務調整などをチームのチーフがリーダーシップをとりながら協力できる体制とした

○SNSサービスの利用

- ・チーム、職場全体の情報共有、コミュニケーションの手段として、SNSサービスを目的別に活用
- ・ステーション内の情報共有だけでなく、主治医、ケアマネジャー、家族等も参加できるツールを活用し、地域連携を実現
- ・ハイブリット方式で全体ミーティング（月1回）の他に適宜チームミーティングを実施。目的意識をもって開催している

3 独自業務支援アプリの開発

▼設計コンセプト

- ・職員が日々の業務の流れの中で、モバイル機器を用いて使用できる
- ・クラウド運用により、いつでも、だれでも、どこでも、簡単にモバイル操作ができる
- ・利用者及び職員の基本情報が一括管理できる

業務支援アプリの機能

○利用者の基本情報管理

○勤怠管理等の機能

勤務実働時間や移動距離計算などを自動計算

○データ保管機能

訪問看護運営及び労務管理上必要な書類のペーパーレス化

3 独自業務支援アプリの開発

業務支援アプリの機能

○訪問スケジュール管理

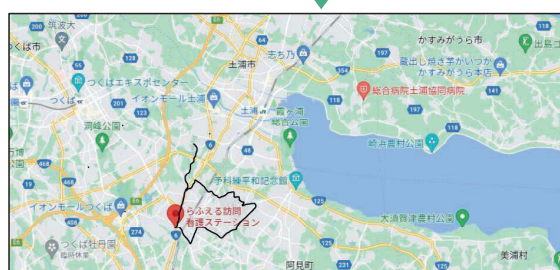
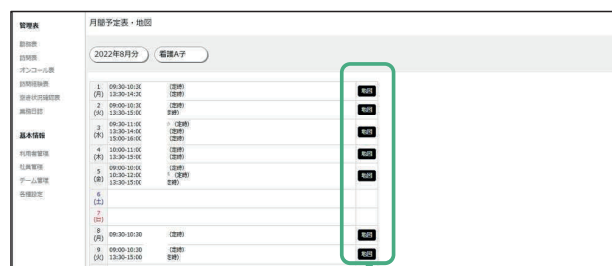
- ・1ヶ月分の訪問スケジュール自動作成機能
 - ▶利用者側の条件（契約日時、居住地域、介護度、ケアの難易度等）
 - 看護師側の条件（勤務日、経験、担当不可要件等）
 - などをあらかじめ入力し、**マッチング機能で最適化**

偏りのない訪問スケジュールの作成が可能
1か月先のシフトが作成できるため、先を見越した労務管理が可能

- ・職員の予定を見える可
 - ▶訪問以外の作業も含め、職員の動向を色別に見える可

予定外の事態にも迅速な対応が可能

▼職員のホーム画面を開くと日々のスケジュールが表示され、「地図」のボタンから経路の確認ができる



※イメージ図

3 独自業務支援アプリの開発

▼設計コンセプト

- ・看護過程の各段階における情報やアセスメントを看護師の思考に沿って入力できるように設計

業務支援アプリの機能 | 看護過程展開ツール

○看護過程アシスト機能

アセスメントに必要な情報を網羅・系統的に入力

- ▶看護診断に対する看護計画を実践過程の段階に沿って入力すると、その後の展開にリンクされる

○アウトプット自動化による業務の効率化

入力されたデータのリンクにより各種書類・帳簿類を自動作成する機能

【メリット】

- ・入力データに一貫性の欠如や矛盾があると、報告書等書類にも反映されるので修正箇所がすぐ見つけることができ、管理者やチーフからの指導も行きやすい
- ・「日々の訪問看護記録」には「看護・リハビリ過程展開」から観察項目や介入計画が反映され、誰が訪問しても観察やケアの漏れを回避できる。
- ・観察、実施したら✓のみで良いので、異常がない場合は、訪問中に記録が完成
- ・急な入院、入所があっても、迅速に訪問看護サマリーの作成ができる

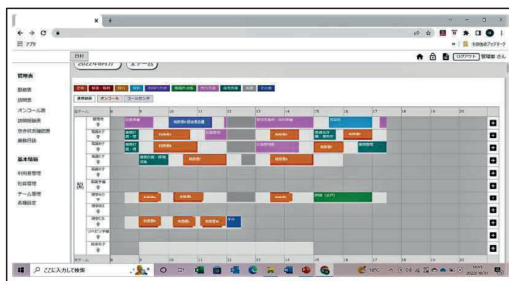
○その他のサポート機能

処方リスト、手順書、緊急電話記録等の入力箇所設定により情報共有をサポート

3 独自業務支援アプリの開発

業務支援アプリの機能 | アプリ画面

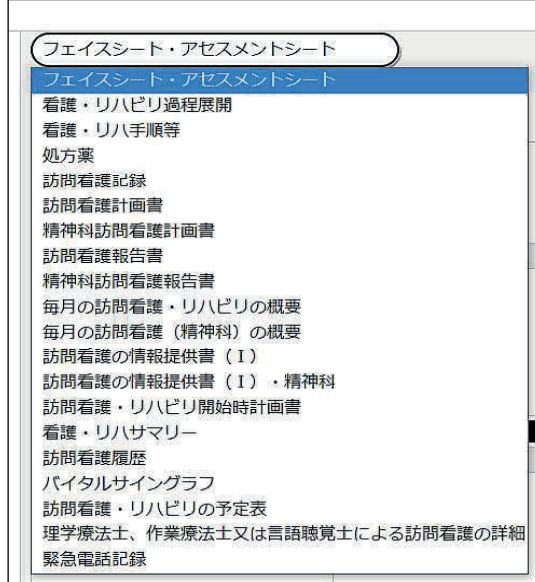
▼スケジュールのページ



▼フィジカルアセスメントのページ



▼作成可能な書類一覧



1 | 業務量と業務時間の削減・短縮、費用の削減

○一つの業務に要する時間の短縮

訪問スケジュール作成： 数日 ▶ 2~3時間/月

報告書等の作成／1書類： 平均60分程度 ▶ 40分程度

80名の利用者の訪問看護計画書と報告書を作成した場合
 $(60 - 40) \text{ 分} \times 2 \text{ 種類} \times 80 \text{ 人分} \times 12 \text{ ヶ月} = \text{年間} \mathbf{640} \text{ 時間の削減}$

○時間外業務時間の削減：職員の職務状況を把握した勤怠管理

月平均の時間外業務時間： 157.8時間(2017年度) ▶ 55.7時間(2021年度)

常勤換算平均： 10.1人(2017年度) ▶ 9.4人(2021年度)

年間の時間外業務手当総支払額： 2,699,428円(2017年度) ▶ 827,636円(2021年度)

年間 **1,871,792円** の削減

2 | 看護師の身体的・精神的負担の軽減

- ワーク・ライフ・バランスの実現により職員はゆとりをもって仕事に取り組めるようになった
- 看護師の能力向上、質の高い看護実践につながる研修参加意欲も増加

▶ 時間内制約による離職者が減った

3 | コロナ禍における円滑な直行・直帰

- 感染拡大以前から実施していたため、コロナ拡大時も円滑に実施できた

▶ 職員の感染（濃厚接触を含め）は **0人**

4 | 指示系統の変化

- 上司から部下へという単一方向から
フラットで誰でも情報を得て意見を述べることができる関係性へ

職員個々の自立性・自主性を高め

▶ プロフェッショナルとしての自信に繋がる

5 | 職員アンケートより抜粋

○今までよりさらに患者・利用者の満足度が向上した



直行・直帰制による時間のゆとりや記録類作成の効率化により、**看護過程を検討する時間が増え、またそれをチームで共有することにより、利用者の快適さと安楽を生み出すことに貢献した。**また、利用者個々に異なる願いは、多職種連携のためのコミュニケーションツールを用いて所内及び地域との緊密で迅速な連携を図ることで解決につながった。

○看護職の人員配置が最適化できた



スケジュール自動作成では、複雑な訪問条件をマッチング機能で最適化するため、**偏りのない訪問スケジュールが実現した。**

○チーム連携が向上した



ICTの導入により、職員個々の情報量が増え、事例検討会などで、自分が担当していない他チームの利用者に関する議論にすぐに参加できている。



管理者

アプリ開発にかかった経費は長期的に還元できると考えるが、それ以上に、**職員の自主性、自立心が大きく向上したこと、効率化して生み出された時間を地域連携等のために費やすことが出来たこと**に大きな成果を実感。

今後の展望

1 | ICT導入によるメリットを伝える

管理者の時間的余裕の創出によって日々の業務管理が容易になる

▶ 事業所内のルール作りに専念 / **地域の訪問看護全体の向上に向けた活動** etc… も可能になる

2 | 開発した訪問看護業務管理アプリの一般実装

小規模事業者同士がシステムをシェアして運営継続できるような仕組み作り

導入のポイント

1 | 直行直帰を導入する目的を明確にする

勤務時間の短縮につなげる / 訪問件数を増やし収益につなげる / ケアの質向上につなげる etc…

2 | ICTシステムの導入

コミュニケーションツールを積極的に導入する

3 | ICTシステムの管理者とのコミュニケーション

ICT化できる業務・できない業務を**看護師**が把握し、

ICTツールを最大限生かせるようなシステムを**看護師から**提案する

▶ **訪問看護業務にコミットしたシステムの構築が円滑に**



搬送ロボットを導入した看護師のカイゼン活動 ～トヨタ生産方式を基盤として～

トヨタ自動車株式会社トヨタ記念病院

愛知県豊田市
527床／職員数 1216 名（うち看護職員数699名）



背景・課題

①離職率の上昇

- 2016年ごろから上昇、2017年には**10%超**
- 2019年に**徹底的に無駄を排除**し、看護ケアの時間を確保する、**セル看護提供方式***を導入

看護師へのヒアリング
看護師の業務量調査

患者と向き合う時間が少ないジレンマ
煩雑な業務に追われ時間が確保できない
全業務のうち約4割しか患者と接していない

▶ **無駄な業務の削減**

②カイゼン活動

企業立病院として母体企業の創意工夫制度・QCサークル活動（小集団改善活動）
TPS等のカイゼン活動を恒常的に行ってきた

▶ **「トヨタらしさ」の創造によって
業務改善を図る**

③新病院設立に向けて

2017年より新病院設立に向けた検討が開始

セル看護提供方式*は株式会社麻生 飯塚病院の登録商標です

目的・目標

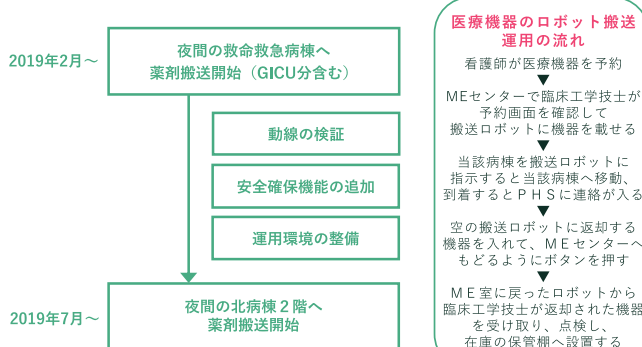
専門職である看護師の付加価値のある業務を最大化すること

- ▶ ①夜間の業務用エレベーターのない部署の搬送をロボットで行う
- ▶ ②東病棟5階をモデル病棟とし、医療機器*をMEセンターから借りて搬送する（*医療機器：フットポンプ、輸液ポンプ、シリンジポンプ）

取り組み内容

① 薬剤のロボット搬送

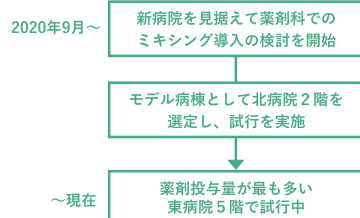
病院スタッフと開発職員の協働



③ 薬剤科によるミキシング導入

薬剤師、看護師、事務、搬送ロボット開発職員の協働

セル看護提供方式*は看護師の拠点をナースステーションから患者のいるベッドサイドへ移行したものであるにもかかわらず、薬剤のミキシングのたびに看護師はベッドサイドを離れることになっていた
これを削減し、看護師が患者と向き合える時間を拡充することを目指した



④ 院内のロボット搬送の運用

搬送ロボットの浸透

- ・休日の稼働
- ・イベント時の装飾
- ・「行ってきます」の音声案内
- ・ニックネーム

事故、セキュリティについて

現在まで搬送ロボットによる衝突、薬剤盗難事故等は発生していない。
盗難防止のため、看護師等使用者のセキュリティカードを認証しないと解錠できない仕組みになっている。



成果・効果

① 業務量の削減・減少

○夜間における薬剤のロボット搬送

エレベーターがない部署における**夜間の薬剤搬送時間の削減**

救命救命病棟、GICU： 10分/日 × 2部署 × 365日 = **7,300分/年**
北病棟1～3階： 7分/日 × 3部署 × 365日 = **7,665分/年**

○医療機器の病棟へのロボット搬送

東病棟5階（外科病棟）の医療機器を取りに行く時間： $10分 \times 稼働日5日（50分/週）$
= **2,600分/年の削減**

○薬剤科によるミキシング試行

1病棟 **7,300分/年の削減**

② 看護師の身体的・精神的負担の軽減

○夜間薬剤・医療機器のロボット搬送

○薬剤科によるミキシング

③ 患者・利用者の快適さと安楽さを生み出すことに貢献

搬送ロボットの導入＋カイゼン活動によって
看護師が患者に対しケアを施せる時間が増加

④ チーム連携の向上

- ・搬送ロボットプロジェクトを中心として多職種でTPSを基盤としたカイゼン活動を達成
- ・新病院を見据え、働き方改革やタスクシフト・タスクシェアリングを推進しながら患者に寄り添う看護の必要性を再認識

⑤ 看護師の満足度向上

看護師の離職率： 約 10.3%（2017年度）▶ 約 **5.3%**（2021年度）

看護業務の効率化 先進事例アワード 2022



搬送ロボットを導入した 看護師のカイゼン活動

-トヨタ生産方式を基盤として-

トヨタ自動車株式会社 トヨタ記念病院

施設概要

1

トヨタ記念病院(トヨタ自動車株式会社)



『笑顔』と『まごごろ』あふれる病院
~Smile & Heart~

所在地	愛知県豊田市
病床数	527 床
職員数	1216 名 ※2021年11月
看護職員数	699 名
入院基本料	一般病棟入院基本料 急性期一般入院基本料1

背景

1 離職率の上昇

○2016年ごろから上昇、2017年には**10%超**

○看護師が生き生きと働き続けることができる職場環境の検討がなされ、

2019年に**徹底的に無駄を排除し、看護ケアの時間を確保するセル看護方式®**を導入

セル看護提供方式®は株式会社麻生 飯塚病院の登録商標です

看護師へのヒアリング

○看護師は専門職であるにもかかわらず**患者と向き合う時間が少ないことのジレンマ**

○**複雑な業務に翻弄され時間が確保できない**という意見が多く聞かれた

看護師の業務量調査

調査員が24時間体制で2週間密着
看護師の作業動作を秒単位で測定

○看護師が全業務のうち**約4割しか患者と接していない**ことが分かった

○夜間に看護師が少ない中、**業務の合間に病棟を離れて薬剤を取りに行く**という作業が
業務用エレベーターを設置していない全ての病棟で行われていることが明らかになった

○**ビデオ撮影による調査を行った結果、ミキシングにおける無駄な業務も多数あった**

課題

**患者と向き合う時間を確保し、
専門職として付加価値の高い看護を提供するために
無駄な業務を削減すること**

背景

2 カイゼン活動

企業立病院として母体企業の創意くふう提案制度・QCサークル活動（小集団改善活動）・TPS*を用いたカイゼン活動を恒常的に行ってきた

TPS: Toyota Production System（トヨタ生産方式）

無駄の徹底的排除と、造り方の合理性を追い求め、
生産全般をその思想で貫き、システム化した生産方式

3 新病院設立に向けて

2017年より新病院設立に向けた検討が開始され、「トヨタらしい病院」、「多職種が協働できる仕組みづくり」等の意見交換がなされた。

▶ 「トヨタらしさ」の創造によって業務改善を図る

取り組み内容

- ・ロボットによる医療機器・薬剤の搬送
- ・薬剤科によるミキシングを導入

EX トヨタ生産方式とは

基本理念

7つのムダの削減

ジャストインタイム

「必要なモノを、必要な時に、必要な分だけ流れるように停滞なく」造り、運搬する

自動化

動きだけではなく、機械が判断まで行うレベルで人の働きを機械に置き換える

7つのムダ

加工のムダ/在庫のムダ/造りすぎのムダ/
手持ちのムダ/動作のムダ/
運搬のムダ/不良・手直しのムダ

EX トヨタ式カイゼン活動とは

目的

- 業務効率化により生産性を向上させる
- 製品やサービスの品質を向上させる
- 従業員のモチベーションを向上させる



専門職である看護師の付加価値のある業務を最大化すること

▼看護部と技術者でディスカッションを重ねる

- ・看護師が付加価値のある仕事をするためにはロボットはどう貢献できるか
- ・医療現場と製造現場の付加価値の違い

▶業務の無駄(単純な移動など)を省き、患者のベッドサイド業務を増やす

1

夜間の業務用エレベーターのない部署の搬送をロボットで行う

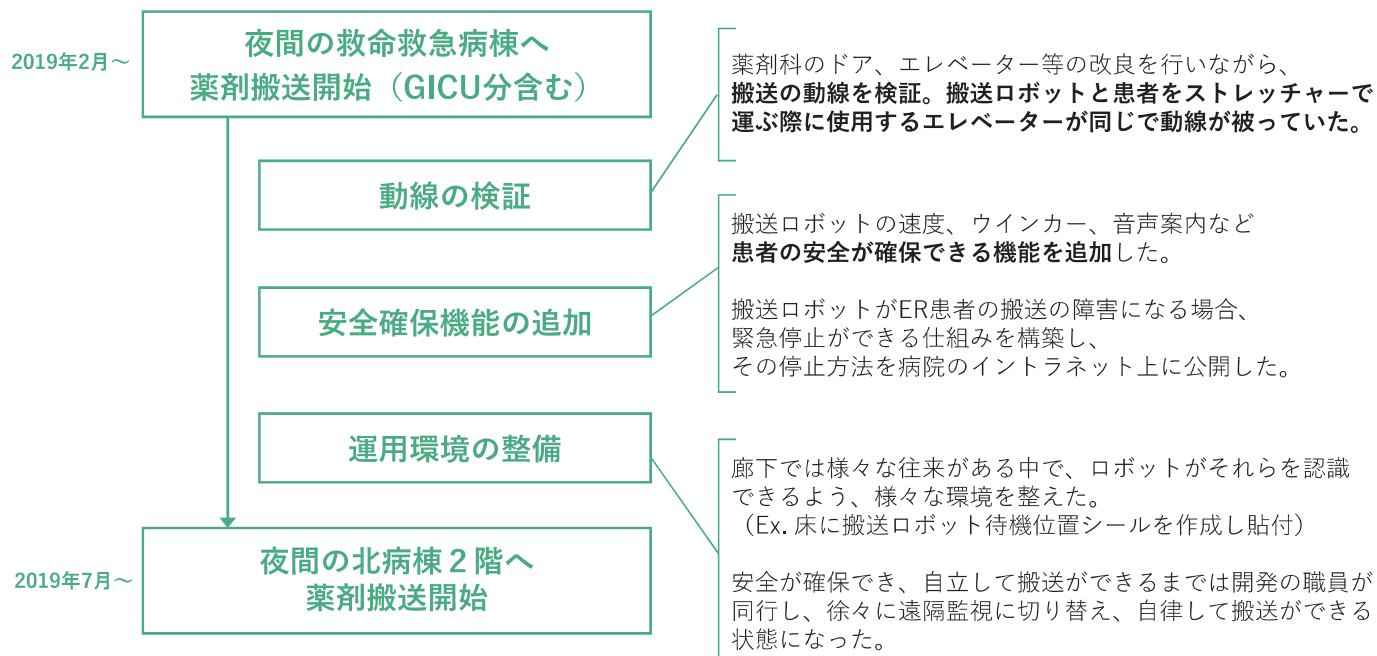
2

東病棟5階をモデル病棟とし
医療機器*をMEセンターから借りて搬送する

*医療機器：フットポンプ、輸液ポンプ、シリンジポンプ

1 薬剤のロボット搬送

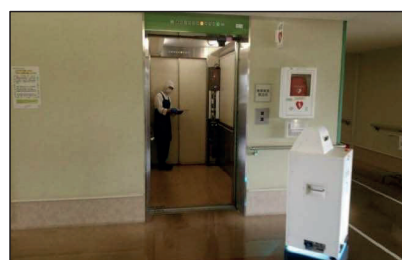
○病院スタッフと開発職員の協働



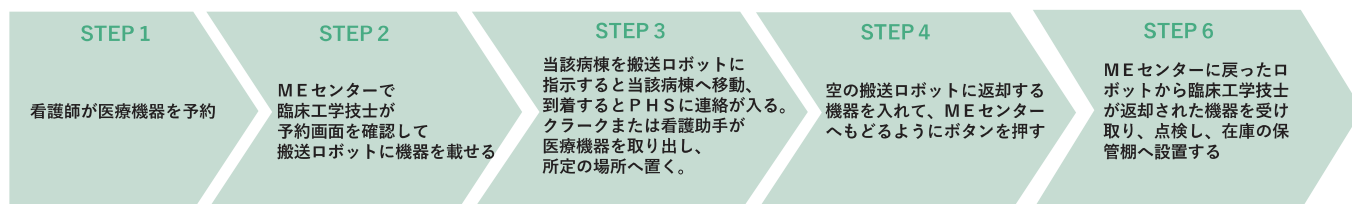
2 医療機器のロボット搬送

○臨床工学技士、東病棟5階の看護師と開発職員の協働

2019年11月より、薬剤の搬送に続いて、医療機器のロボット搬送を行なった
既存の医療機器の保管システムを用い、医療機器を予約できるようにした



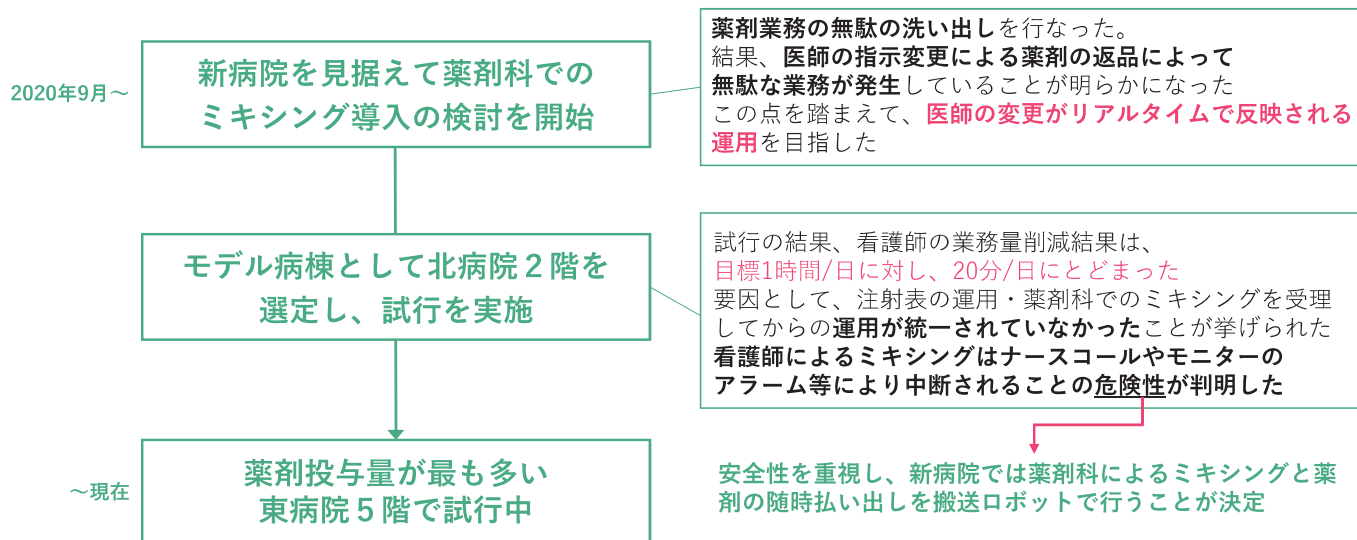
運用の流れ



3 薬剤科によるミキシング導入

○薬剤師、看護師、事務、搬送ロボット開発職員の協働

セル看護提供方式[®]は看護師の拠点をナースステーションから患者のいるベッドサイドへ移行したものであるにもかかわらず、**薬剤のミキシングのたびに看護師はベッドサイドを離れることになっていた**。これを削減し、**看護師が患者と向き合える時間を拡充することを目指した**



4 院内のロボット搬送の運用

○搬送ロボットの浸透

- ・開発当初は休止していた「休日の搬送ロボットの稼働」も再開した
- ・緊急停止後の再開も、現在は病院職員が行えるようになった（当初は開発職員が対応）
- ・職員や患者に愛着をもってもらよう施策
 - ▶ハロウィンやクリスマスの時期には装飾を施し、職員や患者に愛着をもってもらよう運行
 - ▶笑顔の目や鼻のシールを貼る
 - ▶出かける際の「行ってきます」という音声案内を追加
 - ▶病棟によってはロボットにニックネームをつけている

○事故、セキュリティーについて

現在まで**搬送ロボットによる衝突、薬剤盗難事故等は発生していない**

- ・盗難防止
 - ▶看護師等使用者のセキュリティーカードを認証しないと解錠できない仕組み

▼イベント時期の搬送ロボット



1 | 業務量の削減・減少

○夜間における薬剤のロボット搬送

エレベーターがない部署における **夜間の薬剤搬送時間の削減**

救急救命病棟・GICU：	10分/日 × 2部署 × 365日 = 7,300 分/年	} 合計 14,965 分/年 の削減
北病棟 1～3 階：	7分/日 × 3部署 × 365日 = 7,665 分/年	

○医療機器の病棟へのロボット搬送

東病棟 5 階（外科病棟）の **医療機器を取りに行く時間の削減**

10分 × 稼働日週5日 50分/週 = **2,600**分/年（1年52週で計算）

○薬剤科によるミキシング試行

北病棟2階の **看護師によるミキシング時間の削減**

20分/日 × 365日 = **7,300**分/年

2 | 看護職の身体的・精神的負担の軽減

○夜間薬剤・医療機器の搬送ロボット

当該部署の **看護師全員が搬送ロボットの導入をしてよかった**と回答

薬剤師・臨床工学技士は特に問題なく、**医療機器の返却のリードタイムが短縮できた**と回答

○薬剤科のミキシング

試行した当該病棟の看護師は、「**薬剤科のミキシング**」について**全員が非常に良い**と回答
 薬剤師にとっても専門性を発揮できる形のタスク・シフト/シェアであり、
看護師の専門性の発揮に貢献できると回答

薬剤科のミキシングによって、中断をはさみながら薬剤を投与していた看護師の**緊張感が緩和**された

3 | 患者・利用者の快適さと安楽さを生み出すことに貢献

○搬送ロボットの導入+カイゼン活動によって **看護師が患者に対しケアを施せる時間が増加**

4 | チーム連携の向上

○搬送ロボットプロジェクトを中心として多職種でTPSを基盤としたカイゼン活動を達成

○新病院を見据え、**働き方改革やタスク・シフト/シェアを推進しながら患者に寄り添う看護の必要性を再認識**した

看護師自身の付加価値への意識/認識が向上

▶ロボットの導入によって生み出された時間をどう使うか思考する

○患者と向き合う時間にあてる

患者の話を聞く/痛みを訴える患者の背中をさする/意思決定で迷う患者への支援 等

▶ベッドサイドで患者の状態を把握し、次の行動を起こせる環境

5 | 看護師の満足度向上

○看護師の離職率：約**10.3%**(2017年度) ▶ 約 **5.3%**(2021年度)

今後の展望

1 | 付加価値のある看護業務の拡大

外来部門の業務改善に着手

看護の本質を見極め、看護の質を向上させる

業務の分析をさらに進め、行程や業務の重複を見極め
バランスの良い仕事の方法を模索する

▶**1つの業務標準体系を構築する**

2 | 改善のマインドを全体に醸成する

職場間での意識の差異を埋め、**改善を定着し、推進し続ける**

導入のポイント

1 | 多職種を巻き込んだ意識の改革

アイデアを形にして試行し、**「カイゼンの良さ」を実感してもらう**

2 | ロボットを起点に働き方を変える

ロボットには何ができるか/自分には何ができるか、**役割を明確化する**

「ロボットを導入する」のみで終わらず、常に業務の改善を行う

看護業務の効率化 試行支援事業

試行実施報告

看護業務の効率化 試行支援事業

中小規模病院における入退院支援部門の新設 ～入院支援の活動からつなぐ看護へ～

社会医療法人社団 沼南会 沼隈病院

施設概要

1

社会医療法人 社団 沼南会 沼隈病院



<病院理念>

私たちは、急性期医療から
在宅医療までのトータルケアで、
地域の皆さまの健康と安全な生活を支援します。

所在地	広島県福山市沼隈町
病床数	118 床
職員数	249 名（2022年12月1日現在）
看護職員数	89 名（2022年12月1日現在）
入院基本料	急性期一般入院基本料 2 地域包括ケア入院医療管理料 1 療養病棟入院基本料 1

地域の医療・介護機関と連携し、
地域包括ケアシステムの核としての役割を構築する **ケアミックス病院**

試行した事例

試行した事例の詳細はこちら

入退院支援の活動からつなぐ看護へ

ー 外来でのスクリーニングを看護計画に直結させる ー



[看護業務の効率化先進事例アワード2020 優秀賞受賞 公立羽咋病院](#)

▲ カーソルを合わせ、Ctrlキーを押しながらクリックすると、試行した事例の詳細がご覧になれます

課題・背景

1 | 入院に関わる業務が煩雑で時間外業務が発生

- 入院100～120件/月 そのうち緊急入院が75%を占めている
- アセスメントシート・スクリーニングシート等全部で**27枚**の帳票類がある
- 予約入院、緊急入院時ともに病棟看護師が病棟を離れて外来で家族・患者から情報収集を実施する（患者からのみで情報収集できる場合は、病棟でする場合あり）
- 高齢化の進展と家族関係の希薄化により、情報収集・入院説明に時間を要する

2 | 在宅-外来-病棟との情報の伝達・共有が不十分

- 帳票類が多くあるため、情報の重複や書き漏れ等が原因で、情報伝達に有効活用できていない
- 予約入院の患者情報は紙媒体で外来で管理され、病棟では共有できていなかった

元気で長く働き続けられる職場づくり

1 | 入院に関わる業務効率化

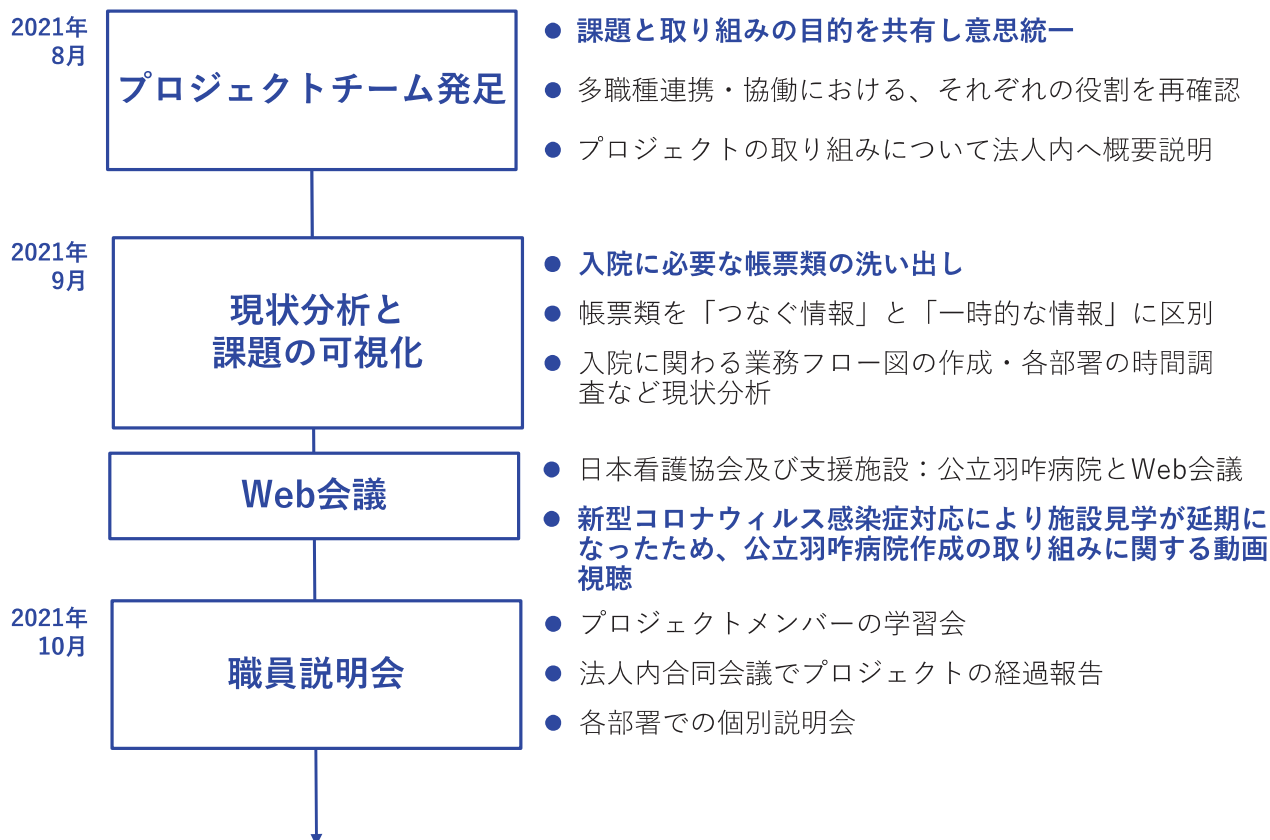
- 帳票類の整理と電子ファイルへの一元化
- 業務の見直しで超過勤務の削減

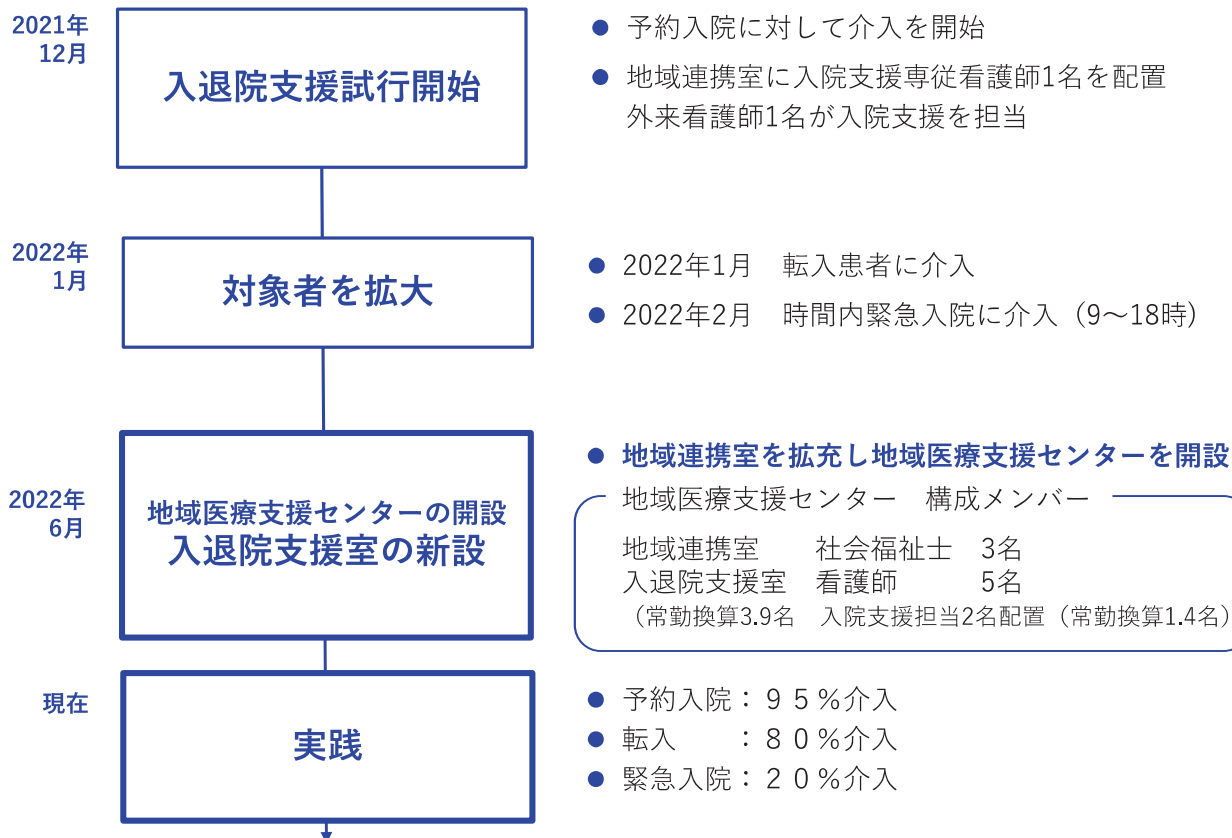
2 | 多職種連携協働・タスクシフトで、安全な医療・看護の提供体制を構築

- 効果的な情報共有と多職種連携・協働
- 早期にアセスメントし介入の必要性を判断、スムーズな入院生活のスタート

3 | 働き手が減少する将来を見据えた中長期的な人材育成

取り組みの流れ





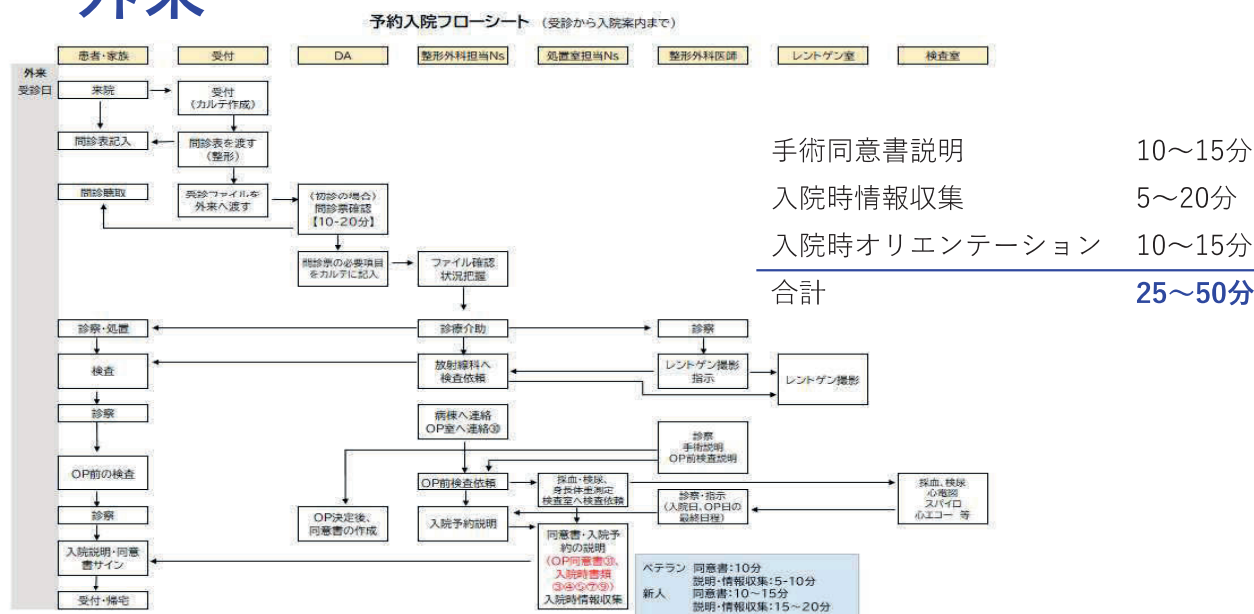
取り組み内容

1 入退院時の業務量調査

- 外来と病棟それぞれのフローシートを作成し、入退院に必要な業務を確認
- 入退院にかかる業務時間の調査

外来

受診から入院案内までの業務フロー



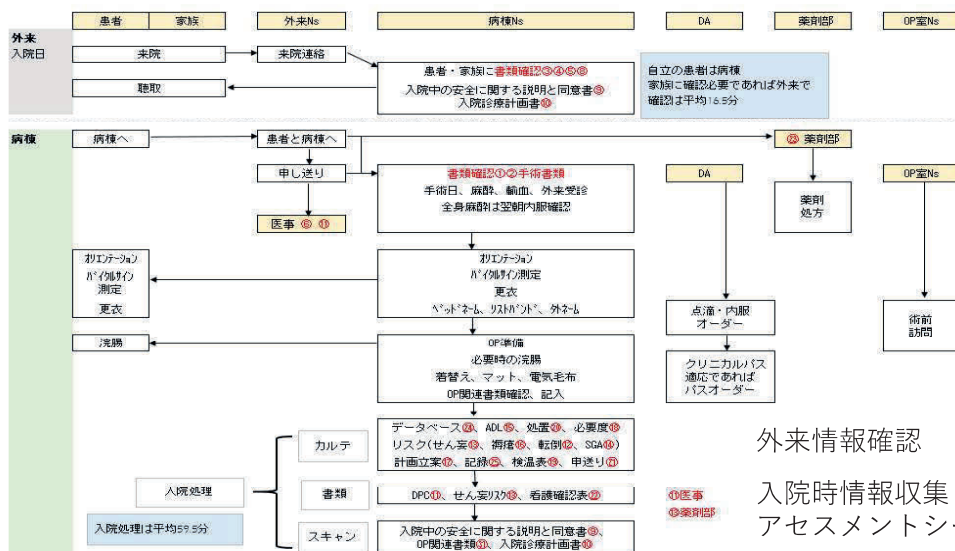
1 入退院時の業務量調査

病棟

入院時の業務フロー

入院フローシート（手術目的で翌日手術の場合）

2021.9.25作成



業務量調査の結果

▶ 入退院に関する帳票 : 27枚

患者1人の入院にかかる時間 : 80~135分

2 患者情報を入院前から共有

- 「入退院支援シート」の作成を検討したが、既存の活用していないツールを使用
- 予約入院登録を活用し、入院前から得た情報をデータベースやコメント欄に入力
- 入力後は関連部署へメール配信し、入院前日までに情報共有できるよう改善

3 職員への周知徹底

- 法人内会議でプロジェクトのキックオフと定期報告
- 関連部署へは、多職種連携を意識した各部署の特性と役割を相互理解できるよう、説明会と学習会を開催
- 取り組み半年後に「地域包括ケアシステムの推進における当院の役割」の勉強会を実施

1 業務時間の削減

○患者 1 人あたりの入院にかかる時間

外来

予約入院決定日：15～35分削減

入院日：15分削減

病棟

業務全体で20～25分削減

2 帳票類の整理・削減

入退院に関する帳票 27枚 ▶ 24枚

3 情報共有の円滑化

- 必要な部署がタイムリーに情報を見ることができる
- 入院が決定したときから、退院を見据えた多職種連携により意思決定支援が充実・スムーズにケアへ移行
- 退院困難要因を早期に抽出し、**4日以内**に退院支援担当者を決定

1 働きがいと人材育成

- 常勤職員の割合の増加
入退院支援室には常勤看護職員 1 名・非常勤看護職員 4 名 計 5 名の看護職員を配置
その後、入退院支援にやりがいを感じた**非常勤 2 名が常勤へ雇用変更**
- 入退院支援に関する意識の向上

2 多職種連携協働で入退院支援の充実

- 入院後、早期に患者・家族と現状・治療方針・在宅移行の可能性について話し合う職場風土
- 入院支援専従看護師は情報を共有し、多職種連携協働のキーパーソン

1 共通点

- 必要な情報の記載漏れが発生しないよう取捨選択に留意しながら帳票類の整理をした
- 情報の一元化で、各部署の情報共有がスムーズになった
- 退院困難要因を早期に把握し、多職種協働が展開できた

2 異なった点

- 公立羽咋病院では情報の一元化で「入退院支援シート」「つなぐ看護シート」の作成が効果を上げる要因となっていた。当院では新たなシート（帳票）の作成は可能だったものの、他帳票類との連動ができず運用が困難であったため、「入退院支援シート」「つなぐ看護シート」シートの作成は保留とした

3 当院独自の工夫点

- 新たなシート作成は保留としたが、必要な情報をタイムリーに参照できる方法を検討した。電子カルテ内で活用していない既存のツール（予約入院登録・コメント欄など）を利用開始し情報共有する手段とした

今後の展望

地域住民の「生きる」を支えて看護のプレゼンス向上

- 入院に関する業務の効率化
 - ・ 入退院支援シートの作成と既存の電子カルテ等を活用した情報の一元化
 - ・ 地域の施設や在宅サービス関係者と共有し、スムーズなケア移行を目指す
- 意思決定支援に積極的に介入し地域住民の「生きる」を支える

導入のポイント

- プロジェクトチームをつくり目的を共有する
- 院内での周知徹底とコンセンサスを得る
- 既存の電子カルテのシステムの未使用項目の活用等、既存機能の再活用を検討

令和4年度厚生労働省補助金事業
看護業務効率化先進事例収集・周知事業 報告書

令和5年3月

公益社団法人 日本看護協会労働政策部
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-8-2
TEL : 03 (5778) 8553 FAX : 03 (5778) 5602
E-mail : kangorodo@nurse.or.jp

